鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　２８

平成２３年度発掘調査報告

（第１分冊）

若宮大路周辺遺跡群

極楽寺旧境内遺跡

宝　蓮　寺　跡

覚園寺旧境内遺跡

若宮大路周辺遺跡群

由比ガ浜中世集団墓地遺跡

平成２４年３月

鎌倉市教育委員会

宝蓮寺跡　第６面全景

覚園寺旧境内遺跡　Ⅰ区３ｄ面全景

ご　あ　い　さ　つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ６割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成16～19及び21年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として12ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成24年３月30日

鎌倉市教育委員会

例　　言

1　本書は平成23年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。

2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総　目　次

(第１分冊)

ごあいさつ・・Ⅰ
例言・・Ⅱ
目次・・・Ⅲ
本誌掲載の平成１６～１９・２１年度発掘調査地点一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅵ
平成２３年度調査の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅶ
調査地点位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅹ

１　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町三丁目４２５番１の一部外地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

２　極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺二丁目９４８番８地点
第一章　調査地点の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第三章　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第四章　まとめと考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

３　宝蓮寺跡（No.374）佐助二丁目９０５番３地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137

４　覚園寺旧境内遺跡（No.435）二階堂字会下３５１番１地点
第一章　調査地点の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
第二章　調査の概略・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・174
第三章　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・176
第四章　まとめと考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・205

５　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目１１番２地点
第一章　調査の経緯・・239
第二章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・239
第三章　調査経過・・247
第四章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・250
第五章　まとめ・・・296

６　由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）由比ガ浜四丁目１１０７番３２地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・329
第二章　調査経過・・334
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・338
第四章　まとめ・・・357

(第２分冊)

例言・・・Ⅱ
目次・・・Ⅲ

７　清涼寺跡（No.183）扇ガ谷四丁目５５６番４外地点
第一章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第二章　発見した遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第三章　まとめ・・・49

８　今小路西遺跡（No.201）由比ガ浜一丁目１５７番７外地点
第一章　調査地点概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
第三章　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
第四章　まとめと考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148

９　西御門遺跡（No.325）西御門一丁目５５番５地点
第一章　本調査地点の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・184
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
第四章　まとめ・・・209

10　今小路西遺跡（No.201）由比ガ浜一丁目２１３番１２地点
第一章　調査の概観・・232
第二章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・237
第三章　まとめ・・250

11　名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目１８８８番の一部地点
第一章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・265
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・271
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・276
第四章　まとめ・・・301

12　田楽辻子周辺遺跡（No.33）浄明寺一丁目５５６番６外地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・328
第二章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・339
第三章　基本土層・・340
第四章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・341
第五章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・349

本誌掲載の平成１６～１９・２１年度発掘調査地点一覧

第１分冊

	遺　跡　名	所　在　地	調　査　原　因	遺跡種別	調査面積	調 査 期 間
①★	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町三丁目 425 番１の一部外	個人専用住宅（地盤の柱状改良）	都　市	28㎡	平成 17 年１月 25 日～平成 17 年２月９日
②◎	極楽寺旧境内遺跡 (N0,291)	極楽寺二丁目 948 番８	個人専用住宅（鋼管杭構造）	社　寺	50.5㎡	平成 17 年４月７日～平成 17 年５月 20 日
③◎	宝 蓮 寺 跡 (N0,374)	佐助二丁目 905 番３	個人専用住宅（鋼管杭構造）	社　寺	72.99㎡	平成 17 年４月７日～平成 17 年７月８日
④◎	覚園寺旧境内遺跡 (N0,435)	二階堂字会下３５１番１	個人専用住宅（鋼管杭構造）	社　寺	30㎡	平成 17 年６月 22 日～平成 17 年８月 31 日
⑤◎	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町二丁目１１番２	個人専用住宅（鋼管杭構造）	都　市	44㎡	平成 17 年７月 12 日～平成 17 年８月 31 日
⑥◎	由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (N0,372)	由比ガ浜四丁目 1107 番 32	個人専用住宅（鋼管杭構造）	都　市	73.5㎡	平成 17 年９月 16 日～平成 17 年 10 月 25 日

第２分冊

	遺　跡　名	所　在　地	調　査　原　因	遺跡種別	調査面積	調 査 期 間
⑦◎	清　涼　寺　跡 (N0,183)	扇ガ谷四丁目 556 番４外	個人専用住宅（地盤の柱状改良）	社　寺	60.00㎡	平成 17 年７月 21 日～平成 17 年９月 30 日
⑧◎	今 小 路 西 遺 跡 (N0,201)	由比ガ浜一丁目 157 番７外	個人専用住宅（鋼管杭構造）	都　市	63.75㎡	平成 17 年 10 月 31 日～平成 18 年１月 18 日
⑨▲	西　御　門　遺　跡 (N0,325)	西御門一丁目５５番５	個人専用住宅（地盤の柱状改良）	都　市	30.00㎡	平成 18 年４月４日～平成 18 年５月 29 日
⑩▲	今 小 路 西 遺 跡 (N0,201)	由比ガ浜一丁目２１３番１２	個人専用住宅（地下室・鋼管杭構造）	都　市	10.50㎡	平成 19 年３月 12 日～平成 19 年３月 30 日
⑪◇	名越ヶ谷遺跡 (N0,231)	大町四丁目 1888 番の一部	個人専用住宅（地盤の柱状改良）	都　市	24.00㎡	平成 19 年７月２日～平成 19 年７月 26 日
⑫■	田楽辻子周辺遺跡 (N0, 33)	浄明寺一丁目５５６番６外	個人専用住宅（鋼管杭構造）	都　市	39.00㎡	平成 21 年４月 22 日～平成 21 年５月 19 日

★印は平成１６年度実施の発掘調査
◎印は平成１７年度実施の発掘調査
▲印は平成１８年度実施の発掘調査
◇印は平成１９年度実施の発掘調査
■印は平成２１年度実施の発掘調査

平成２３年度調査の概観

平成23年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査１件を含む８件であり、調査面積は711.5㎡であった。これを前年度の14件、746㎡と比較してみると件数は６件の減少となり、調査面積も34.5㎡の減少となった。しかし調査面積は平均で１件あたり約88.94㎡（前年度は53.29㎡）であり、１件あたりの面積は前年度より大きく増加している。

調査原因は個人専用住宅の建設が５件、店舗等併用住宅の建設が３件である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が２件（25％）、地盤改良工事が６件（75％）となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査面積及び調査期間等については「平成23年度調査地点一覧」を参照。）

１　桑ヶ谷療病院跡（No.294）

長谷三丁目に位置する。長谷寺の北側に存在する谷戸の中ほどに位置する。宅地の地盤面は谷戸中央を通る道路よりも1.5ｍほど上にあるが、遺構は道路より50㎝ほど上で確認される。地盤の表層改良工事を行う店舗併用個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、泥岩による整地層が数層、土留めの痕跡等が確認でき、整地層上面では建物跡など生活痕跡を確認した。

２　米町遺跡（No.245）

大町二丁目に位置する。県道鎌倉・葉山線の南側、名越ヶ谷と呼ばれる大規模な谷戸の入り口にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀代の整地層、井戸等が出土した。過去に近隣で実施した発掘調査成果とあわせ、当時の都市民の土地利用状況を明らかにする上で貴重な資料となった。

３　報国寺遺跡（No.306）

浄明寺二丁目に位置する。報国寺の存する谷戸内にあり、地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀半ばに岩盤を削平して作りだした平場の痕跡や、14世紀代の礎板を伴う柱穴、囲炉裏、面取り柱の一部などが出土した。絵図等から、報国寺の旧境内であることが明らかになっており、境内地の土地利用状況やその変遷を復元するうえで重要な資料となった。

４　名越ヶ谷遺跡（No.231）

大町三丁目に位置する。県道鎌倉・葉山線の北側、名越ヶ谷と呼ばれる大規模な谷戸の入り口にある。地盤の表層改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともなって発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀にかけての整地層を確認し、その上面で井戸数基と柱穴など建物・生活の痕跡を検出した。

５　今小路西遺跡（No.201）

扇ガ谷一丁目に位置する。今小路の西側に少し入った場所にある。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする店舗併用個人住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、近現代のゴミ穴に壊されてはいたものの、中世では13世紀代から14世紀にかけての泥岩による整地層が数層存在し、礎板を伴う柱穴など建物の痕跡が残されていることが明らかとなった。地下水位も高く、木製品の残存状況も良好である。武家地と想定される場所での調査であり、当時の生活を知る上で貴重な資料である。

６　円覚寺門前遺跡（No.287）

山ノ内に位置し、県道を挟んで円覚寺の南西側向かいにある。地盤の柱状改良工事を内容とする集合住宅併用個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世は14世紀代の整地層、泥岩で護岸を施した溝等が出土している。

７　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町二丁目に位置する。ＪＲ鎌倉駅の北東側にある。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層、かわらけ集中土坑が出土している。

８　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町二丁目に位置する。大巧寺の西側参道と、小町大路の接する南側角に存する。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、旧小町大路の一部が出土した。中世鎌倉の都市計画のあり方を検討するうえで重要な発見であった。

平成２３年度発掘調査地点一覧

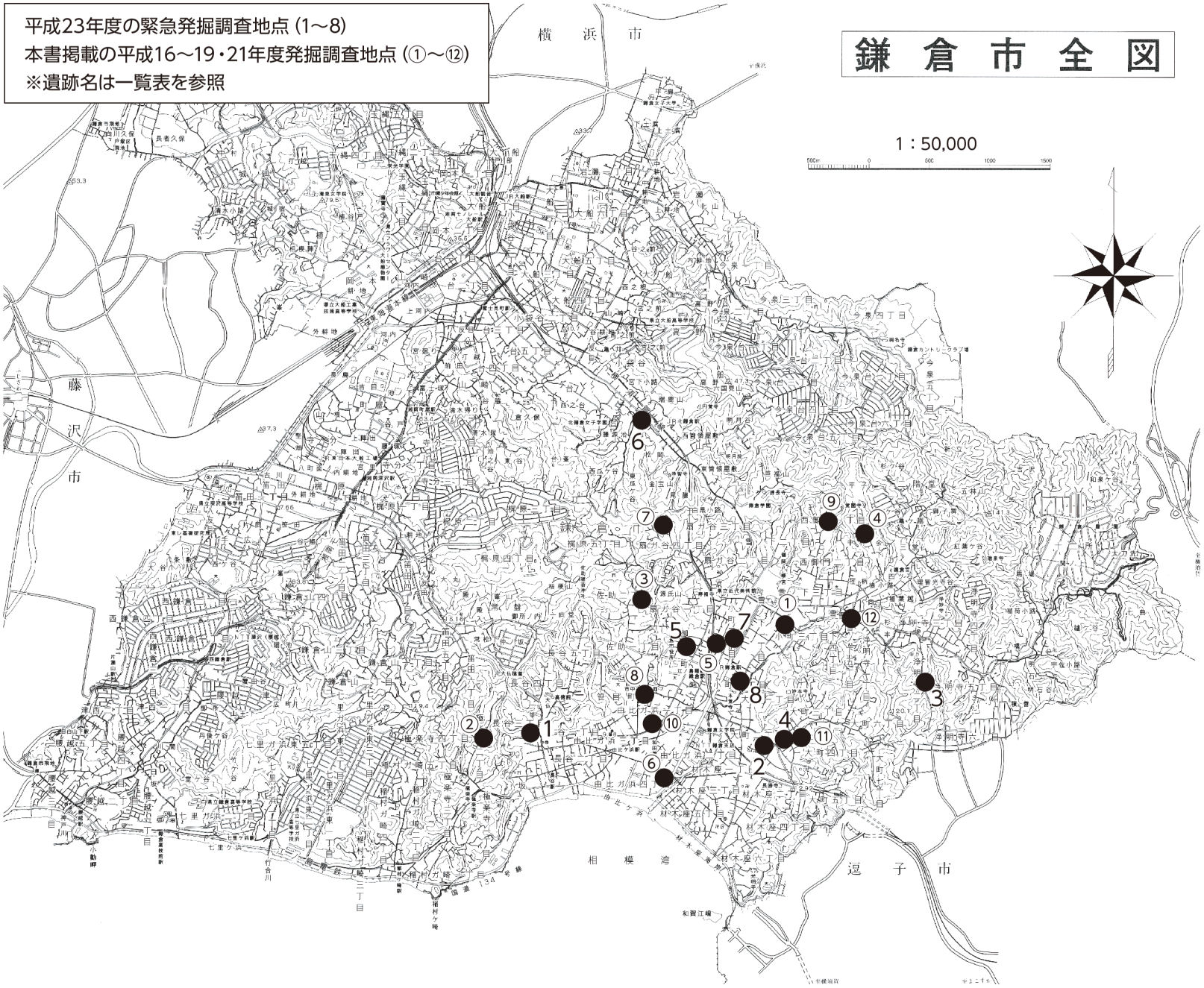
	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	桑ヶ谷療病院跡 （№ 294）	長谷三丁目 630 番 1	店舗併用住宅 （鋼管杭構造）	病院跡 遺物散布地	107.00㎡	平成 23 年 1 月 28 日 ～平成 23 年 4 月 28 日
2	米町遺跡 （№ 245）	大町二丁目 9 番 10	個人専用住宅 (柱状改良工事）	都　市	72.00㎡	平成 23 年 4 月 25 日 ～平成 23 年 7 月 8 日
3	報国寺遺跡 （№ 306）	浄明寺二丁目 474-8,9	個人専用住宅 （柱状改良工事）	寺　院	72.50㎡	平成 23 年 6 月 6 日 ～平成 23 年 8 月 26 日
4	名越ヶ谷遺跡 （№ 231）	大町三丁目 2354 番 1	個人専用住宅 （表層改良工事）	屋敷跡	58.00㎡	平成 23 年 7 月 22 日 ～平成 23 年 10 月 3 日
5	今小路西遺跡 （№ 201）	扇ガ谷一丁目 145 番 3、146 番 2	店舗併用住宅 （鋼管杭構造）	都　市	120.00㎡	平成 23 年 9 月 26 日 ～平成 24 年 1 月 23 日
6 ◎	円覚寺門前遺跡 （№ 287）	山ノ内 1338 番	賃貸併用住宅 （柱状改良工事）	都　市	120.00㎡	平成 24 年 1 月 12 日 平成 24 年 3 月 31 日～
7 ◎	若宮大路周辺遺跡群 （№ 242）	小町二丁目 281 番 2	個人専用住宅 （柱状改良工事）	都　市	104.00㎡	平成 24 年 1 月 23 日 ～平成 24 年 3 月 31 日
8 ◎	若宮大路周辺遺跡群 （№ 242）	小町一丁目 331 番 1	個人専用住宅 （柱状改良工事）	都　市	58.00㎡	平成 24 年 3 月 26 日 ～平成 24 年 3 月 31 日

★印は平成 22 年度からの継続調査を示す。

◎印は平成 24 年度への継続調査を示す。

鎌倉市全図

平成23年度の緊急発掘調査地点（1～8）
本書掲載の平成16～19・21年度発掘調査地点（①～⑫）
※遺跡名は一覧表を参照



若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町三丁目 425 番 1 の一部外

例　　言

1．本報は「若宮大路周辺遺跡群（No.242）」内の一部、小町三丁目425番1一部外地点（略称WA0425）における個人専用住宅の建築にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査期間：平成17年（2005）1月25日～同年2月9日　調査面積：28.00㎡
現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調　査　員：後藤健吾・須佐直子・太田美智子・宇都洋平・小野夏菜・栂岡渓音・赤堀祐子
調査補助員：橋本和之・銘苅春也・平山千絵・大塚悠介
作　業　員：秋田公佑・中須洋二・堀住　稔(鎌倉市シルバー人材センター)
協力機関名：(社)鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所

4．本報執筆は、原・宇都が稿を草した。
本報の挿図・写真図版の作成には、小野・赤堀・原が行った。
本報の掲載写真は、遺構の全景・個別を宇都・原があたり、出土遺物を須佐(仁)　が撮影した。
発掘調査における出土遺物、図面・写真などは鎌倉市教育委員会が保管している。

5．本報の凡例は、以下の通りである。
・挿図縮尺　　全側図：1/50　遺構図1/40　遺物図1/3
・遺物図　　ー・ー・ーは釉薬の釉際を示し、黒塗りは主にかわらけの墨書痕や灯明皿付着の油煤煙を表現している。さらに遺物観察表において手づくねかわらけは外底径の計測値は外底指頭痕と口縁部下位との稜部の数値を表わした。
・使用名称　　本書で使用する用語のうち、「土丹（どたん）」は泥岩、「鎌倉石」は池子層に顕著な凝灰岩質砂岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する建物礎石に利用可能な扁平円礫を指す。

6．本遺跡の現地調査及び資料整理に際して多くの方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
秋山哲夫・鍛冶屋勝二・菊川　泉・菊川英政・古田戸俊一・五味文彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・玉林美男・中野晴久・松尾宣方・馬淵和雄

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5

1．遺跡の位置と地形
2．遺跡の歴史的環境

第二章　調査の概要 …… 9

1．調査の経過
2．測量軸の設定
3．層序

第三章　検出遺構と出土遺物 …… 12

1．上層の遺構と遺物
2．下層の遺構と遺物

第四章　まとめ …… 28

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図 …… 5
図２　調査地点と周辺遺跡 …… 6
図３　国土座標と調査区位置 …… 9
図４　調査区壁土層断面 …… 11
図５　上層遺構全測図 …… 12
図６　下層遺構全測図 …… 13
図７　上・下層遺構各土坑 …… 14
図８　溝１ …… 15
図９　溝２ …… 16
図10 溝３ab土層断面図 …… 17
図11 上・下層遺構各ピット …… 18
図12 各土坑・ピット出土遺物 …… 19
図13 溝１・２出土遺物 …… 20
図14 溝３・遺構外出土遺物 …… 21

表　目　次

表１　遺跡周辺の調査地点一覧表 …… 7
表２　遺物観察表（１）…… 23
表３　遺物観察表（２）…… 24
表４　遺物観察表（３）…… 25
表５　遺物観察表（４）…… 26
表６　遺物観察表（５）…… 27
表７　遺物分類別出土数量・比率表 …… 29
表８　溝１かわらけ型式別出土点数 …… 29
表９　溝１かわらけ器種別出土点数 …… 29

図　版　目　次

図版１　１～３ 上層遺構全景・各遺構 …… 30
図版２　１～３ 上層遺構土坑・ピット …… 31
図版３　１～３　下層遺構全景・各遺構 …… 32
図版４　１～７　遺構、調査区壁土層断面 … 33
図版５　土坑・ピット出土遺物…… 34
図版６　溝２出土遺物（1）…… 35
図版７　溝２出土遺物（2）…… 36
図版８　溝3a出土遺物 …… 37
図版９　溝3b出土遺物 …… 38

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置と地形

若宮大路周辺遺跡群（県遺跡台帳No.242）は、鎌倉市中央部低地の北西部を占めており、鶴岡八幡宮から由比ヶ浜に至る鎌倉市基幹道路の若宮大路を中軸として、その東西両側を含んだ範囲を指した遺跡名称である。本遺跡地の範囲は若宮大路の東側で若宮大路御所を包括する「北条小町邸跡（同台帳No.282）」と「宇津宮辻子幕府跡（同台帳No.239）」を除く地域、また若宮大路の西側で鶴岡八幡宮寄りに位置した「北条時房・顕時邸跡（同台帳No.278）」を除いた範囲であり、北辺は鶴岡八幡宮社頭の東西路と「北条高時邸跡（同台帳No.281）」、西辺は今小路、東辺は滑川・小町大路の一部、南辺は大町大路（下馬四角で交差する東西路）に囲まれ南北約500 ～ 700mの広範囲に及んでいる。調査地点は、JR鎌倉駅から北東方向へ約500mで、若宮大路社頭から東方215mほど進んだ横大路と小町大路の交差点（塔ノ辻）に近い鎌倉市小町三丁目425番１の一部外に所在している。

現地表の海抜高をみると、本調査地点は10.20 ～ 40mほどである。周辺の地形は小町大路沿いでは日蓮辻説法碑辺りで海抜高約7.9mと北に向かって高くなり、また若宮大路社頭辺りで海抜高9.8mを測り、横大路沿いに東へ向かい緩やかに上がった地形を呈している。次に中世基盤層（中世地山）とされる黒褐色粘質土（暗茶褐色粘質土も同類の中世地山）の上面海抜高を比較してみると、小町大路を約150m南方の地点23（北条小町邸跡：雪ノ下一丁目935番地点・賀茂歯科用地）では海抜8.3m前後を計り、本調査地点へ向かい上っている。若宮大路東辺沿いに位置した地点28（同遺跡内：雪ノ下一丁目377番７地点・紅谷ビル用地）が約8.1mを測り、東へ向かって緩やかな傾斜を持ちながら高くなっている。従って本調査地点周辺は滑川右岸に形成された微高地の一角を占めていたことがわかる。

図１　調査地点位置図

図２　調査地点と周辺遺跡

2.　遺跡の歴史的環境

本遺跡は、鶴岡八幡宮の社頭より若宮大路を中軸にして東辺の小町大路周辺、西辺の今小路（武蔵大路）、南辺の大町大路を含んだ広範囲の地域である。本調査地点はその北東隅、小町大路北端で宝戒寺門前の「塔ノ辻」南隣した位置である。本調査地点前を南北に走る小町大路については、『吾妻鏡』建久二年(1191)三月四日の条に南風が烈しく丑の刻に小町大路の辺が失火し、北条義時・時房などの邸以下人屋数十軒が焼亡、鶴岡八幡宮、大蔵幕府も炎上したとあるのが記事の初見である。また嘉禎元年(1235)六月二十九日の条には、明王院供養で将軍頼経が宇津宮辻子御所の南門を出て小町大路を北に行き、塔ノ辻を東に向かったとの記事がある。さらに小町大路の「小町」の名は、『吾妻鏡』建長三年(1251)十二月三日条と、文永二年(1265)三月五日条の二度にわたり経済統制を目的とする何箇所かの町屋免許地を規定した鎌倉幕府法令に登場している。 免許地は小町の他に大町、米町（穀町）、魚町、和賀江、亀谷辻、気和飛坂（化粧坂）山上、大倉辻などに与えられ、そこで日常的な商品売買が行われていたという。従って塔ノ辻に近いこの付近は鎌倉幕府の中枢域であるとともに、小町大路で町屋の多くと連なり和賀江津へ至り、さらに六浦道から朝比奈超えで外港六浦津へと繋がる経済的な動脈であったと想像され、小町大路は人や物資が盛んに往来し、集散した中世都市鎌倉の中では繁華な地域であったと思われる。

宝戒寺はもと上野寛永寺末の天台宗、金竜山釈満院円頓と号す。開山は円観慧鎮、開基は後醍醐天皇である。元弘三年(1333)東勝寺で自刃した北条高時の菩提を弔うために高時の邸跡に後醍醐天皇が建立したと伝える。同寺に所蔵する江戸末期所作（18世紀中葉の嘉永頃）の『宝戒寺境内領地図』には諸堂の位置とともに、その周囲に門前屋敷や畠を、背後の谷地には土地所有者及び永高が明示され、近世末の寺容が描かれている。この絵図の門前屋敷に記された人名から察すると、本調査地点は宝戒寺惣門の南側に位

置した恐らく四郎衛門または吉蔵の屋敷の一部であった可能性が考えられる。

なお、調査地点周辺の発掘調査事例については「表１ 周辺遺跡の調査地点一覧表」を参照されたい。

【参考文献】
臼井永二編　1986 『鎌倉事典』東京堂出版
貫　達人　1971 「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第８号
貫　達人・川副武胤　1980 『鎌倉廃寺事典』
三浦勝男　1992『鎌倉の古絵図』Ⅲ（再版）　鎌倉国宝館

表１　周辺遺跡の調査地点一覧表（図２）

◎若宮大路周辺遺跡群（№242）

１.小町２－373－１の一部（原 1998 未報告）
２.小町２－409－９外(馬淵・伊丹 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第２分冊)』)
３.小町２－402－５（手塚・野本 2000)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第１分冊)』
４.小町２－345－２（馬淵 1985『小町二丁目345番２地点遺跡』）
５.小町１－325－イ(佐藤・原 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10(第３分冊)』)
６.小町１－322－２（菊川 1987 未報告）
７.小町１－321－１（宮田 1996『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』同発掘調査団）
８.小町１－322－１（宮田 1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』）
９.小町１－319－２（松尾ほか 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』）
10.小町１－309－５（斎木 1983『小町一丁目309番５地点発掘調査報告書』）
11.小町１－309－４（松尾ほか 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』）

◎北条高時邸跡（№281）

12.小町３－426－３（原・佐藤 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第２分冊)』）
13.小町３－451－１（菊川・森 2004『小町三丁目451番１地点』）

◎政所跡（№247）

14.雪ノ下３－965（手塚・瀬田 1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告書８』）
15.雪ノ下３－966－１（手塚・瀬田 1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告書８』）
16.雪ノ下３－986－４（宗臺・馬瀬 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
17(第１分冊)』）17.雪ノ下３－988（手塚・田畑 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９(第３分冊)』）
18.雪ノ下３－987－１・２（手塚・宮田 1991『政所跡』同発掘調査団）
19.雪ノ下３－970－２外（野本 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15(第２分冊)』）

◎北条小町邸跡(No.281)

20.雪ノ下1－407－3の一部（原ほか 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第2分冊)』）
21.雪ノ下1－440の一部（馬淵・鍛冶屋・松原 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26(第1分冊)』）
22.雪ノ下1－432－2（菊川 1988『鎌倉市埋蔵文化財近調査報告書5』）
23.雪ノ下1－432－1（松尾ほか 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』）
24.雪ノ下1－400－1（馬淵・鍛冶屋・松原 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第2冊)』）
25.雪ノ下1－401－5外（馬淵・鍛冶屋・松原 2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』）
26.雪ノ下1－395（菊川 1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』）
27.雪ノ下1－374－2（玉林ほか 1985『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』）
28.雪ノ下1－377－6・7（馬淵・岡・秋山 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第2分冊)』）
29.雪ノ下1－372－7（馬淵 1984『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』）
30.雪ノ下1－371－1（馬淵 1985『北条泰時・時頼邸跡』同遺跡発掘調査団）
31.雪ノ下1－369外（田代 1989 未報告）
32.雪ノ下1－370－1（土屋・宗臺 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第1分冊)』）
33.雪ノ下1－369外（瀬田 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』）
34.雪ノ下1－369－1（原・秋山・須佐 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第2分冊)』）
35.雪ノ下1－419－3（玉林 1987『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』）
36.雪ノ下1－367－1・368－1（諸星・富田・森 2000『北条小町邸跡(泰時・時頼邸)』同遺跡発掘調査団）

◎宇津宮辻子幕府跡（№239）

37.小町2－390－2外（宇都 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26』）
38.小町2－374－1（原 1998『第22回神奈川県遺跡調査・研究会－発表要旨－』「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」）
39.小町2－361－1（手塚 1990 未報告）
40.小町2－361－1（原・小林・須佐 1996『宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書』同遺跡発掘調査団、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13(第2分冊)』）
41.小町2－354－2（松尾 1997 未報告）
42.小町2－354－12（熊谷・浜野・佐藤 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(第3分冊)』）
43.小町2－354－2（継 1993『第3回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』「宇津宮辻子幕府跡遺跡の調査－発表要旨－」）
44.小町2－389－1（原・佐藤 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第1分冊)』）

◎北条時房・顕時邸跡(No.278)

45.雪ノ下1－274－2（原・福田 1988『北条時房・顕時邸跡』同遺跡発掘調査団）
46.雪ノ下1－273－ロ(原 1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』）
47.雪ノ下1－272　(宗臺・宗臺 1998『鎌倉市埋蔵文化債緊急調査報告書4』）
48.雪ノ下1－271－1（原・田代 1989『北条時房・顕時邸跡』同遺跡発掘調査団）
49.雪ノ下1－265－3（田代・原 1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』及び宗臺・宗臺 1999『北条時房・顕時邸跡－中世都市鎌倉中心域の調査』同遺跡発掘調査団）

第二章　調査の概要

１．調査の経過

本調査地点は個人専用住宅の建設に先立つ発掘調査である。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事とするものであったため、埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断されたので鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下15～40cmまで表土が確認され、その直下は中世遺物包含層をほとんど含まずに上・下層遺構面（生活面）の存在が確認された。中世前期の遺構・遺物が明らかになり、建築工事による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断され、発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は平成17年1月25日に機材を搬入して、重機により試掘データに基づいて遺構面を傷つけないように地表下20cm程までの表土層を除去した後、以下を人力により掘り下げての遺構検出をおこなった。調査面積は28.0㎡が対象である。調査の結果、土坑、溝、柱穴列、ピットなどにより構成された遺構群が検出され、それに伴い12世紀末葉～13世紀後葉にかけての所産遺物のかわらけ・陶磁器類・金属製品などが検出された。同年2月9日までの間に必要な記録作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

【日誌抄】

1月25日(火)　調査区を設定して地表下20cmまで表土掘削。機材搬入とテント設営。

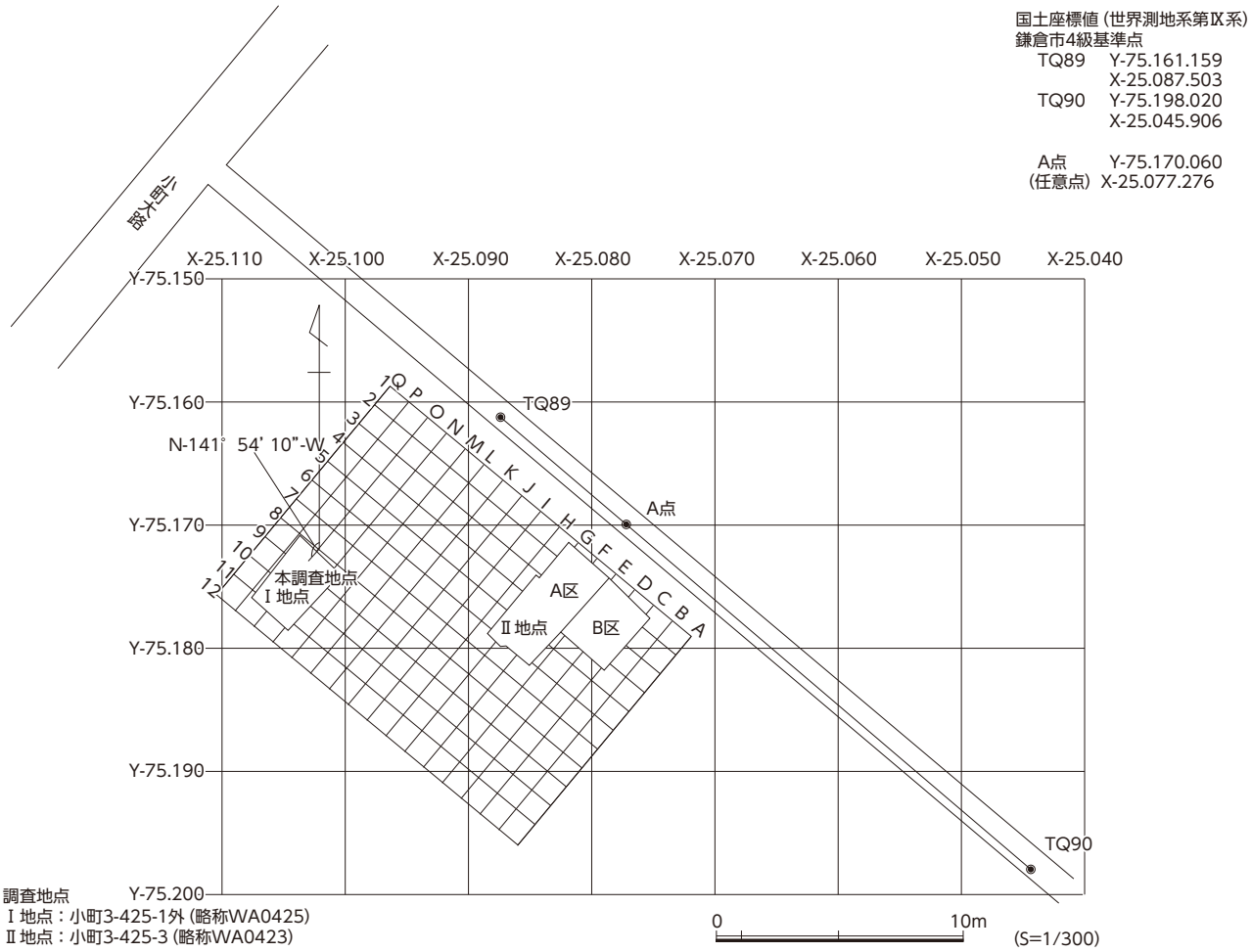


図３　国土座標と調査区位置

27日(木)　上層遺構の遺構確認作業。鎌倉市４級基準点を基として測量用方眼の設定。
28日(金)　測量用水準点の原点レベルを移動。
2月　1日(火)　上層遺構の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
3日(木)　下層遺構の全景及び溝３・柱列など個別遺構、調査区各壁の写真撮影。
5日(水)　下層遺構の平面図作成。
7日(月)　調査区東壁・西壁・北壁土層堆積の断面図を作成。拡張トレンチの調査実施。
9日(水)　現地調査終了。調査関係各方面に発掘調査終了の旨を連絡して機材撤収。

２．測量軸の設定

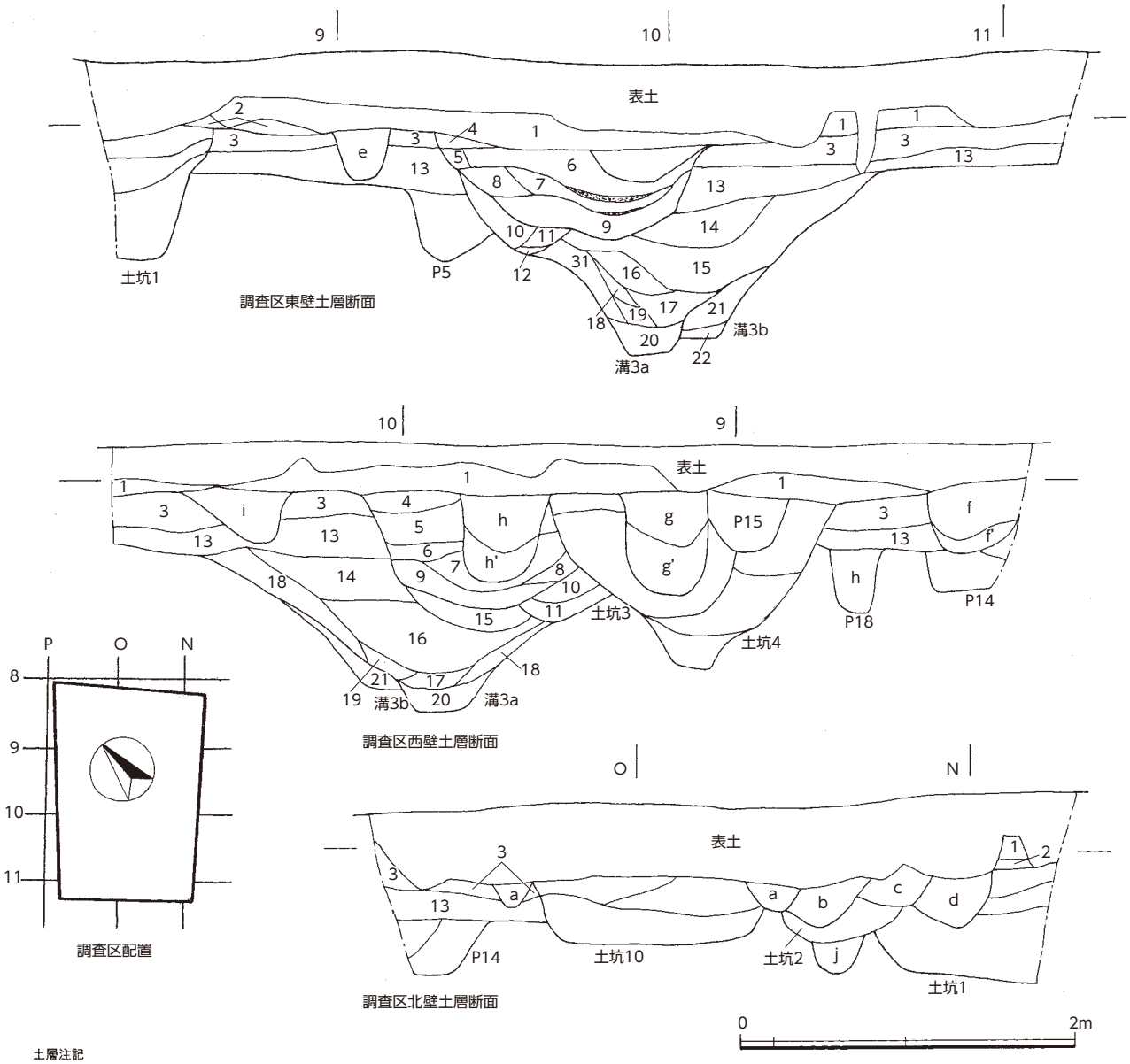
調査にあたって使用した測量軸の設定には、図３に示したように国土座標の数値（世界測地系第Ⅳ系）を用いており、測量グリットは調査区の軸方向にほぼ平行して南北の基準軸を設けⅠ地点として調査を実施した。また図３の東に隣接したⅡ地点（小町三丁目425番３地点・略称WA0423）は今回報告していないが、重複した調査期間（平成16年12月10～平成17年２月21日）で実施され、近接した地点から考えて同一敷地内の遺構検出も予想されたので測量方眼を統一して設定することにした。両地点の測量軸は調査地北側で宝戒寺南塀沿いを東西に走る路地面上に鎌倉市道路管理課が設定したTQ89・TQ90の市４級基準点（第Ⅳ座標系）を基準としている。この４級基準２点の関係から開放トラバース測量により算出して測量基準点にあたるグリット杭を設置している。さらに測量軸は東西軸と南北軸を２m方眼による軸線を配し、南北軸はA～Qのアルファベットの名称、東西軸に１～12の算用数字をそれぞれ付してグリット設定を行った。

現地調査で使用した国土座標は、日本測地系（座標AREA9）の国土座標数値であった。そこで整理作業の段階で国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2JGD』によって世界測地系第Ⅸ系の座標数値に準じて算出し直した数値を図３に示した。また海抜高の原点移動については、本調査地点北方で宝戒寺惣門の道路を挟んだ向かい側の地点に設置されている鎌倉市３級水準点(No.53210＝海抜標高9. 951ｍ)から調査地点のグリットO－12杭上(L=10.387m)とQ－11杭上(L=10.415m)へ仮水準点を移設した。なおグリットの南北軸方位はN―141°54′10″―Wである。

３．層序

現地表の海抜高は10.20～40mを計り、調査地は南から北へ向かって緩やかに上っていく宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を基に、現地表下10～40cmまで堆積していた近現代客土や攪乱を含んだ表土を人力で掘り下げて中世遺構の検出を実施した。図４のように調査区各壁面の土層堆積は遺構覆土を除くと、表土から中世地山面（中世基盤層＝黒褐色粘質土）まで概ね４層（1～3・13層）から構成され、３層及び13層の上面で確認したものを上層遺構（図5）、13層除去して表出した中世地山の上面で確認した遺構を下層遺構（図6）としてそれぞれ捉えてここに提示することにしたい。

表土を除去すると、調査区全体には１層にあたる厚さ10～20cmで茶褐色砂質土の締まりのない土層が観察された。この遺物包含層を取り除くと、やや締まりのある暗茶褐色粘質土の３層が海抜高約9. 95m前後で現れた。この層の上面で確認できたのが上層遺構である。次に第３・13層にあたる厚さ30cm前後の暗茶褐色土を掘り下げると、中世基盤層を構成した黒褐色粘質土の平坦な面を確認することができた。これが下層遺構の確認面で海抜高9. 60～70m付近であり、遺構には土坑、ピットに伴って屋敷を区画するような薬研堀の外郭溝が検出されている。



土層注記

1. 茶褐色砂質土：土丹粒, かわらけ片中量、小石, 炭粒少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
2. 暗灰色砂質土：貝砂を含み、かわらけ片, 土丹塊・粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
3. 暗茶褐色弱粘質土：かわらけ片を中量、炭粒を少量含む。粘性僅かに有り。締まり有り。

〈溝１〉
4. 暗茶褐色砂質土：かわらけ片を中量、土丹粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
5. 暗灰色砂質土：かわらけ片, 土丹粒を少量含む。粘性無し。締まり僅かに有り。
6. 暗灰色砂質土：土丹塊を中量、かわらけ片, 炭粒を少量含む。粘性無し。締まり有り。
7. 茶褐色弱粘質土：土丹塊・粒を含む。粘性有り。締まり有り。
8. 黒灰色砂質土：拳大の土丹塊を多量、かわらけ片, 炭粒を少量含む。粘性僅かに有り。締まりやや有り。
9. 茶褐色弱粘質土：土丹塊・粒を中量、かわらけ片を少量含む。粘性やや有り。締まりやや有り。

〈溝２〉
10. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒, 炭粒を少量含む。粘性やや有り。締まり有り。
11. 暗灰色弱粘質土：土丹塊, 炭粒を中量含む。粘性有り。締まり有り。
12. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒, かわらけ片を僅かに含む。粘性やや有り。締まり有り。

13. 暗茶褐色弱粘質土：かわらけ片, 土丹粒を中量含む。粘性僅かに有り。締まり有り。

〈溝３ａ〉
14. 暗灰色粘質土：土丹粒, 炭粒を少量含む。粘性やや有り。締まり有り。
15. 暗灰色弱粘質土：かわらけ片, 小石, 土丹粒, 炭粒を少量含む。粘性無し。締まり無し。
16. 暗灰色弱粘質土：かわらけ片, 土丹粒, 炭粒, 小石を少量含む。粘性無し。締まり無し。
17. 暗灰色粘質土：明黄褐色の地山の土がブロック状に中量混じる、炭粒を少量含む。粘性有り。締まり有り。
18. 暗灰色粘質土：土丹塊, かわらけ片, 炭粒を僅かに含む。
19. 暗灰色粘質土：土丹粒を中量含み、地山の土が混じる。粘性やや有り。締まりやや有り。
20. 黒褐色粘質土：地山の土がブロック状に混じる。粘性有り。締まり有り。

〈溝３ｂ〉
21. 黒褐色粘質土：砂が中量混じり、地山の土をブロック状に含む。粘性有り。締まり有り。
22. 明黄褐色粘質土：地山の土に似るが, 暗灰色粘質土の土がブロック状に混じる。粘性僅かに有り。締まりやや有り。

土層注記〈主にpit〉

a. 暗茶褐色砂質土：土丹塊, かわらけ片, 小石, 炭粒を中量含む。粘性無し。締まりやや有り。
b. 暗灰色砂質土：土丹粒, かわらけ片, 炭粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。
c. 暗茶褐色砂質土：土丹塊粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。
d. 暗茶褐色砂質土：土丹塊粒を中量、かわらけ片, 炭粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
e. 茶褐色砂質土：かわらけ片, 貝砂を多量、土丹塊・粒を中量、小石, 炭粒を少量含む。粘性僅かに有り。締まり有り。
f. 茶褐色砂質土：土丹粒, かわらけ片, 炭粒少量含む。粘性僅かに有り。締まり無し。
f’. 茶褐色砂質土：土丹粒を中量含む。粘性無し。締まり無し。
g. 茶褐色砂質土：土丹粒中量、かわらけ片, 炭粒少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
g’. 暗茶褐色砂質土：貝砂多量、土丹粒, かわらけ片中量、炭粒少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
h. 茶褐色砂質土：かわらけ片を中量, 土丹塊, 炭粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
h’. 暗灰色砂質土：かわらけ片, 土丹粒を少量含む。下層は薄い炭層。粘性無し。締まりやや有り。
i. 暗茶褐色砂質土：土丹粒中量、かわらけ片, 小石, 炭粒少量含む。粘性無し。締まり有り。
j. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒を少量含む。粘性有り。締まり有り。
k. 暗茶褐色砂質土：土丹粒, 炭粒を中量含む。粘性無し。締まりやや有り。

図４　調査区壁土層断面

第三章　検出遺構と出土遺物

１．上層の遺構と遺物

調査地点は、近世以降の削平や関東大震災後の後片付けなどによる整地で明瞭な地業層などの生活面を検出することはできておらず、上層の遺構は中世地山上に堆積した３層及び13層を掘り込んだ遺構から構成されている。従って、発見した遺構は上層から掘り込まれた可能性の高いものや、重複して新旧関係

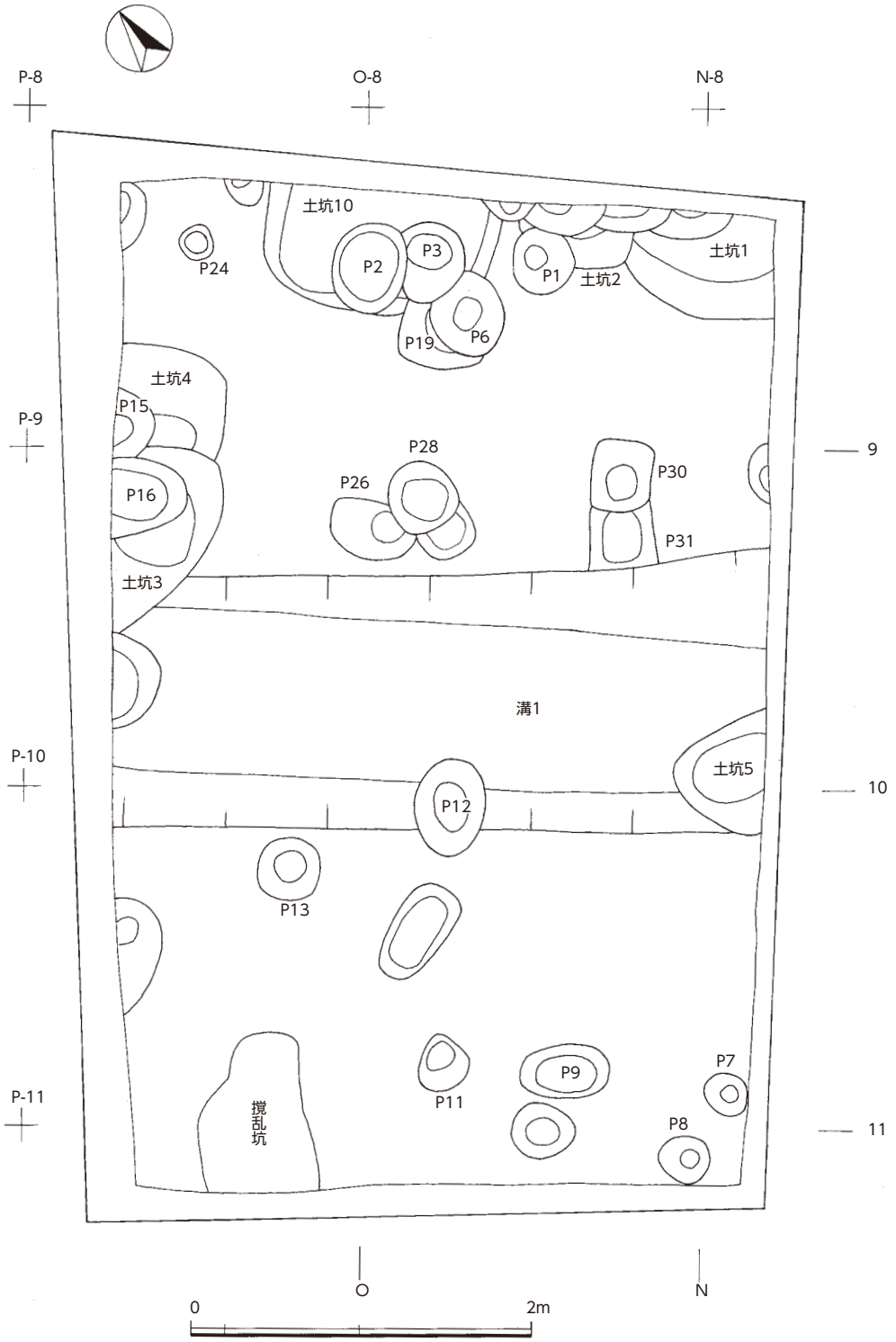


図５　上層遺構全測図

にあるものなど必ずしも同一層や生活面で確認した遺構はすべて同じ時期のものとは言えない。遺構は土坑、溝、ピットなどが認められ、それに伴う遺物はかわらけ、青磁・白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑・渥美窯の国産陶器、瓦器・瓦質製品、金属製品などが出土している。

土坑１（図７・12）：調査区北東隅の位置で土坑２やピットなどの掘り込みに壊されて検出され、さらに遺構の大半が調査区外に拡がり、全容は不明である。確認できた規模は東西軸95cm・南北軸65cm以上、深さ68cmで底面が平らな掘り方である。覆土は３層から構成されており、上・中層が茶褐色砂質土の薄い堆積、下層は粘性をもつ暗茶褐色土の厚手の堆積か認められた。出土遺物は図12－１がロクロ成形のかわらけ小皿、２が手づくね成形のかわらけ小皿で薄手器壁の粉質気味胎土である。３は龍泉窯青磁鎬蓮

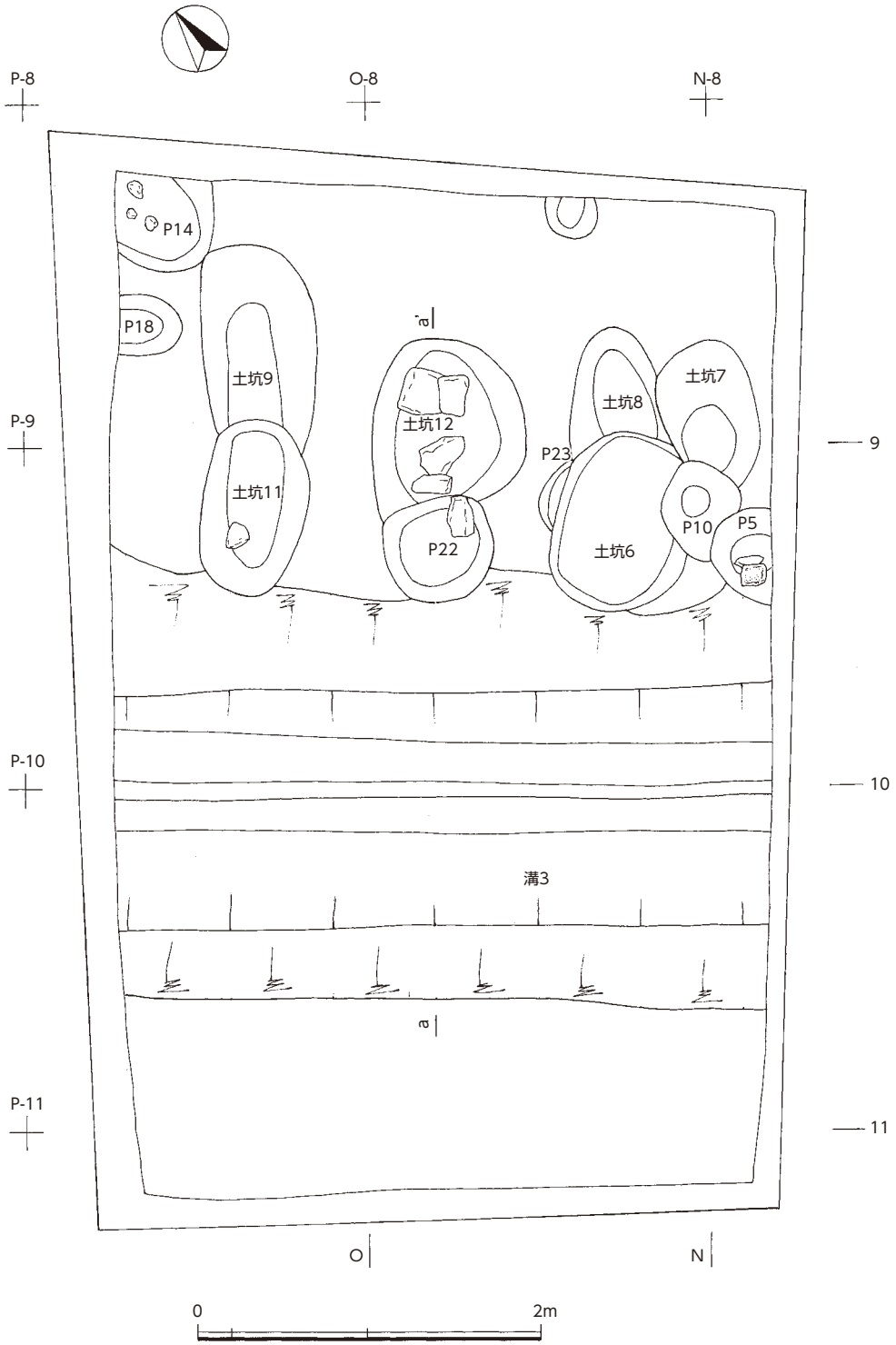
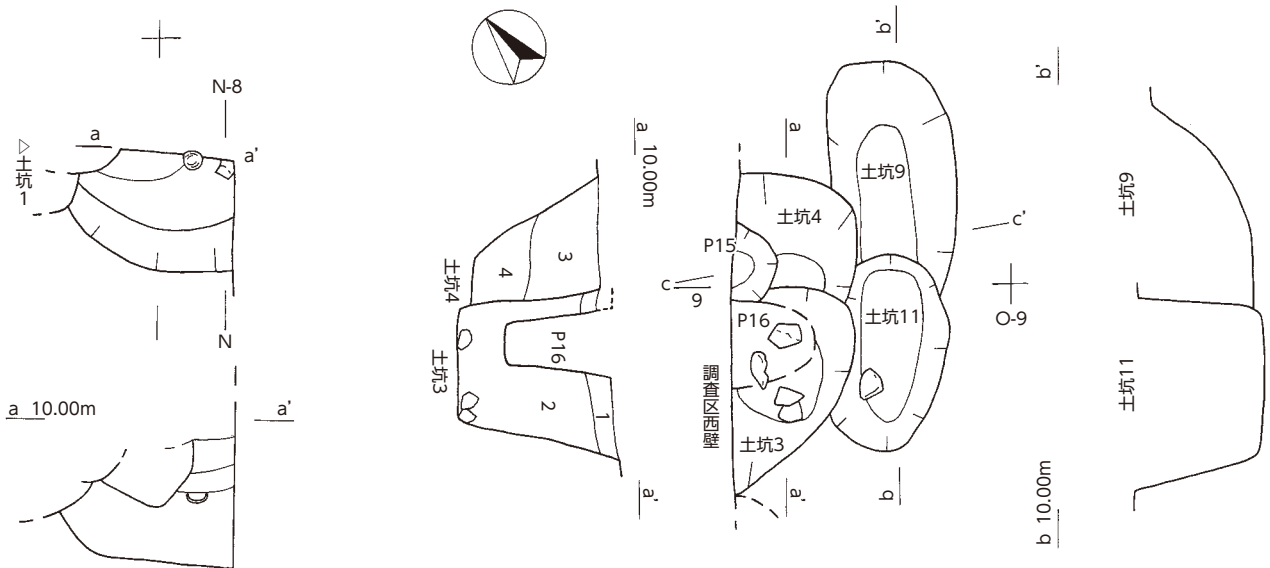


図６　下層遺構全測図

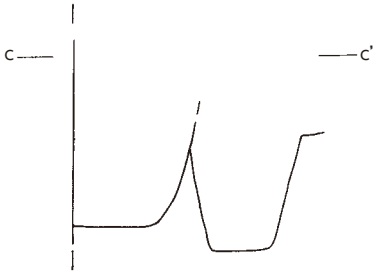


土坑１　土層注記

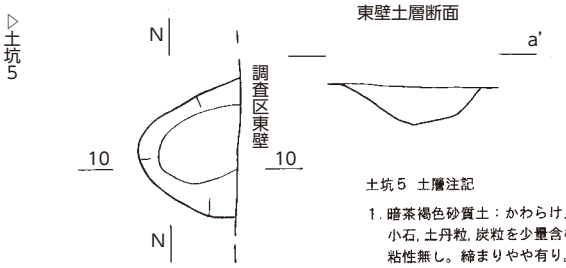
1. 茶褐色砂質土：土丹粒, かわらけ片, 炭粒を中量含む。粘性無し、締まりやや有り。
2. 茶褐色砂質土：土丹塊, 粒多量に含む。
3. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒, かわらけ片を少量含む。粘性やや有り。締まり有り。

土坑３・４　土層注記

1. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒, かわらけ片を中量、炭粒を少量含む。粘性わずかに有り。締まり有り。
2. 暗褐色砂質土：土丹粒を多量、かわらけ片を中量土丹塊, 炭粒, 小石を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
3. 暗茶褐色砂質土：貝砂, 土丹粒, かわらけ片, 炭粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。
4. 暗茶褐色砂質土：土丹粒, かわらけ片, 炭粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。

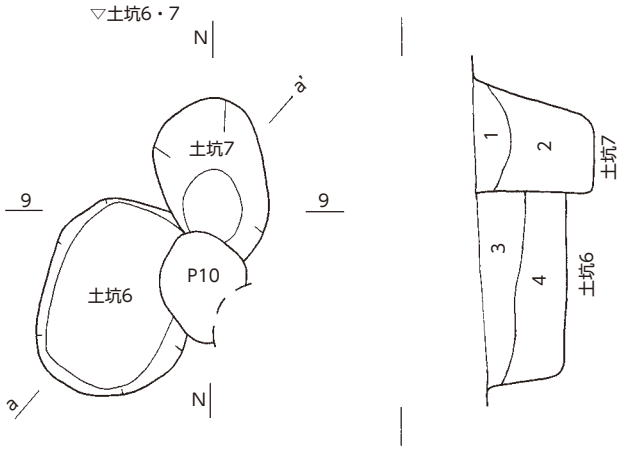


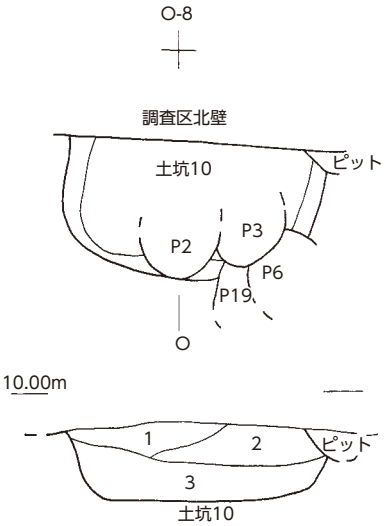
△土坑3・4・9・11



土坑５　土層注記

1. 暗茶褐色砂質土：かわらけ片を多量、小石, 土丹粒, 炭粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。





△土坑10

土坑６・７　土層注記

1. 茶褐色粘質土：土丹粒多量、かわらけ片, 炭化物少量含む。締まり無し。
2. 暗茶褐色粘質土：土丹粒, かわらけ片, 貝砂粒, 炭化物を少量含む。締まり有り。
3. 茶褐色弱粘質土：土丹塊・粒を多く含む。締まり無し。
4. 暗茶褐色粘質土：土丹粒, かわらけ片, 貝砂粒を少量含む。締まりやや有り。

土坑１０　土層注記

1. 茶褐色砂質土：かわらけ片を中量含む。粘性無し、締まりわずかに有り。
2. 茶褐色砂質土：かわらけ片, 土丹粒, 炭粒を中量含む。粘性有り。締まりやや有り。
3. 茶褐色砂質土：かわらけ片, 土丹粒を少量含む。粘性無し。締まり有り。

0　2m

図７　上・下層遺構各土坑

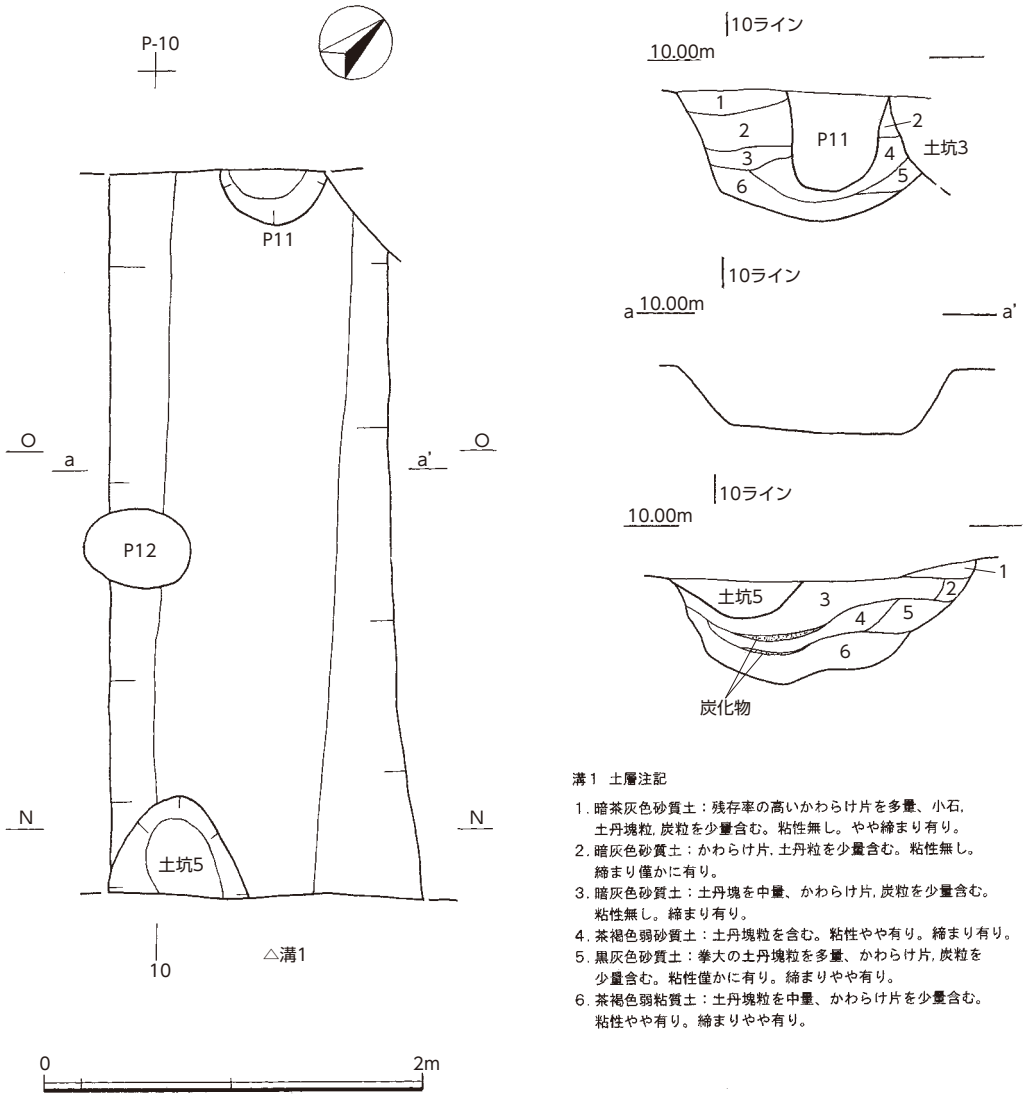


図8　溝1

弁文碗、内外面に多数の使用痕の傷がある。

土坑3（図7・12）：P－9杭東側に位置し、遺構の大半は土坑4やP15・16で掘削され、さらに調査区外にかかるため全容は不明である。掘り方は断面擂鉢形を呈し、底面の海抜高9.12mを測る。覆土は締まりのある暗茶褐色砂質土の2層で構成され、遺物は4の手づくね成形のかわらけ大皿が出土した。

土坑4（図7・12）：土坑11・P16などと重複して確認され、新旧関係は前者の土坑より新しく、ピットよりも古い。南北径98cm・東西径70cm以上、確認面からの深さ95cm程、平坦な底面には小土丹塊（長径18cm）3個が認められた。覆土の主体は暗褐色砂質土で上層に暗茶褐色土の薄い堆積がみられた。出土遺物は図12－5の回転糸切底のかわらけ大皿である。

土坑5（図7・12）：N－10杭に位置し、溝1を壊して掘り込んだ土坑である。一部が調査区東壁に架架かるが、南北径72cm・東西径53cm以上、深さ20cmで浅めの楕円形を呈する土坑と考えられる。覆土はやや締まりのある暗茶褐色砂質土の単層で、遺物は図12－6がロクロ成形のかわらけ大皿、7が手づくねのかわらけ小皿、8が常滑窯山皿である

土坑10（図7・12）：O－8杭南側に位置し、遺構の一部はP2・3・6・19で掘削され、さらに調査区外へ拡がるため全容は不明である。確認された規模は南北径75cm・東西径140cm以上、深さ40cm測り、隅丸方形状を呈すると考えられる。覆土は3層のやや締まりのある茶褐色砂質土に分層され、遺物は図

12－23の手づくね成形のかわらけ小皿である。

溝1（図8・13）：調査区中央、10ラインに沿って検出された東西方向の。主軸方位はN－40°40′－Eを測る。溝の南側は調査区外へ展開するが、確認された長さは380cm以上、上幅145～157cm、下幅95cm前後、深さ45～60㎝程である。溝底面の海抜高は南端が9.25m、北端が9.12前後を計ることから、南から北へ向かって緩やかな傾斜を示していた。土坑3・5やP12と重複関係にあり、一部が掘削され壊されている。覆土は6層から構成され、上層の1～3層からはかわらけ完形品を多く含む暗茶灰色砂質土がみられ、下層にあたる4～6層は炭化物層や土丹細片を多くまじえた茶褐色土が堆積していた。

出土遺物は図13－10～44は外底が回転糸切底でロクロ成形のかわらけ大・小皿、45～51は手づくね成形のかわらけ大・小皿である。本遺構に伴うかわらけは表8・9のように個体数で625点が出土した。型式別の出土点数をみると、ロクロ成形 (425点) と手づくね成形 (225点) の出土比率はほぼ7：3の割合を示している。52は手づね成形の白かわらけ、53が同安窯系青磁櫛描文碗、54～56が龍泉窯青磁の劃花文碗と無文碗、57が白磁端反碗である。58～60は常滑窯の甕・片口鉢（Ⅰ類)、61・62は鋳造関係の製品でかわらけ小皿を用いた坩堝と、土製品の鞴の羽口である。

ピット（図11・12）：調査区のほぼ全域に掘られたピットの多くは重複関係や覆土の特徴、深さの浅い掘り方からみて大半は上層遺構を確認した土層よりも上面からの新しい掘り込みが主体と考えられる。またピット21穴を検出したが、掘立柱建物や柵列などの柱穴列などの配置を示すような遺構との関連性は明確でなかった。各ピットは楕円形または隅丸方形を呈し、径20～50cm、深さ10～20cmの浅いものである。以下には出土遺物を伴うピットについて簡単に触れる。

P2：O－8グリッドで土坑10やP3と重複しているが本ピットが新しい。長径55cm×短径45cmで楕円形を呈し、深さ36cmで底面が平らな掘り方である。覆土は土丹細片、炭化物を少量含む明茶褐色粘質土、図12－27の精良緻密で薄手素地の青白磁碗である。

P26・P28：両ピットはO－9杭に南隣した位置で新旧関係はP28がP26を壊して掘り込んでいる。P28は径40cm×深さ58cmの円形を呈した深い掘り方、P26は長径50cm×短径34cm×深さ23cm長円形の浅い皿状を呈する。遺物はP26が52・53の手づくねかわらけ小皿と常滑窯甕、P28が54・55が手づくねかわらけの大小皿である。

2．下層の遺構と遺物

下層遺構面は調査区北側で海抜高9.60m前後、南端で海抜高約9.70mでほぼ平坦な生活面が確認できた。検出した遺構は土坑7基・溝2条・ピット7穴などである。遺物かかわらけ皿の他に青磁・白磁の貿易

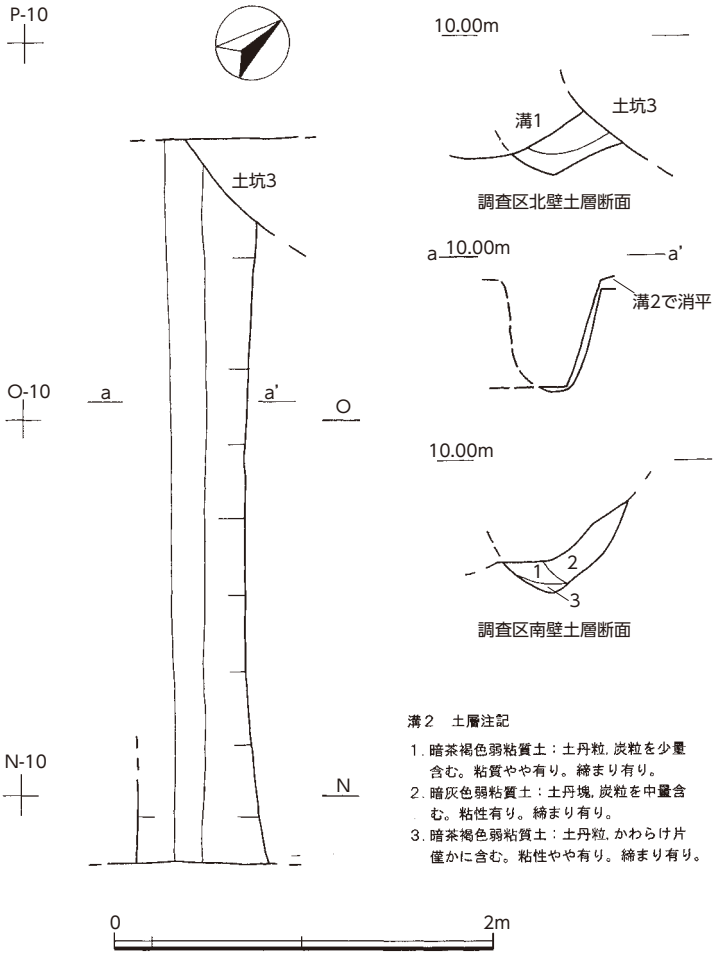
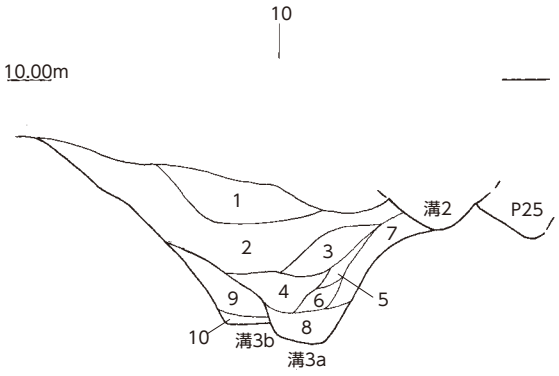
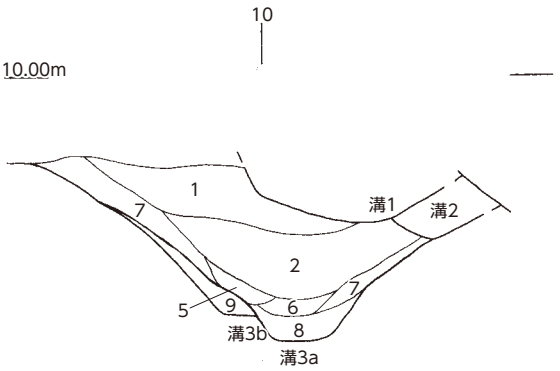


図9　溝2





溝３ａ　土層注記

1. 暗灰色粘質土：かわらけ片, 土丹粒, 炭粒を少量含む。粘性有り。締まり有り。
2. 暗灰色弱粘質土：かわらけ片, 土丹粒, 炭粒, 小石を少量含む。粘性無し。締まり無し。
3. 暗灰色弱粘質土：炭粒を中量、かわらけ片, 土丹粒, 小石粒を少量含む。粘性無し。締まり無し。
4. 暗灰色粘質土：明黄褐色の地山の土がブロック状に中量含む。炭粒少量混じる。粘性有り。締まり有り。
5. 暗灰色粘質土：砂を中量、かわらけ片, 土丹粒, 炭粒を僅かに含む。粘性有り。締まり有り。
6. 暗灰色粘質土：砂, 地山の土, 土丹粒を中量、下層に黒褐色粘質土がまだらに混じる。粘性有り。締まり有り。
7. 黒褐色粘質土：砂中量, 地山の土がブロック状に中量混じる。粘性有り。締まり有り。
8. 黒褐色粘質土：地山の土がブロック状に混じる。粘性有り。締まり有り。

溝３ｂ　土層注記

9. 暗灰色粘質土：砂を中量、土丹粒, 炭粒少量が上層に混じる。粘性やや有り。締まりやや有り。
10. 明黄褐色粘質土：地山の土に似るが, 暗灰色粘質土をブロック状に中量含む。粘性僅かに有り。締まりやや有り。

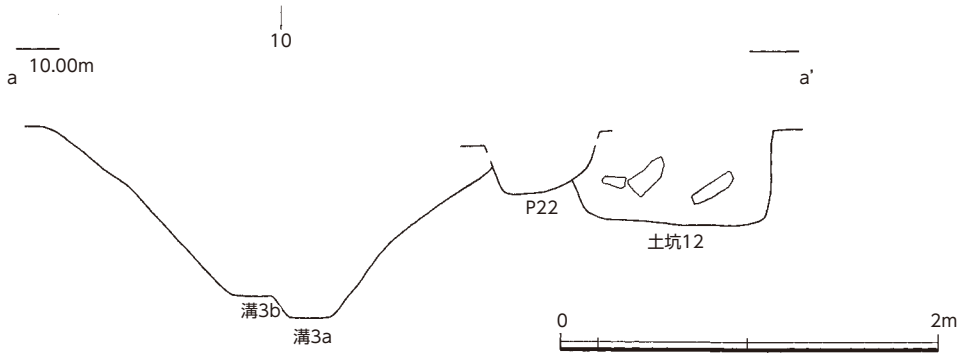


図10　溝３ab土層断面図

陶磁器、国産陶器の常滑・渥美窯製品などが出土した。

土坑６（図７・12）：調査区北東、Ｎ－９杭付近に位置し、一部をP10と土坑７に掘削されて検出した。短辺106cm×長辺80cm×深さ47cmを測り、隅丸長方形で底面が平らな掘り方である。覆土は上層が土丹小塊の多い茶褐色土と、下層がかわらけ片や貝砂粒を少量含む暗茶褐色土である。遺物は図12－９～14がロクロ成形のかわらけ大小皿、15・16が手捏ねかわらけ小皿、17が常滑窯の甕片である。

土坑７（図７・12）：Ｎ－９杭で検出した土坑である。規模は長径92cm×短径57cm×深さ64cm、楕円形を呈する。覆土は土丹細片を多量に含む茶褐色粘質土と、その下の貝砂粒混りの暗茶褐色土に分層される。遺物は18～21がかわらけで糸切底と手捏ねの大小型品、22が鉄釘である。

土坑８（図6）：土坑６・７に大半を壊された検出した土坑である。確認した規模は南北径80cm・東西径55cm以上、深さ25cm程で断面皿状の掘り方をもつ。覆土は土丹粒、炭化物を含む茶褐色土、実測可能な遺物は出土していない。

土坑９（図７・12）：調査区南西域の位置で土坑11の掘り方で南端が削平されている。確認した規模は南北径125cm以上、東西径68cm、深さ63cmの皿状断面で長楕円形を呈すると思われる。覆土は上層に厚さ10cm程の貝砂粒・炭化物混りの砂質土、下層に締まりのある茶褐色粘質土が厚めに堆積する。遺物

は23で高い器高の手捏ねかわらけ大皿である。

土坑11（図7・12）：重複関係を観察すると、土坑3・4により西側一部が壊されているが、平面形状は楕円形を呈すると思われ、確認された規模は長辺105cm、短辺58cm以上、深さ70cmで断面逆台形で底面平坦な掘り方を呈し、覆土は概ね2層に分かれ上層は土丹粒、炭化物を含む茶褐色土、下層が炭化物を多めに含んだ締まりのある暗茶褐粘質土である。遺物はすべて覆土上層からで図12－25・26がロクロ成形のかわらけ小皿と27の手捏ねかわらけ小皿である。

土坑12（図6）：O－9杭に位置し、P22により南端一部が削平を受けている。確認された規模は長辺110cm以上、短辺92cm、深さ55cmで掘り方は断面擂鉢状を呈する。覆土は炭化物、かわらけ片を含む締まりのある茶褐色粘質土の単層、覆土中位から底面にかけて長辺30cm程の土丹塊4個が認められた。良好な遺物の出土はない。

溝2（図6・9・13）：調査区中央、グリッド10ラインの北側に沿って東西方向に走る溝で調査区外に延びている。本溝は上層遺構の溝1や土坑・ピットなどにより大半が掘削を受けており、特に溝1の構築時の削平が著しく溝壁面や底部の一部が確認できただけで全貌はつかめていない。主軸方位はN－39°40′－Eを測る。確認された規模は長さ380cm・幅70cm以上、確認面からの深さ55cmを測り、掘り方は断面U字型に近いものと考えられる。溝底の海抜高は9.30m前後である。覆土はやや粘性をもち、締まりがある暗茶褐色土と暗灰色土の3層の堆積か確認できた。出土遺物は図13－1がロクロ成形のかわらけ小皿、2～6が手捏ね成形のかわらけ小皿である。7・8は同安窯の青磁櫛描文碗、9が常滑窯甕の肩部片瀬戸窯折縁皿である。

溝3（図6・9・14）：調査区中央、グリッド10ラインに沿って東西方向に走る溝で調査区外に延びた薬研形の大溝である。溝3は調査区東・西壁の土層観察と溝底の様相から浚渫または再開削が施された可能性の高く、浚渫・開削の重複関係からa・bに分別した。主軸方位はa・b共にN－40°－Eを測る。溝1・2、土坑3・4、P5と重複関係にあり、本溝址が一番古く上辺を削平されているため、現状で確認されたa・bの規模は、長さがa・b約390cm以上、幅がa：215cm・b：125cm以上、確認面からの深さがa：105cm・b：90cm前後となっている。しかしa・bの削平部分を下層遺構面（中世地山面）の高さまで復元した場合、掘り方は両者ともおそらく上幅が2.4m近くに及ぶ規模が予想される。溝底の海抜高は東端・西端ともに

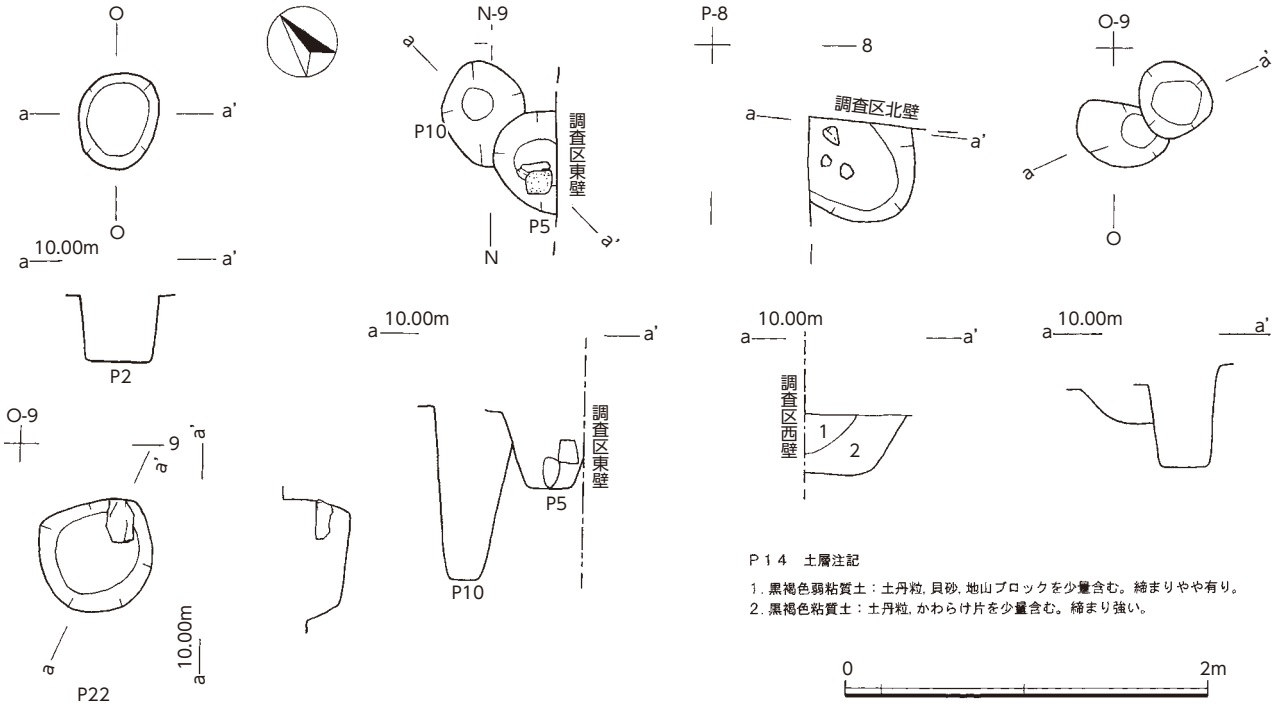


図11　上・下層遺構各ピット

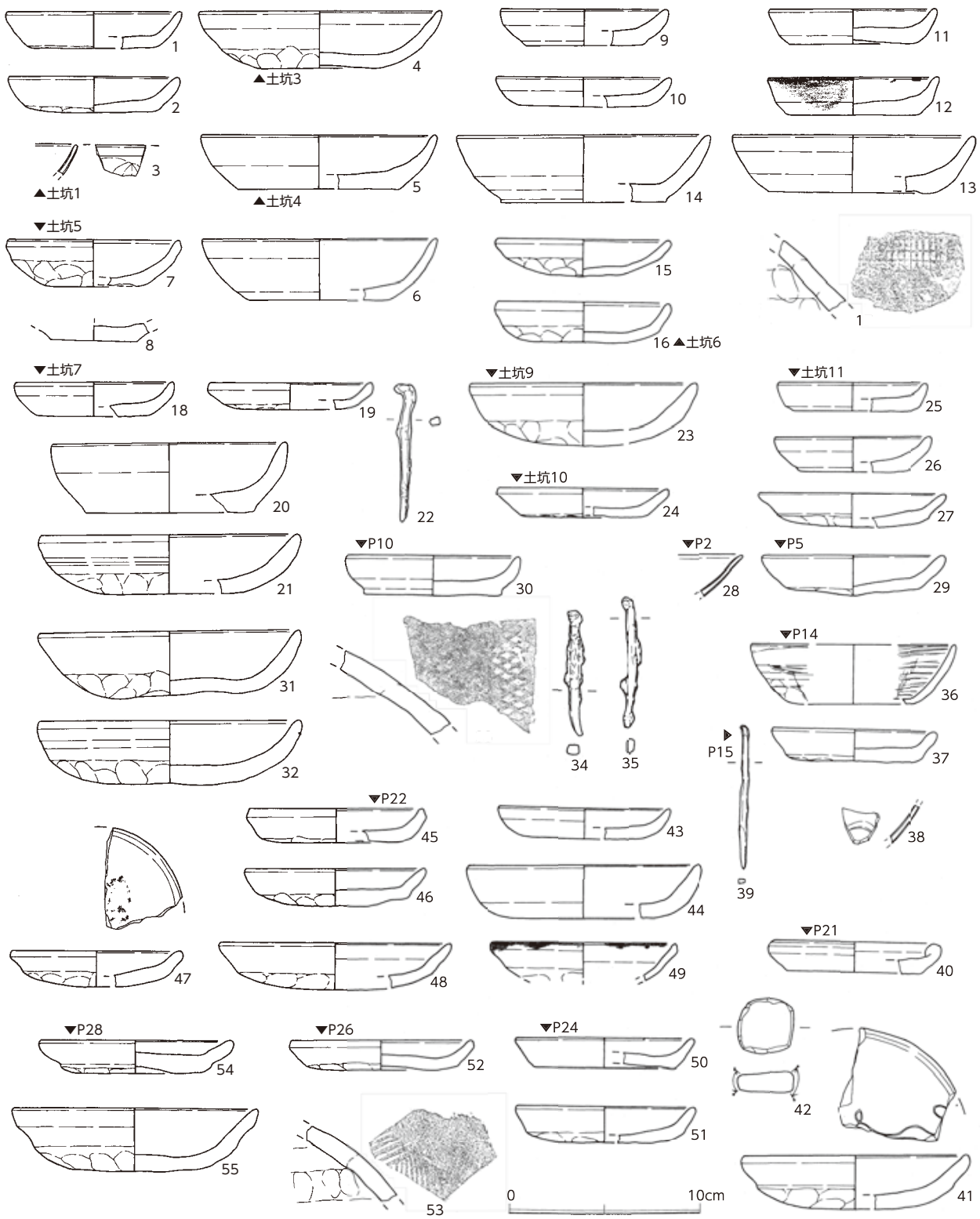


図１２　各土坑・ピット出土遺物

比高差は殆んどなく、aが8.60m前後、bが8.75m前後の底面標高が確認された。当地点の溝3a・bは層位的にみて中世最初期に位置づけられる古さであり、その実年代は鎌倉時代初期から前期に属することは遺構の新旧関係や出土遺物からも間違いないと思われる。形状は良く整ったV字型を呈し、壁面の傾斜は急なところでは60°程もある。覆土はaが7・8層の地山ブロックが混入した締まりのある黒褐色粘質土が堆積し、一度浚渫されたあと埋め戻されたものと考えられる。その埋土は砂層に黒・茶褐色粘質土ブロ

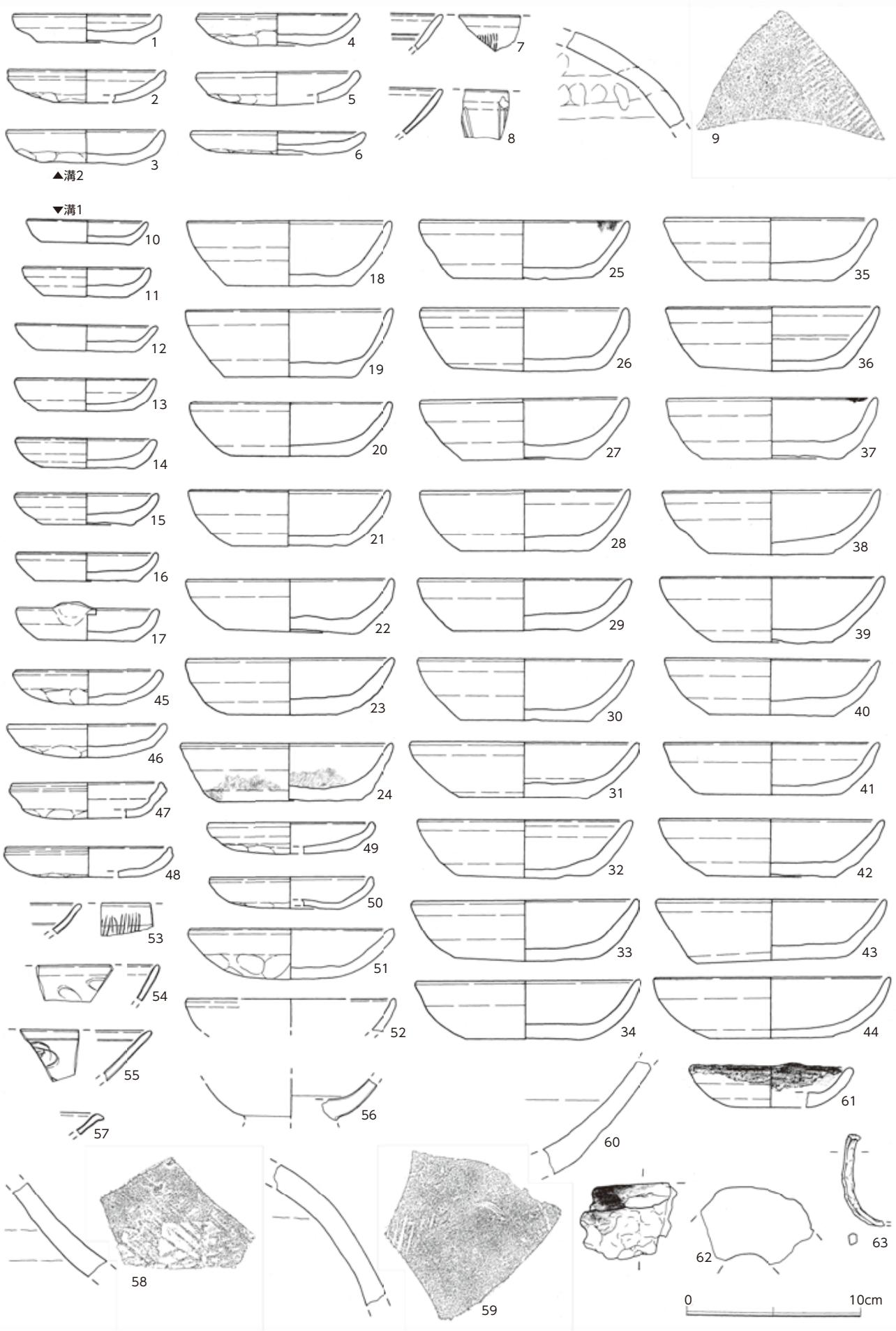


図１３　溝１・２出土遺物

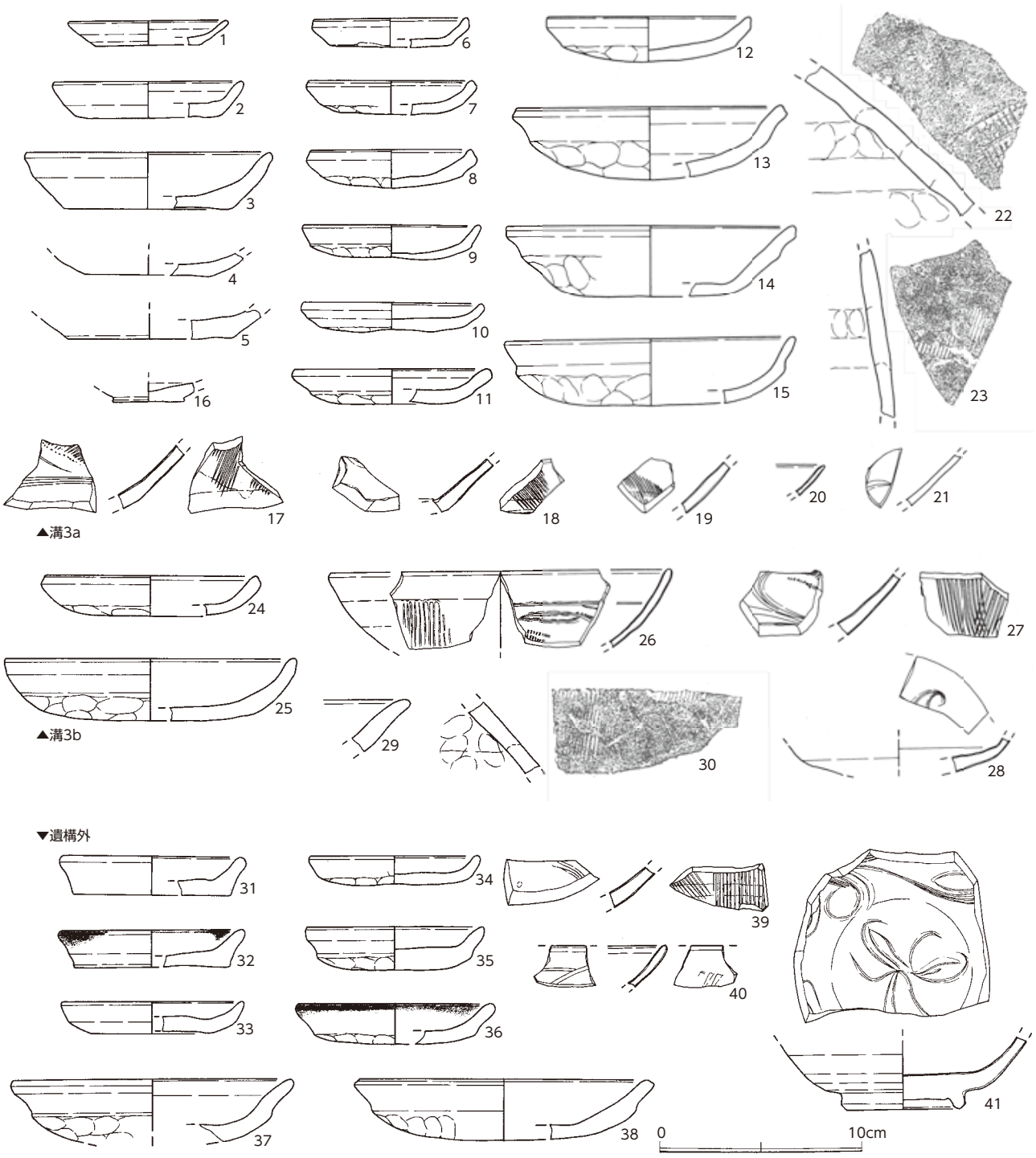


図１４　溝３・遺構外出土遺物

ックが多量に混じったもので、おそらく溝付け替えに伴う地山開削によって発生した残土を用いたものと推測される。bの覆土はaの削平で殆んど残存していないが、中世地山の砂層や黒褐～暗灰色の小塊が混じった9・10層（暗灰色・明黄褐色粘質土）が認められた。溝3a・b覆土中からの遺物は以下の資料がみられた。

溝3aは1～15がロクロ成形と手捏ね成形のかわらけ大小皿、16がロクロ成形の白かわらけである。17～19は同安窯系青磁碗で内外面に櫛描文と劃花文を施文、20・21は白磁の端反碗・劃花文碗である。22・23は常滑窯甕の肩部片と胴部片で外面に格子目叩きを施す。

溝3bは24･25が手捏ね成形のかわらけ大小皿、26･27が同安窯系の櫛描文青磁碗、28が白磁劃花文皿、29が渥美窯片口鉢、30が常滑窯甕の体部片である。

ピット（図6・11・12）：下層遺構に伴って検出したピットは7穴であるが、ここでは遺物の出土したピットのP5・10・14・22について簡単に触れる。

P5：径58cm×深さ42cmの楕円形を呈し、覆土は茶褐色粘質土の単層で土丹小塊2個がみられ、図12－29の手捏ねかわらけ小皿が出土した。

P10：P5に一部削平されているが、径48～60cmの楕円形を呈し、深さ96cmを測る。覆土中からは30～32のロクロと手捏ね成形のかわらけ大小皿、33の常滑窯甕片、34・35の鉄釘が出土した。

P14：調査区北西隅で大半が調査区外にかかり、確認した大きさは径65cm以上、深さ35cm、覆土は黒褐色粘質土の中世地山に類似しもので、遺物は37の手捏ねかわらけ小皿、36の京都楠葉産の瓦器碗、38が白磁碗である。

P22：調査区中央で土坑12を壊して掘り込む。径65cmの円形を呈し、深さ38cmと浅い掘り方である。遺物は43～48のロクロと手捏ね成形のかわらけ大小皿で47が内底面に墨書が認められた。49は手捏ね成形による白かわらけである。

遺構外出土遺物（図14）：遺構外とした遺物は上層遺物包含層や上・下層遺構の確認に伴った精査作業において出土した遺構外の資料を一括している。図14－31～33は糸切底のかわらけ小皿、34～38が手捏ね成形の大小皿である。39～41は同安窯の青磁櫛掻文碗の破片である。

表２　遺物観察表（１）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
12- 1	土坑 1	かわらけ	(9.4)	(7.2)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
12- 2	〃	かわらけ	9.2	7.1	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
12- 3	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b.明灰白色 精良堅緻 d.不透明な青灰色をやや厚めに施釉
12- 4	土坑 3	かわらけ	(13.0)	(10.6)	3.0	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12- 5	土坑 4	かわらけ	(12.6)	(8.6)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12- 6	土坑 5	かわらけ	(12.6)	(7.4)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
12- 7	〃	かわらけ	(9.0)	(8.8)	(2.45)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
12- 8	〃	常滑 山皿	—	(4.6)	—	a.外底糸切痕 b.灰色で砂粒 黒色粒 c.灰色 e.良好
12- 9	土坑 6	かわらけ	(9.0)	(6.2)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.破損後に火を被るため焼成状態不明
12-10	〃	かわらけ	(9.4)	(6.8)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-11	〃	かわらけ	(9.0)	(6.8)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
12-12	〃	かわらけ	(9.2)	(7.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.黄橙色 e.やや甘い f.灯明皿
12-13	〃	かわらけ	(13.0)	(9.0)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
12-14	〃	かわらけ	(13.6)	(8.8)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
12-15	〃	かわらけ	(9.4)	(8.2)	1.95	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.灰黄色 e.良好
12-16	〃	かわらけ	9.4	8.4	2.1	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
12-17	〃	常滑 甕	肩部片			a.輪積技法 b.灰褐色 砂粒 黒色粒 長石 小石粒やや多め c.灰褐色 e.硬質
12-18	土坑 7	かわらけ	(8.6)	(6.1)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄灰色 e.良好
12-19	〃	かわらけ	(8.8)	(7.2)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
12-20	〃	かわらけ	(12.8)	(8.7)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
12-21	〃	かわらけ	(14.0)	(11.4)	3.3	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.良好
12-22	〃	鉄製品 釘	残存長7.35×0.55×0.4			a.鍛造の角釘
12-23	土坑 9	かわらけ	(12.0)	(10.4)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.良好 f.口縁煤付着 灯明皿
12-24	土坑10	かわらけ	(9.2)	(6.6)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.良好
12-25	土坑11	かわらけ	(7.8)	(6.2)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-26	〃	かわらけ	(8.4)	(5.8)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-27	〃	かわらけ	(9.9)	(7.4)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 やや砂質土 c.黄灰色 e.不良
12-28	P 2	青白磁碗	口縁部小片			a.ロクロ b.白色 黒色粒少なめ 精良堅緻 d.青灰色半透明 薄手施釉
12-29	P 5	かわらけ	(9.8)	(7.1)	2.1	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.良好
12-30	P10	かわらけ	(9.4)	(7.4)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
12-31	〃	かわらけ	14.0	11.7	3.4	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.橙色 e.良好
12-32	〃	かわらけ	14.1	12.45	3.35	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-33	〃	常滑 甕	肩部片			a.輪積技法 b.淡灰色砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 全て少量 c.褐色 外面降灰により暗灰緑色
12-34	〃	鉄製品 釘	残存長6.6×0.65×0.55			f.錆の付着が激しい
12-35	〃	鉄製品 釘	残存長6.9×0.5×0.7			f.錆の付着が激しい
12-36	P14	瓦器碗	—	—	3.2	b.灰白色 水篩した砂粒のあまり残らない緻密土 c.黒色(内外面ともにみがきを施し炭素吸着しているため) f.ヘラによる押し込みが２か所 底部欠損のため内底面の文様確認できず
12-37	〃	かわらけ	(8.7)	(7.4)	(1.7)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.やや甘い
12-38	〃	青白磁碗	胴部片			a.ロクロ 内面劃花文 b.黒色砂粒 茶色砂粒 白色で緻密 d.不透明な青味がかった白色を薄く施す
12-39	P15	鉄製品 釘	残存長7.6×3.5×2.5			f.錆の付着が激しい
12-40	P21	内折れかわらけ	(9.2)	(7.2)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い

表３　遺物観察表（２）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
12-41	〃	かわらけ	(12.2)	(10.4)	2.85	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に線刻文様
12-42	〃	円盤状土製品	径3.0×厚さ1.1			b.微砂 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.黄橙色 f.かわらけ底部を転用 両面をスリ加工されており内底面の区別つかず
12-43	P22	かわらけ	(9.2)	(7.4)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-44	〃	かわらけ	(12.6)	(9.0)	(1.85)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.甘い
12-45	〃	かわらけ	(9.6)	(7.7)	1.8	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-46	〃	かわらけ	(9.7)	(8.0)	1.95	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
12-47	〃	墨書かわらけ	(9.2)	(7.9)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好 f.墨書が何を表現しているかは不明
12-48	〃	かわらけ	(12.4)	(10.2)	2.5	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
12-49	〃	白かわらけ	(9.7)	(8.3)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 全て少量 粉質良土 c.淡肌色を帯びた白色 e.良好
12-50	P24	かわらけ	(9.8)	(7.1)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-51	〃	かわらけ	(9.6)	(8.4)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-52	P26	かわらけ	(9.8)	(8.0)	(1.6)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-53	〃	常滑 甕	肩部小片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 c.外面:灰色 内面:暗赤褐色 e.硬質
12-54	P28	かわらけ	(10.4)	(8.0)	(1.8)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.破損後に火を受ける
12-55	〃	かわらけ	(13.2)	(10.4)	(3.35)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
13- 1	溝2	かわらけ	8.5	5.8	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c. 黄橙色 e.良好
13- 2	〃	かわらけ	(9.0)	(7.4)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c. 黄灰色 e.やや甘い
13- 3	〃	かわらけ	9.1	8.3	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c. 黄灰色 e.やや甘い
13- 4	〃	かわらけ	9.2	8.2	1.85	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c. 黄灰色 e.やや甘い
13- 5	〃	かわらけ	(9.3)	(8.2)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13- 6	〃	かわらけ	(10.0)	(8.2)	(1.3)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色～黄橙色 焼成の際の色ムラあり e.やや甘い
13- 7	〃	同安窯青磁碗	口縁部小片			b.淡灰色 d.不透明な灰緑色を薄く施釉 f.気泡あり キズあり 外面片刀か片彫風の櫛刀で縦線
13- 8	〃	同安窯青磁碗	口縁部小片			a.ロクロ 内面:片切彫劃花文 外面:縦位の櫛目文(中広め) b.灰色 微砂少量 精良堅緻 d.半透明な暗灰緑色を薄く施釉 貫入多い f.12C中～後半頃か キズあり
13- 9	〃	常滑 甕	肩部小片			a.輪積技法 b.灰黄色 長石 黒色粒 小石粒 やや多め c.胎土と共に灰黄色 e.硬質 f.肩部に降灰による自然釉
13-10	溝1	かわらけ	(6.8)	(5.1)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質良土 c.橙色 e.良好
13-11	〃	かわらけ	7.2	5.0	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
13-12	〃	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-13	〃	かわらけ	8.0	5.4	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-14	〃	かわらけ	7.8	5.3	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-15	〃	かわらけ	8.0	5.3	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-16	〃	かわらけ	8.0	5.9	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味良土 c.黄橙色 e.良好
13-17	〃	かわらけ	8.0	5.6	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-18	〃	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.やや甘い
13-19	〃	かわらけ	(12.0)	7.4	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粉質粗土　c.黄橙色 e.良好
13-20	〃	かわらけ	(11.2)	(6.8)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-21	〃	かわらけ	(11.3)	(6.2)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒多め 小石粒 砂質粗土 c.橙色 e.やや甘い

表４　遺物観察表（３）　　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
13-22	〃	かわらけ	11.7	7.4	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-23	〃	かわらけ	(11.7)	(6.5)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂少なめ 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 砂質粗土 c.黄橙色 e.良好
13-24	溝1	かわらけ	(12.1)	(8.4)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.黄橙色 e.良好
13-25	〃	かわらけ	11.8	8.5	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿
13-26	〃	かわらけ	11.7	8.4	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質良土 c.粉質良土 e.良好
13-27	〃	かわらけ	(12.0)	7.2	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-28	〃	かわらけ	(11.7)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粉質やや粗土 c.橙色 e.良好 f.横ナデ痕強し
13-29	〃	かわらけ	(11.9)	(7.2)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-30	〃	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
13-31	〃	かわらけ	(13.2)	(7.6)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒多め 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-32	〃	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
13-33	〃	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-34	〃	かわらけ	(12.7)	(7.0)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-35	〃	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-36	〃	かわらけ	12.2	8.3	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-37	〃	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.55	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや甘い f.灯明皿
13-38	〃	かわらけ	(12.4)	(7.0)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.橙色 e.良好
13-39	〃	かわらけ	12.6	7.4	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-40	〃	かわらけ	(12.4)	(7.2)	(3.3)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.やや甘い
13-41	〃	かわらけ	12.4	8.6	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.やや不良
13-42	〃	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.淡橙色 e.良好
13-43	〃	かわらけ	13.0	8.6	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-44	〃	かわらけ	(13.3)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 やや粉質良土 c.黄橙色 e.良好
13-45	〃	かわらけ	(8.4)	(7.8)	2.0	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.橙色 e.やや甘い
13-46	〃	かわらけ	(9.2)	(7.8)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-47	〃	かわらけ	(8.6)	(7.6)	(2.0)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-48	〃	かわらけ	(9.6)	(6.6)	(1.75)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
13-49	〃	かわらけ	(9.6)	(8.0)	(1.8)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.やや甘い
13-50	〃	かわらけ	(9.3)	(7.8)	(1.85)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粉質良土 c.黄橙色 e.良好
13-51	〃	かわらけ	(11.8)	(10.2)	2.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-52	〃	白かわらけ	(12.4)	—	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂少なめ 良土 c.淡肌色を帯びた白色 e.良好
13-53	〃	同安窯系 青磁櫛掻文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面:縦位の櫛目文 b.灰黄色 微砂 緻密 d.半透明な灰黄緑色を薄く施釉 f.キズあり
13-54	〃	龍泉窯系 青磁劃花文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:劃花文 b.灰黄色 微砂少量 緻密 d.半透明な暗灰緑色 貫入多い f.椀Ⅰ類 キズあり
13-55	〃	龍泉窯系 青磁劃花文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:劃花文 b.灰色　微砂 白色粒少量 緻密 d.半透明な灰緑色 大きめの貫入あり f.椀Ⅰ類 キズあり
13-56	〃	龍泉窯系 青磁無文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 微砂 緻密 d.透明な青水色 f.キズあり
13-57	〃	白磁端反碗	口縁部小片			a.ロクロ b.黄白色 微砂 緻密 d.不透明な乳白色 貫入あり f.椀Ⅴ- 4類
13-58	〃	常滑 甕	頸部片			a.輪積技法 b.灰褐色 長石 黒色粒 砂粒 石英 c.茶褐色 e.硬質

表５　遺物観察表（４）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
13-59	〃	常滑 甕	肩部片			a.輪積技法 b.灰褐色 黒色粒 砂粒 白色粒 小石粒少量 c.暗茶褐色 e.硬質
13-60	〃	常滑 捏鉢Ⅰ類	体部小片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒少量 やや良土 c.灰色 e.硬質
13-61	〃	かわらけ 坩堝	(7.2)	(5.0)	2.35	b.微砂 砂質粗土 c.灰黒色 e.不良 f.鋳造品の坩堝に転用の為器表に熔融物が付着し全体的に灰色に変色している
13-62	〃	鞴の羽口	—	—	—	b.砂粒 赤色粒 土丹粒少量 粗土 c.橙褐色 f.先端部に気泡・鉱物融着している箇所あり
13-63	〃	鉄製品 釘	残存長 (5.7)			
14- 1	溝３a	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
14- 2	〃	かわらけ	(9.4)	(7.2)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質気味やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
14- 3	〃	かわらけ	(12.2)	(8.4)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
14- 4	〃	かわらけ	—	(6.4)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 非常に粉っぽい c.黄橙色 e.良好
14- 5	〃	かわらけ	—	(5.2)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
14- 6	〃	かわらけ	(7.6)	(6.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.やや甘い
14- 7	〃	かわらけ	(8.2)	(7.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.やや甘い
14- 8	〃	かわらけ	(8.0)	(7.0)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
14- 9	〃	かわらけ	8.6	8.1	1.55	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
14-10	〃	かわらけ	8.9	7.2	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
14-11	〃	かわらけ	(8.6)	(7.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-12	〃	かわらけ	(12.0)	(8.6)	2.2	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い　f.外底面に火を受ける
14-13	〃	かわらけ	(13.2)	(12.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.黄灰色 全体的に火を受けた為黒く変色 e.良好 f.古手の手捏ねタイプ
14-14	〃	かわらけ	(14.4)	(13.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.橙色 焼きムラあり部分的に黄橙色 e.良好
14-15	〃	かわらけ	(14.4)	(13.4)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄橙色 e.やや甘い
14-16	〃	白かわらけ	—	(3.6)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.黄白色 e.良好
14-17	〃	同安窯系 青磁櫛掻文碗	体部下位片			a.ロクロ 内面:櫛掻＋劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 緻密 やや粘性あり d.半透明な灰緑色 貫入多い
14-18	〃	同安窯系 青磁櫛掻文碗	体部下位片			a.ロクロ 内面:片切彫の劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 緻密 やや粘性あり d.透明な灰緑色 貫入多い
14-19	〃	同安窯系青磁 櫛掻劃花文碗	口縁部小片			a.ロクロ 内面:櫛掻劃花文 b.灰色 黒色粒 緻密 d.半透明な灰緑色薄く施釉 f.キズあり
14-20	〃	白磁端反碗	口縁部小片			a.ロクロ b.白色 黒色粒・茶色粒少量 精良堅緻 d.透明な薄い水色をやや薄く施釉 気泡あり f.器表面キズあり
14-21	〃	白磁碗	体部片			a.ロクロ 内面:劃花文 b.白色 黒色粒少量 精良堅緻 d.半透明の青味を帯びた白色を薄く施釉 気泡あり
14-22	〃	常滑 甕	肩部片			a.輪積技法 外面:縦長の格子目叩き文 b.灰色 小石粒 黒色粒 白色粒 石英 長石多め c.灰色 e.硬質
14-23	〃	常滑 甕	胴部片			a.輪積技法 外面:縦長の格子目叩き文 b.淡褐色 白色粒 長石 黒色粒多め c.暗褐色 e.硬質
14-24	溝３b	かわらけ	(10.5)	(9.0)	(2.0)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-25	〃	かわらけ	(14.6)	(12.8)	(3.1)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-26	〃	同安窯系 青磁櫛掻文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:櫛掻劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂 精良堅緻 d.不透明な灰緑色を薄く施釉 貫入・気泡あり f.内外面に融着物あり
14-27	〃	同安窯系 青磁櫛掻文碗	胴部片			a.ロクロ 内面:櫛掻劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 緻密 精良堅緻 d.半透明な暗灰緑色 貫入あり 気泡あり f.キズあり
14-28	〃	白磁皿	底部片			a.ロクロ　内面見込みに劃花文 b.黄灰色 微砂 緻密 d.不透明な黄色味を帯びた白色をやや厚く施す 貫入あり 気泡あり f.ⅤⅢ－１b
14-29	〃	渥美 捏鉢	口縁部小片			a.輪積技法 b.砂粒 石英 白色粒少なめ c.胎土・器表共に暗灰色 e.硬質
14-30	〃	常滑 甕	肩部小片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒少なめ 小石粒多め c.黒褐色 e.硬質
14-31	遺構外	かわらけ	(9.0)	(8.0)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-32	〃	かわらけ	(9.0)	(7.8)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 c.橙色 e.やや甘い f.灯明皿
14-33	〃	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
14-34	〃	かわらけ	(8.4)	(7.4)	1.4	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好

表６　遺物観察表（５）　　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
14-35	〃	かわらけ	(8.8)	(7.8)	2.1	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
14-36	〃	かわらけ	(9.6)	(8.0)	1.55	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.良好 f.灯明皿
14-37	〃	かわらけ	(14.0)	(12.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
14-38	〃	かわらけ	(14.4)	(13.2)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-39	〃	同安窯系 青磁櫛掻文碗	胴部片			a.ロクロ 内面:櫛掻劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 精良堅緻 d.不透明な灰緑色をやや薄めに施す 気泡あり f.二次焼成
14-40	遺構外	同安窯系 青磁櫛掻文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:櫛掻劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 精良堅緻 d.半透明な黄緑色を薄く施釉 細かい貫入あり 気泡あり f.キズあり
14-41	〃	同安窯系 青磁劃花文碗	胴部～底部片			a.ロクロ 内面:櫛掻劃花文 外面:無文 b.灰色 微砂少量 精良堅緻 d.半透明な青味を帯びた緑色を高台畳付けおよびその内部を除き平均的にしっかり施釉 f.キズあり

第四章　まとめ

本調査地点は、鎌倉市街地の中心部で「若宮大路周辺遺跡群」の北東最端にあたり、周辺は北隣に鎌倉幕府最後の執権北条高時の菩提を弔うために後醍醐天皇が建立した宝戒寺、西沿いを南北に走る小町大路は鎌倉時代からの幹線道路で鎌倉幕府が定めた「町屋」の多くと結ばれた幹線道路、さらに小町大路を挟んで西側域が若宮大路御所とされる「北条小町邸跡」、北側域の「政所跡」などと隣接するところに位置している。

今回の発掘調査では、遺構を上層と下層に分けて報告したが、表土層下に明瞭な地形層による生活面は見つかっておらず、遺構の殆んどは中世基盤となる地山で発見され、その上面は後世の攪乱や削平に遭っていたことが確認された。本調査地点と重複した調査期間で実施され東隣に位置したⅡ地点（小町三丁目425番３地点：図３参照）では、土丹地形層で整地された４時期の生活面に伴い多数の遺構・遺物が発見された。また平成６年に調査が実施された宝戒寺門前の発掘調査（図２－12　北条高時邸跡：『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12　第１分冊』）では、中世地山上に少なくとも３時期の生活面が確認され、さらに表土層下には近世遺構も見つかったことを考えると、今回の調査地点に残る遺構密度はあまり高いとは言えない状態であった。

下層遺構で確認された溝３は東西方向に伸びる大型の溝遺構で、排水を兼ねた屋敷を区画するような薬研堀形の溝と想定できる。確認面からの深さは100cm前後、溝肩が削平を受けているが215cm以上の幅をもつと推定でき、土層観察からは少なくとも数度の掘り直しや浚渫が行われた可能性が高く、出土遺物から開削年代は12世紀末～13世紀前葉頃まで機能していたと考えられる。ところで同様の年代時期と規模をもつ溝は、若宮大路・小町大路など中世鎌倉中枢域を走る大路側溝や、大倉幕府周辺の鎌倉初期時期に遡る中世地山に類似した覆土の溝にその事例を求めることができる。本溝も開削時期や規模からみて屋敷の外郭溝としての機能していた可能性が強い。

次に出土遺物についてみると、今回の調査で遺物は分類困難な小破片を除き接合後の破片数で1.801点が得られた。このうち大多数を占めているのがかわらけで、ロクロ成形726点・手捏ね成形931点・白かわらけ14点の合計1.671点と全体出土量の約92%にも上っている。次に多く認められたものが国産陶器62点（約3.5%）、貿易磁器は30点で出土比率が僅か1.7%程であった（表７・８）。かわらけ型式別構成の内訳は手捏ね成形が約56%、ロクロ成形が約44%の割合が確認され、出土かわらけの半数以上が手捏ね成形の資料で占められていたのに比べて溝１の型式別組成をみると、出土かわらけの約66%がロクロ成形の製品で占められており、上・下層遺構に伴うかわらけが手捏ねとロクロ製品の占める出土比率の割合が逆転した傾向が認められた。

なお、周辺地域を含めた検出遺構の傾向や考察については本調査地点と重複した期間で調査を実施したⅡ地点の調査成果と合わせて次年度に報告することにしたい。

表7　遺物分類別出土数量・比率表

出土面・遺構	種　類	上・下層（溝 1 以外）	溝 1	個数	比率（%）
かわらけ	ロクロ	299	427	726	40.3
	手捏ね	706	225	931	51.68
	白	12	2	14	0.78
舶載陶磁器	青磁	12	11	23	1.28
	白磁	5	1	6	0.33
	青白磁	1	0	1	0.06
国産陶磁器	瀬戸	1	0	1	0.06
	常滑	26	25	51	2.83
	渥美	5	3	8	0.44
	山茶碗（南部）	1	0	1	0.06
	山茶碗（北部）	1	0	1	0.06
土製品	瓦	1	2	3	0.17
	瓦器	2	0	2	0.11
	その他	0	1	1	0.06
石製品	その他	0	1	1	0.06
金属製品	釘	8	1	9	0.5
	その他	0	3	3	0.17
自然遺物	骨	8	3	11	0.61
	貝	7	0	7	0.39
古代	須恵器	1	0	1	0.06
合計		1096	705	1801	100%
比率		60.86	39.14	100%	

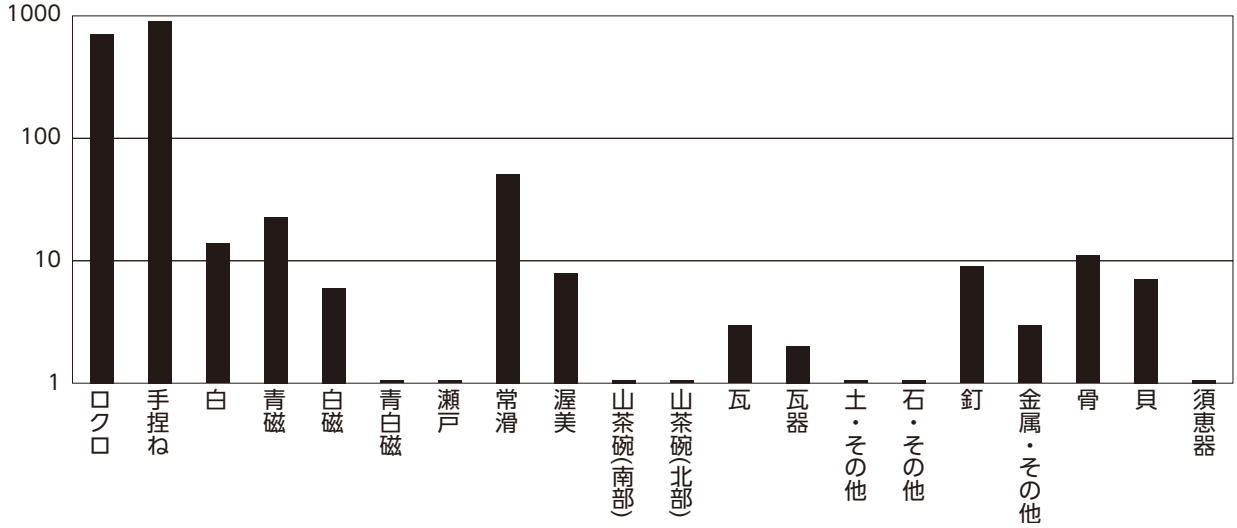


表8　溝 1 かわらけ型式別出土点数

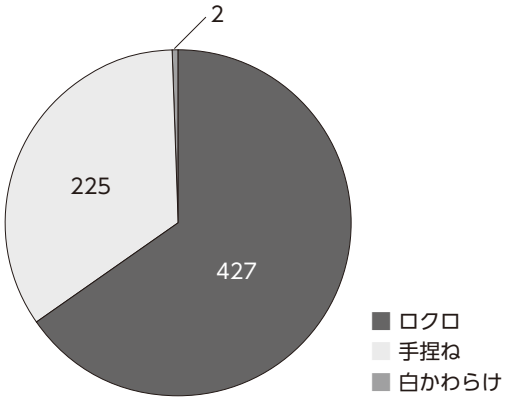
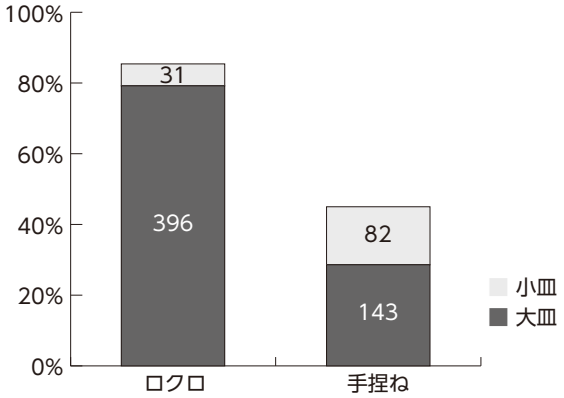


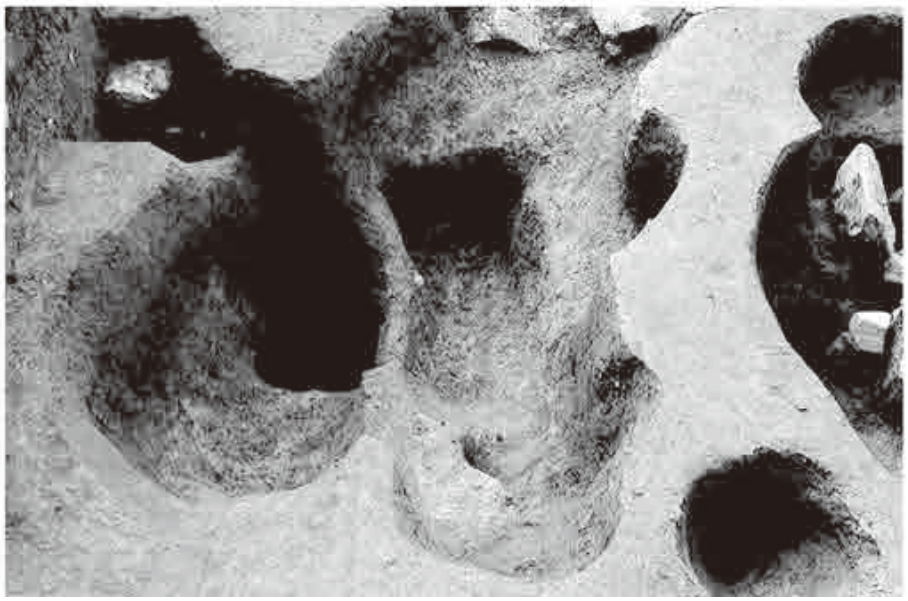
表9　溝 1 かわらけ器種別出土点数



図版1

◁1　上層遺構全景（南から）

▷2　土坑4、P15・16



◁3　土坑6、P5・10（北から）

◁１　土坑12・P22（南から）

▷２　土坑９・11上層検出状況

◁３　土坑１（北から）

図版３

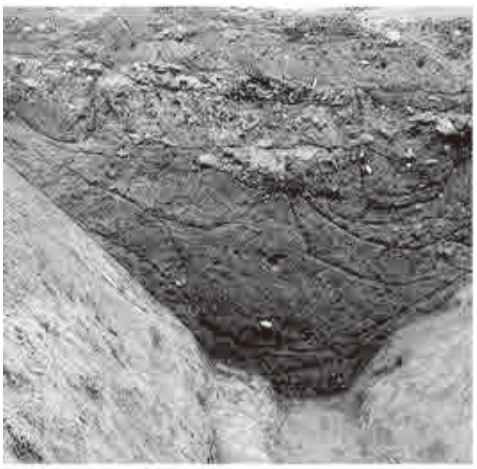
◁1　下層遺構全景（北から）

▷2　下層遺構（南から）

◁3　下層遺構全景（東から）

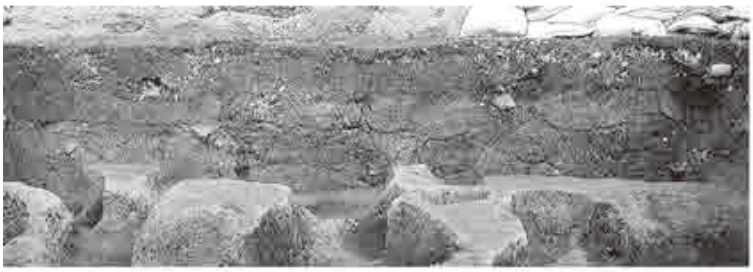
△１　溝３（西から）

△２　溝３土層断面（東壁面）

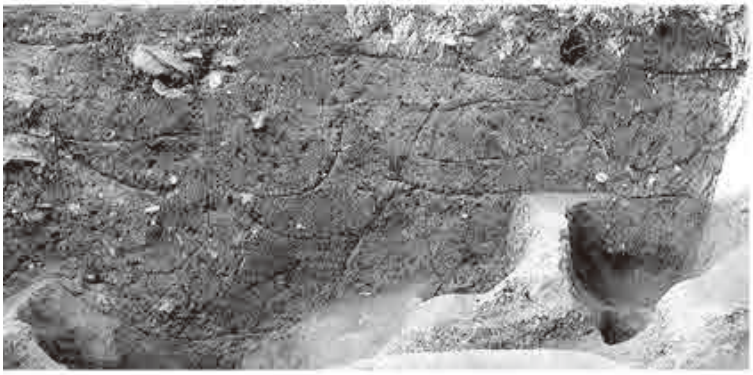


△３　溝３土層断面（西壁面）

△４　調査区東壁面土層断面



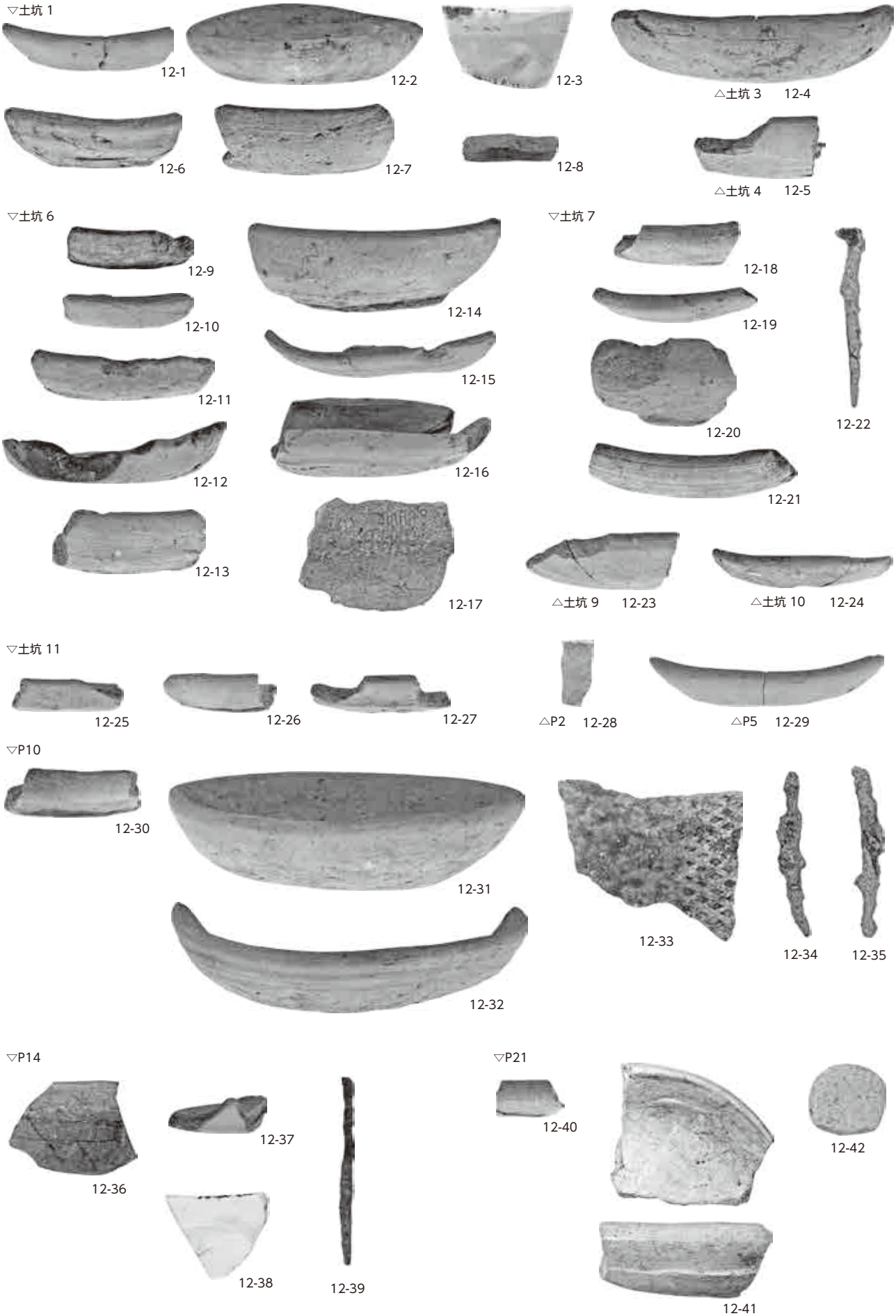
△５　調査区北壁面土層断面



△６　調査区西壁北側土層断面

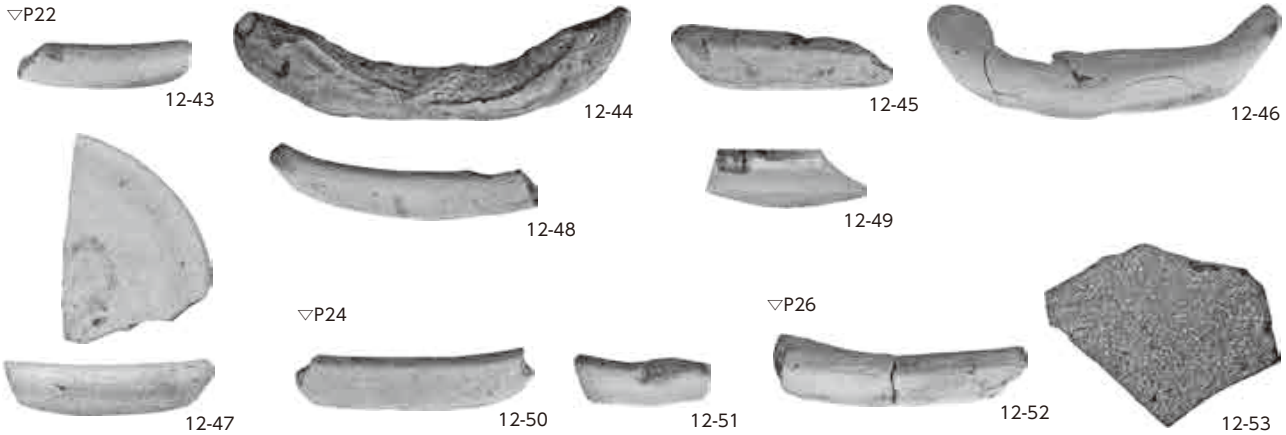
△７　調査区南西拡張トレンチ

図版５



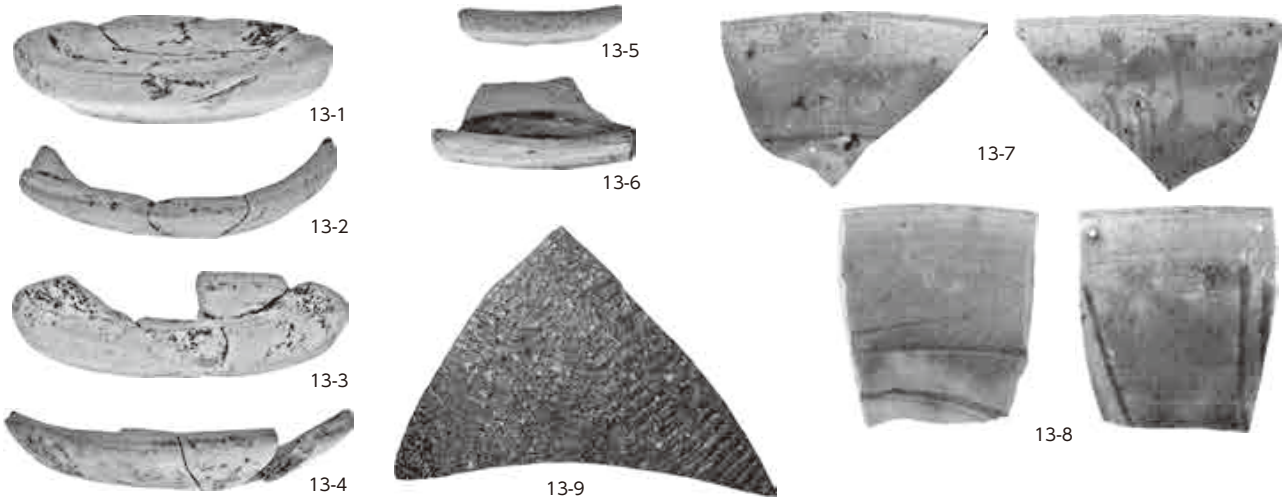
土坑・ピット出土遺物

▽P22

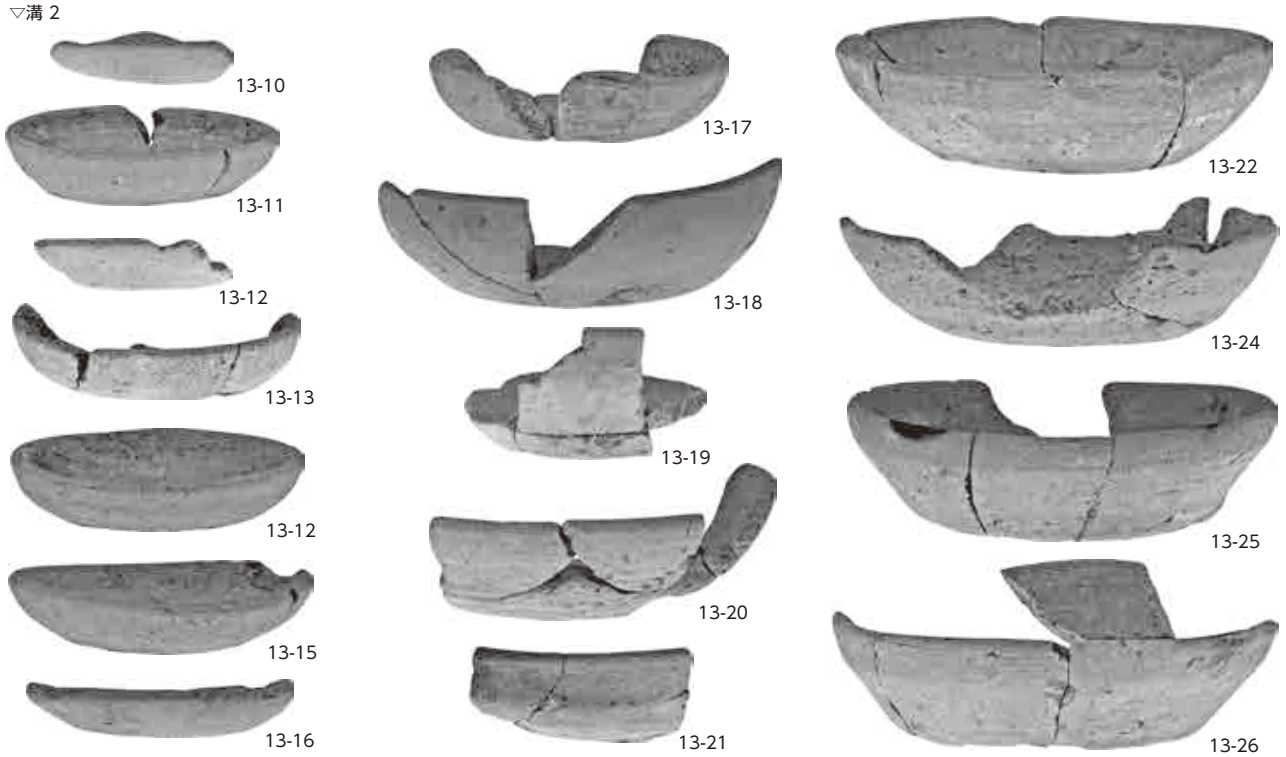


▽P28

▽溝１



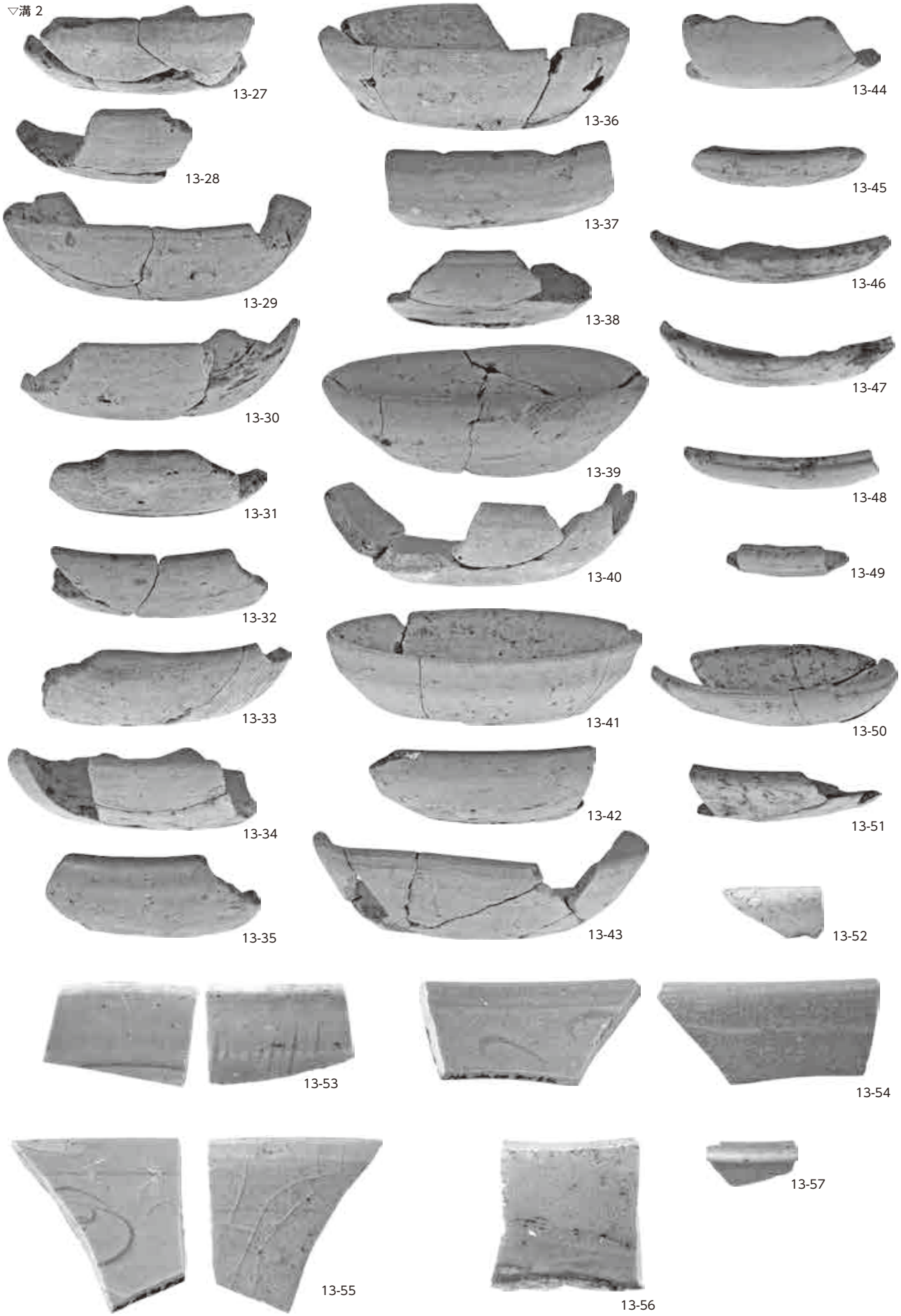
▽溝２



溝２出土遺物（1）

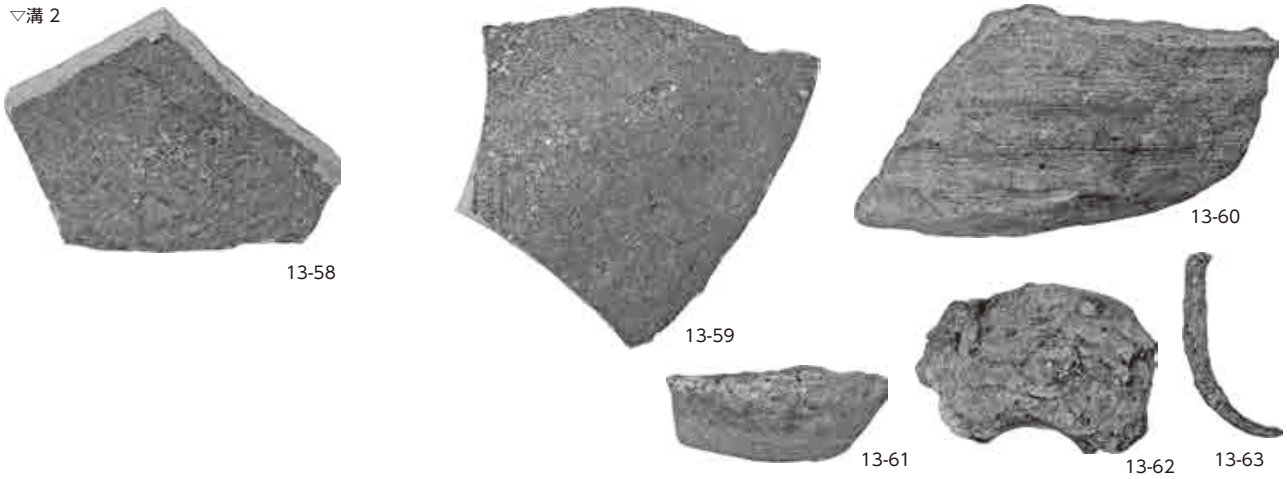
図版７

▽溝２

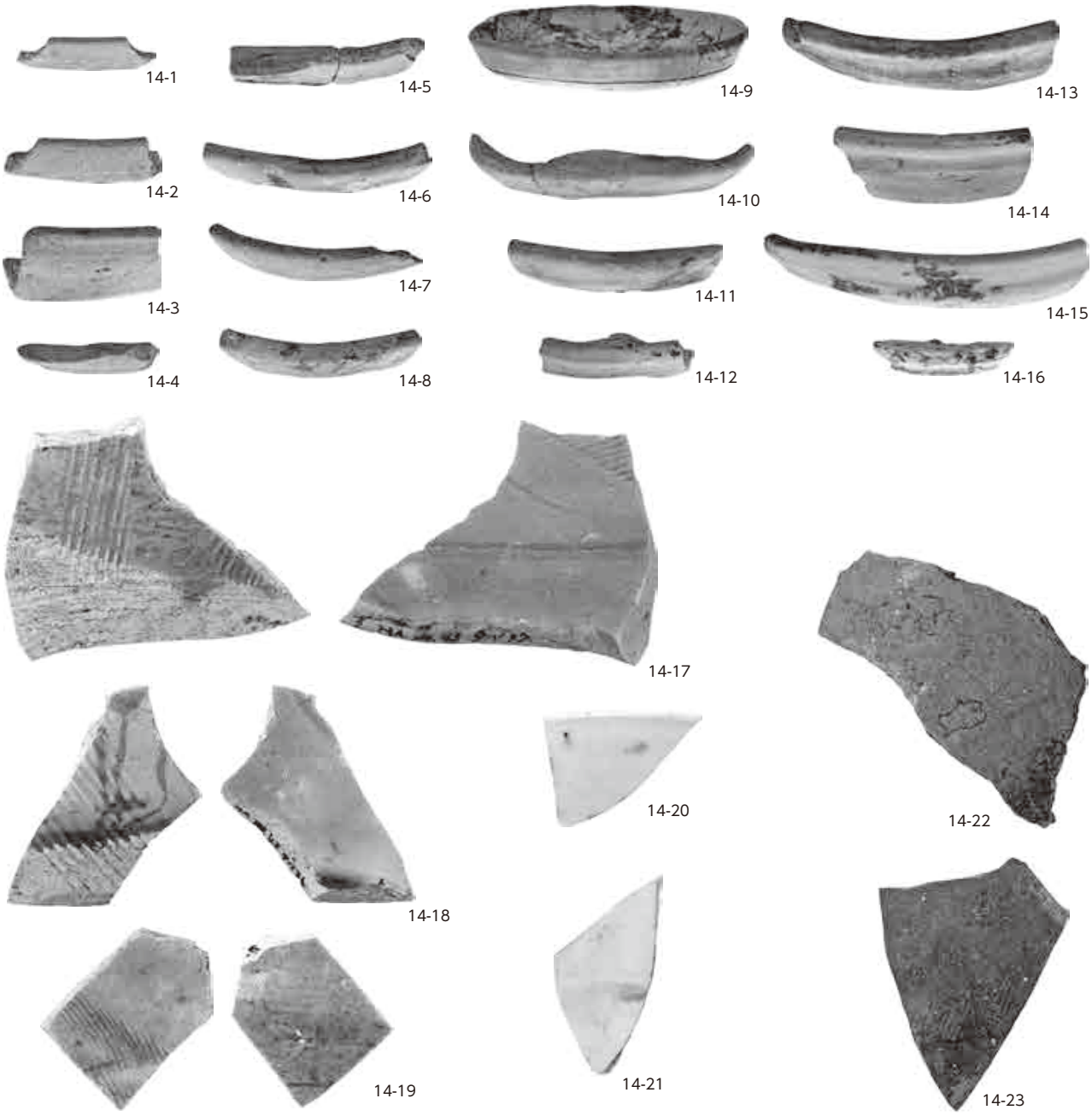


溝２出土遺物（2）

▽溝 2



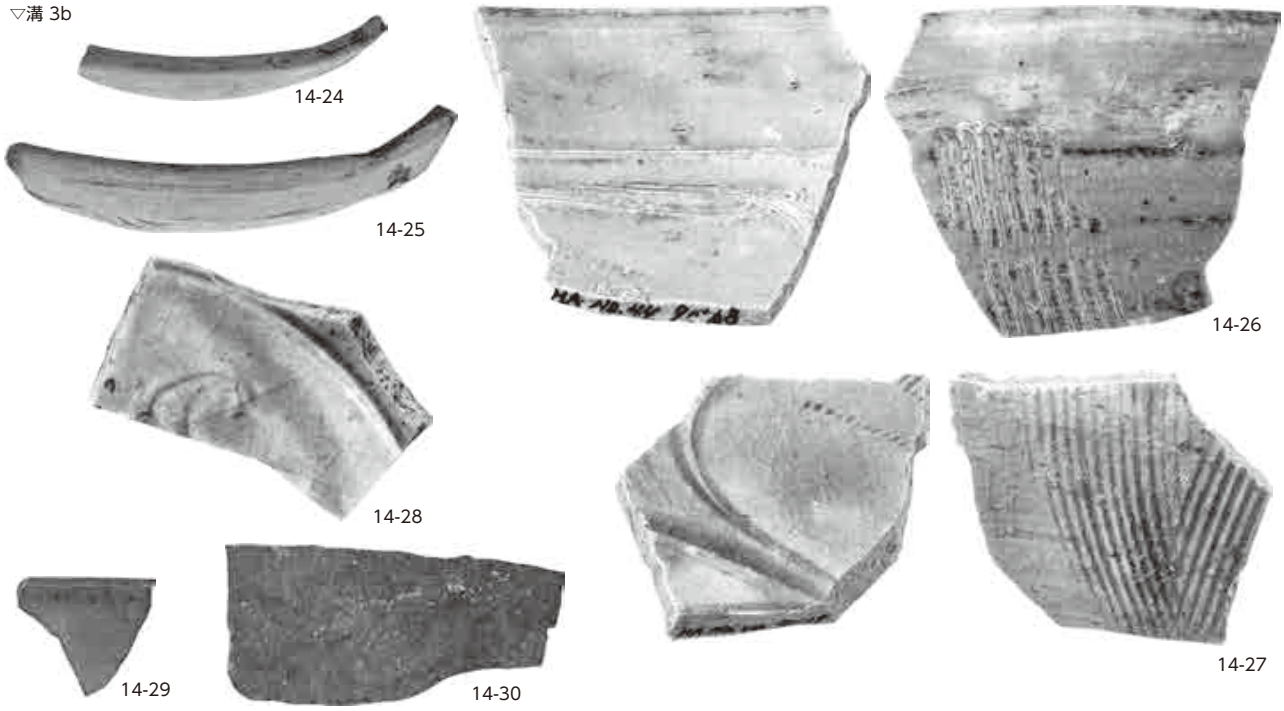
▽溝 3a



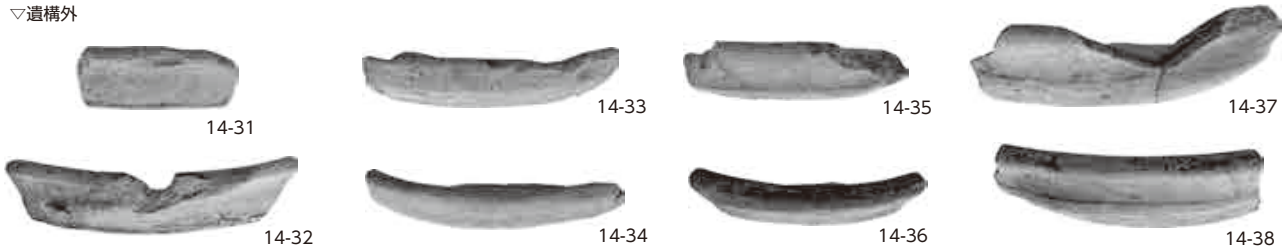
溝3a出土遺物

図版９

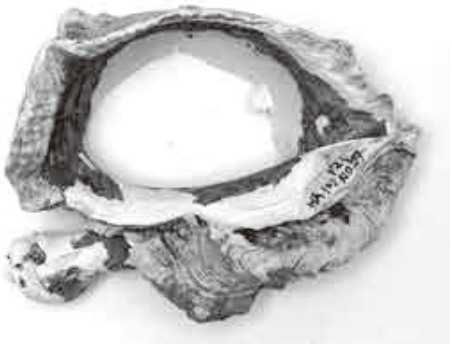
▽溝 3b



▽遺構外



▽P21 貝



溝3b出土遺物

極楽寺旧境内遺跡（№291）

極楽寺二丁目948番8

例　　言

1．本報は「極楽寺旧境内遺跡」内、極楽寺二丁目948番8における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査期間　2005年4月7日～同年5月23日

　調査面積　50.50㎡

3．本調査地点の略称はGK2948とした。

4．調査体制

　担　当　者　馬淵和雄

　調　査　員　松原康子（資料整理）・鍛治屋勝二・松葉崇・根本志保（資料整理）・沖元道（資料整理）

　調査補助員　鈴木弘太・岩崎卓治（資料整理）

　作　業　員　天野隆男・牛嶋道夫・宝珠山秀雄（社団法人鎌倉シルバー人材センター）

5．本報作成分担

　遺構図整理　沖元

　遺物実測　　松原・根本・岩崎

　同墨入れ　　松原・根本・岩崎

　同観察表　　松原

　原稿執筆　　馬淵・沖元（担当部分末尾に執筆者名を記す）

　編集・総括　馬淵

目　次

本　文　目　次

第一章　調査地点の概観 …… 43

1．位置と立地 …… 43
2．歴史的環境 …… 43

第二章　調査の概要 …… 49

1．調査にいたる経緯 …… 49
2．調査方法 …… 49
3．調査経過 …… 49

第三章　調査結果 …… 50

第1節　概要 …… 50
1．層序と面の概要 …… 50
第2節　各説 …… 53
1．Ⅰ面 …… 53
2．Ⅱ面上層面 …… 53
3．Ⅱ面下層面 …… 56
4．Ⅲ面上層面 …… 63
5．Ⅲ面 …… 66

第四章　まとめと考察 …… 73

1．遺構の変遷と年代 …… 73
2．まとめ …… 73

挿　図　目　次

図1　調査地点と周辺の遺跡・旧跡 …… 44
図2　明治15年ごろの遺跡周辺地図 …… 46
図3　極楽寺境内絵図 …… 48
図4　調査区設定図 …… 50
図5　調査区土層図（1）、調査区壁出土遺物 … 51
図6　調査区土層図（2）…… 52
図7　Ⅰ面遺構全図・溝状遺構・小穴列 …… 54
図8　Ⅱ面上層面遺構全図・土坑7・P22出土遺物 …… 55
図9　Ⅱ面上層面出土遺物 …… 56
図10 Ⅱ面下層面遺構全図 …… 57
図11 溝1・2・土坑3・4、同出土遺物 … 58
図12 土坑6・8・9、同出土遺物、小穴・Ⅱ面下層面出土遺物 …… 59
図13 Ⅲ面上層面遺構全図、溝3、同出土遺物 …… 60
図14 建物1、同出土遺物 …… 61
図15 建物2、同出土遺物 …… 62
図16 方形土坑、同出土遺物 …… 63
図17 Ⅲ面上層面小穴、Ⅲ面上層面出土遺物 … 64
図18 Ⅲ面遺構全図、小穴・Ⅲ面出土遺物 … 65
図19 遺構変遷図 …… 72

表　目　次

表１　出土遺物観察表（１）…… 67
表２　出土遺物観察表（２）…… 68
表３　出土遺物観察表（３）…… 69
表４　出土遺物観察表（４）…… 70
表５　出土遺物計量表 …… 71

図　版　目　次

図版１…… 75
1-1. 東南山麓から調査区をのぞむ
1-2. 調査地点近景
図版２…… 76
2-1. Ⅰ区Ⅰ面全景
2-2. Ⅱ区Ⅱ面上層面全景（東から）
2-3. Ⅱ区Ⅱ面上層面全景（南から）
図版３…… 77
3-1. 土坑２（北から）
3-2. 砥石・滑石印判出土状況（西から）
3-3. Ⅱ区Ⅱ面下層面全景（北から）
図版４…… 78
4-1. Ⅰ区Ⅱ面下層面全景（東から）
4-2. Ⅱ区Ⅱ面下層面全景（東から）
4-3. Ⅱ区Ⅱ面下層面全景（南から）
図版５…… 79
5-1. 溝１（南から）
5-2. 溝２（南から）
5-3. 土師器皿出土状況（南から）
図版６…… 80
6-1. 土坑３・４（北から）
6-2. Ⅰ区Ⅲ面上層面全景（東から）
6-3. Ⅰ区Ⅲ面上層面全景（北から）
図版７…… 81
7-1. 方形土坑（北から）
7-2. 溝３（北から）
7-3. Ⅱ区Ⅲ面上層面全景（東から）
図版８…… 82
8-1. Ⅱ区Ⅲ面上層面（南から）
8-2. Ⅰ区南壁土層断面
8-3. Ⅰ区東壁土層断面
図版９…… 83
9-1. Ⅰ区北壁土層断面
9-2. Ⅰ区深掘り（南から）
9-3. Ⅱ区東壁土層断面
図版10 …… 84
出土遺物１
図版11 …… 85
出土遺物２
図版12 …… 86
出土遺物３
図版13 …… 87
出土遺物４
図版14 …… 88
出土遺物５

第一章　調査地点の概観

１．位置と立地

鎌倉市極楽寺地区は、鎌倉旧市街地が広がる滑川流域の低地を囲繞する丘陵地帯の南西端に位置する。極楽寺川沿いの谷と、そこから伸びる支谷で構成される南北に長い地区である。近世には相模国鎌倉郡極楽寺村と称し、その四至は明治時代初期の『相模国鎌倉郡村誌』(『皇国地誌』) によれば、東は山上で長谷村、坂ノ下村と、西は山上で津村、腰越村と、北は山上で笛田村と境を接し、南は相模灘に浜すとある。極楽寺地区には極楽寺が所在し、これが地名の由来となっている。

調査地点は鎌倉市極楽寺二丁目948番8に所在する。極楽寺川を海から1kmほど遡上すると極楽寺がある。現在の極楽寺と西北に隣接する稲村ガ崎小学校が往時の極楽寺中心伽藍と考えられている（玉林ほか1980)。極楽寺境内絵図によれば、この極楽寺中心伽藍から四方に伸びる支谷内にも極楽寺の伽藍範囲は及んでいる。これらの支谷のうち、稲村ガ崎小学校から北北東に伸びる馬場ヶ谷と呼ばれる谷戸を300ｍほど進んだ谷戸のなかほどに本調査地点は所在する。

２．歴史的環境

縄文時代

鎌倉市内では、荏柄天神社前や横浜国大付属小学校内などの山裾で、諸磯ｂ式や称名寺式の縄文土器が採集されている（赤星1959)。本調査地点周辺では、極楽寺字金山（現在の稲村ヶ崎１丁目内、金山橋に遺称がみられる）にて、石杵ないし敲石とされる石器が採取されている（赤星1941 ／ 1959)。

弥生時代

鎌倉旧市街地内では、滑川と二階堂川が合流する市街地北東域一帯に弥生中期～後期にかけての集落址が確認されている（馬淵1998 ／ 1999 ／斎木ほか2007)。本調査地点周辺では、本地点西北200ｍの中世枡形遺構（「一升枡」）の北側の尾根の頂部付近で弥生時代末期～古墳時代初頭の竪穴住居址が確認され（地点34－8)、地点34－10では弥生時代末期の壺型土器が出土している（鈴木ほか2001)。

古墳時代

極楽寺の東方の長谷小路周辺では明確に遺構に伴うものはないものの、弥生後期～古墳後期にかけての土器が採取されている（斎木ほか1992 ／瀬田1994 ／木村・佐藤1995など)。また、和田塚周辺には古墳時代後期と思われる円墳群があったとされ（「向原古墳群」)、このうちの采女塚からは人物埴輪像などが出土している（須藤1896 ／八木1897 ／坪井1909 ／赤星1959)。

鎌倉市内に現存する古墳でもっとも多いのが横穴古墳である。このうち稲村ヶ崎駅周辺から北方に伸びる正福寺谷内に、姥ヶ谷横穴群29穴（三上1948 ／赤星1959)・陣鐘山横穴（三上1948 ／赤星1959)・一ノ谷横穴群３穴（原1951 ／赤星1959)・二ノ谷横穴群10穴（三上1948 ／赤星1959 ／田代ほか2002）がある。また、現在、鎌倉文学館のあるあたりに、直刀・金環を出土した長楽寺山横穴（赤星1959)・長楽寺谷横穴群３穴（赤星1959）が知られ、光則寺裏に光則寺谷横穴（赤星1959）がある。このように、極楽寺の所在する谷の東西に、横穴の存在が確認される一方で、地点17及び地点15に横穴転用のやぐらが１基ずつある（田代ほか1995・1996）以外には、地点13のやぐらを「一般やぐら形でなく末期横穴を利用したものらしい形」（赤星1959）とされる程度で、極楽寺周辺では他に横穴の存在が確認されていない。しかし、地点17や地点15の事例にもあるように、横穴転用やぐらの存在や、極楽寺造

図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡

図１調査地点名（遺跡名）・地点番号・地番・（担当者と調査年度）・「調査報告書」（編集者と発行年度）

（№291極楽寺旧境内遺跡）
本調査地点　極楽寺２－948－７　2．極楽寺３－298－１外（1994齋木）「極楽寺旧境内遺跡」（齋木1998）3．極楽寺２－994（赤星1973）「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ」（1983赤星）　4．極楽寺４－885－１付近（大三輪・手塚1973）「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ」（1983）　6．極楽寺３－320－１（田代1995）「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13第１分冊」（田代・継1997）　7．極楽寺３－335－３（田代1995）「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13第２分冊」（田代1997）　8．極楽寺３－348－２（田代1996）「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14第１分冊」（継1998）　10．稲村ケ崎２－398－イほか地点（馬淵1997）「極楽寺旧境内遺跡」（馬淵1999）　11．極楽寺３－358・359（原2002～2003）「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22第２分冊」（原ほか2006）　12．極楽寺３－359－８の一部地点（宮田2007）「極楽寺旧境内遺跡」（宮田2009）13．極楽寺３－340－５（田代1990）「平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」（継1992）14．極楽寺４－986－１先市道（1972）「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ」（1983）16．極楽寺４丁目地内（1994～1995田代）「東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集」（田代他1996）18．極楽寺４丁目地内（宮田1996）「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」（宮田1997）20．極楽寺４－920（汐見1998）「鎌倉の埋蔵文化財３」（1999汐見）27．極楽寺２－950・953－２・954・955・993－１・993－２・14－13先（2005～2008松葉・汐見・鈴木他）「かながわ考古学財団調査報告240」（2009柏木・鈴木他）29．極楽寺２－27－１（2006新開・田代）「かながわ考古学財団調査報告209」（2007新開・田代）33．極楽寺１－123－１他（2005齋木）「極楽寺旧境内遺跡発掘調査報告書（2006齋木）

（№290極楽寺中心伽藍跡）
1．極楽寺２－10－６・３－２－３（1977～1979齋木ほか）「極楽寺旧境内遺跡」（1980玉林）5．極楽寺３－298－１外（田代1992）「東国歴史考古学研究所調査研究報告第25集」（田代1992）　9．極楽寺３－1028－１の一部地点（汐見2003）「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23第２分冊」（汐見・小泉2007）

（№128極楽寺やぐら群）
21：極楽寺２－56（長谷川・大塚1998）「かながわ考古学財団調査報告72」（長谷川他1999）　23．極楽寺２－56（鈴木・井関1999）「かながわ考古学財団調査報告90」（鈴木2000）
24．極楽寺２－56（鈴木・井関1999）「かながわ考古学財団調査報告93」（鈴木2000）

（№293一升枡遺跡）
22．極楽寺４－855－１（長谷川1999）「かながわ考古学財団調査報告73」（長谷川他1999）　25．極楽寺４－855－１（鈴木・木村1999）「かながわ考古学財団調査報告100」（鈴木2000）

（№464西方寺北やぐら）
28．極楽寺２－11・11－２・14－４・16・17・20－２（松葉・柏木2007）「かながわ考古学財団調査報告229」（松葉他2008）

（№141真言院北やぐら群）
26．極楽寺２－943（宍戸・宮坂2002）「かながわ考古学財団調査報告156」（宮坂他2003）　30．極楽寺２－946・943（汐見・井関2004）「かながわ考古学財団調査報告194」（井関他2006）

（№292五合枡遺跡）
19．極楽寺１丁目（田代1997）「東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集」（田代・宗臺1998）31．（2002原・福田）「五合枡遺跡（仏法寺跡）発掘調査報告書」（福田2003）

（№219西方寺跡）
32．極楽寺２－18外地点（1998齋木）「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16第１分冊」（粂2000）

（№129極楽寺前やぐら）
15．極楽寺１丁目地内（1995田代）「平成６年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」（田代他1996）17．極楽寺１丁目地内（田代1995）「東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集」（田代他1996）

（その他）
34．極楽寺坂地区（鈴木・菊川2000）「『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査」（鈴木他2001）

営などの事業により、中世以降横穴が削平された可能性も考慮にいれるべきであろう。

古代

鎌倉旧市街地は古代相模国鎌倉郡に属しており、現在の御成小学校付近に鎌倉評もしくは郡家が比定されている（河野ほか1990）。宝亀二年（771年）の五畿七道制再編まで、古東海道は鎌倉を通っており、この経路に関しては、二通りの指摘がなされている。一つは深沢から大仏坂を抜け、現在の長谷小路を通り、六地蔵交差点に至る経路（木下ほか1997）。もう一つは、稲村ヶ崎の辺から市内に入り、浜堤上を通り、稲瀬川の河口付近から六地蔵交差点に向かって北上する経路であり（馬淵1994／2004）、後者の場合は極楽寺近辺を通ることになる。

古東海道の経路に近いと考えられる、長谷小路周辺の砂丘上では８世紀～９世紀にかけての集落址や土壙墓が検出されている（齋木ほか1992／大河内ほか1997／大河内1997など）。本調査地点周辺では、

図２　明治15年ごろの遺跡周辺地図（迅速測図）

地点６において遺構は検出されていないものの、８世紀後半から９世紀後半を中心とした、土師器や須恵器が多量に出土している。

中世

極楽寺は霊鷲山感応院と号し、真言律宗を宗旨とする。開基は北条重時、開山は忍性とされる。元徳元年（1329）の年紀をもつ『極楽寺縁起』によれば、「正永和尚」が深沢谷に丈六の阿弥陀如来像を安置し、極楽寺を造営していたが、完成する前の正嘉二年（1258）に亡くなっている。正元元年（1259）に、以前からあった極楽寺が狭小なため、北条重時が当時常陸の三村寺（三村山清涼院極楽寺）にいた忍性を招き寄せ、相談したところ、当時地獄谷と称されていた地に龍池があり、そこがよいといって、念誦したところ感応があったのでここに定めた。重時没後、その子の長時・業時兄弟が造営したという。

一方、『極楽寺由緒沿革書』によると永久年中（1113－1118）勝覚の創建と伝えるなど、建立当初のことは詳しくはわからない。『吾妻鏡』には弘長元年（1261）４月21日「奥州禅門極楽寺亭」に入御とあるのが初出である。ついで24日に「極楽寺新造山荘」とあり、同年11月３日「極楽寺別業」で重時が没し、同三年10月26日重時の三回忌を極楽寺で執行、導師は宗観房とある。『忍性菩薩行状略頌』によれば、忍性は文永四年（1267）８月に極楽寺に移住したとあり、寺蔵の十大弟子立像の銘にも、「文永五年辰戌年造立畢、願主忍性」とあることから、忍性の入寺は文永四年であろうとしている（川副・貫1959）。

前述したように忍性の極楽寺入寺が文永四年と考えられることや、重時三回忌の導師が宗観房であることから、当初念仏寺院であったものが律院化していったものと考えられている（上横手1992・馬淵1998）。

また、境の地の小堂から、重時の氏寺としての念仏寺になり、そして、忍性入寺以降律院化した、という考えも示されている。（小野塚1984）。

現在、極楽寺のある平地部は「極楽寺中心伽藍跡（№290）」とされている。周辺の谷戸には支院や関連施設があったとされ、「尼寺跡（№214）」・「浄土院跡（№215）」・「真言院跡（№216）」・「西方寺跡（№219）」・「福田院跡（№220）」・「稲荷社跡（№221）」が周知の遺跡として登録されている。また長谷寺の北の谷戸で馬場谷の東方にあたるところは「桑ヶ谷療病院跡（№294）」とされている。

地点１では多量の搬入陶磁器とともに、方丈華厳院址と推定される位置から、凝灰岩切石による壇正積基壇が検出されている（玉林ほか1980）。地点２・５からも多量の瓦が出土しているが、地点１では「鎌倉系」瓦が約3/4、「壬生寺系」瓦が約1/4に対し、地点２では出土瓦のほぼすべてが「壬生寺系」瓦であり、地点５でも９割近くが「壬生寺系」瓦となっている（原2006）。地点２から出土した瓦については、大阪四天王寺、京都壬生寺、堺市家原寺町遺跡、河内若江寺、横須賀近殿神社に同范、京都法勝寺金堂のものと類似するとされ、年代は中世Ⅰ期（1180－1210）あるいはそれ以前の11世紀代のものと、中世Ⅱ期（1210－1260）のものがあると指摘されている（山崎2000）。

地点２では、これらの瓦との関連が指摘されている時期不詳の基壇が存在し（齋木1998）、ここで出土した瓦当と同范のものが畿内や、三浦氏の本願地と目される横須賀近殿神社から出土している。またこれらの中世Ⅰ期・中世Ⅱ期の瓦に関しては、小野塚氏の指摘する律院化する前の小堂の存在との関わりを考える上で重要な資料といえよう（小野塚1984）。

本調査地点の所在する谷は馬場ヶ谷という。馬場ヶ谷は『相州鎌倉極楽寺村絵図』や『皇国地誌』にその名が見られ、近世では極楽寺村に含まれていた。馬場ヶ谷には馬場に関わる伝承が残されており、「忍性が病気の治った馬の調教のためにつくったといわれ、武士が馬術の稽古もした」（鎌倉市教育センター2009）というものである。江戸時代の成立と考えられる『相模国極楽寺境内絵図』には、馬場ヶ谷と考えられる谷に稲荷・浄土院・尼寺・観智院・山王窟・普賢院・精進院・十二所権現が記されている。この

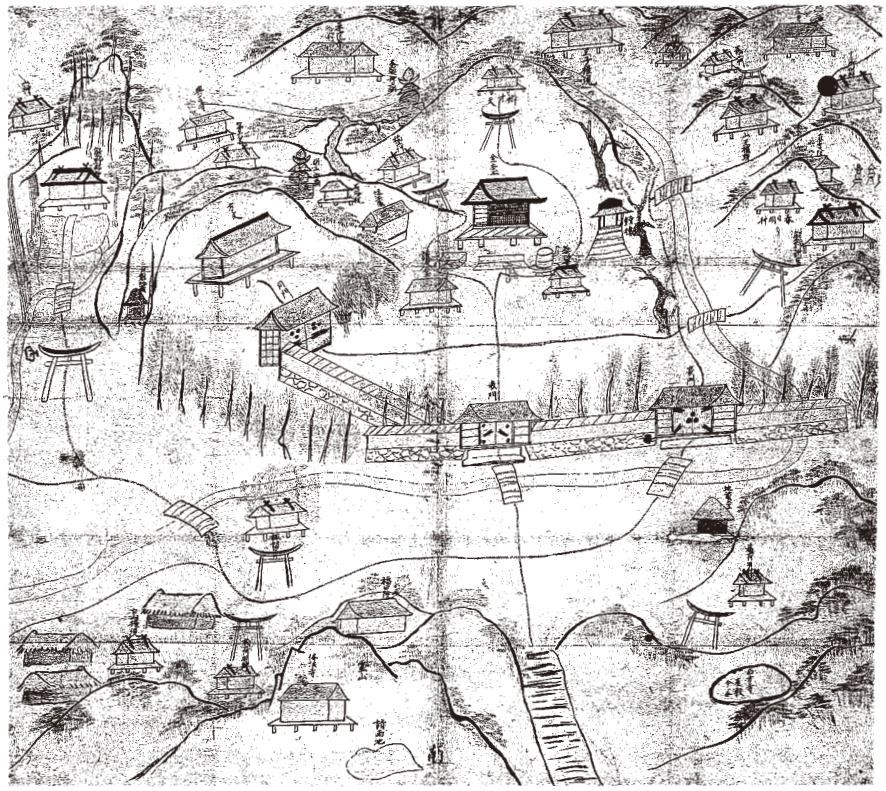


図３　極楽寺境内絵図（右上方の黒丸印付近が調査地点 鎌倉国宝館図録第１５集を改変）

うち本調査地点の西側道路対面の小谷戸に「尼寺跡（№214）」、本調査地点の南西100mほどの小谷戸に「浄土院跡（№215）」が登録されている。このうち尼寺に関しては、「金沢文庫文書」年未詳十一月一日付金沢貞顕書状にみられる法花寺があたるのではないか、という指摘がされている（細川1989）。

これまで、馬場ヶ谷内では谷内で４箇所、やぐらが10基、「一升枡」を含む馬場ヶ谷の東西の山稜部が調査されている。地点３では泥岩地行と遺構らしき窪みが遺物とともに検出されている。地点27ではやぐらとともに崖裾部の調査が行われており、溝や礎石建物の一部が検出されている。

（沖元）

第二章　調査の概要

１．調査にいたる経緯

鎌倉市中心部西南の山稜を超えたところにある極楽寺二丁目に、鋼管杭打ち込みによる基礎工事をともなう個人住宅の建設が計画された。場所は鎌倉時代後期に大きな勢力を持っていた律院・極楽寺の旧寺域に相当する谷間の一角にあたり、工事による遺構の損傷を免れないのは明らかであった。協議の結果、耐震を意図した工法から設計変更は困難と判断され、国庫補助事業として発掘調査が実施されることとなった。調査は2005年４月６日に始められた。

２．調査方法

掘削方法

残土処理の関係上、調査対象地を南半部と北半部の２区に分割し、それぞれ「１区」「２区」と名付けた。排土に当たっては地表下70㎝までを重機ですき取り、以下を人力でおこなった。

測量基準杭の設定

西側前面の道路方位を概念上の基本軸とし、測量はこれに直交または平行する軸線を５ｍ間隔で設定しておこなった。のち資料整理の際、世界測地系の数値を導入した。調査区はＸ－76 13240 ～ 76 14120 Ｙ－27 60830 ～ 27 61910の間にある。

３．調査経過

調査は2005年４月６日に始まり、５月23日に終了した。その間の経過は次の通り。

4月6日	機材搬入、並行して重機によりⅠ区表土掘削
4月12日	Ⅰ面全景写真撮影と平面実測
4月15日	Ⅱ面上層平面実測
4月18日	Ⅱ面下層平面実測
4月19日	Ⅱ面下層全景写真撮影
4月22日	Ⅲ面全景写真撮影と平面実測
4月25日	Ⅲ面下深掘り
5月6日	重機により２区表土掘削
5月10日	Ⅱ面上層全景写真撮影と平面実測
5月12日	Ⅱ面下層全景写真撮影と平面実測
5月16日	Ⅲ面全景写真撮影と平面実測
5月17日	Ⅲ面下全景写真撮影と平面実測
5月20日	調査終了、機材片付け
5月23日	撤収

（馬淵）

第三章　調査結果

第１節　概要

１．層序と面の概要

Ⅰ面（図7）

厚さ約60 ～ 70㎝の表土を除くと灰褐色砂質土層が現れる。この層は、東壁際で27.95ｍ、西壁際で27.70ｍと東の山際から西方向、すなわち谷中心部に向かって落ちていることがわかる。北半部では上面がほとんど削られて遺構は検出されなかったが､南半部では溝状遺構と小穴の３つ並んだ列が検出された。全体に遺構は少ないが「Ⅰ」面とした。

Ⅱ面上層面（図8）

Ⅰ面を構成する厚さ約20cm ～ 25cmほどの灰褐色砂質土層を排除すると、泥岩粒と遺物片を含んだ灰褐色粘質土層が現れる。この層は北東隅で27.80ｍ、南西隅で27.45ｍと、Ⅰ面同様谷中心部に向かって落ちている。検出された遺構は、土坑３基、小穴２口と少ないが、北壁際に泥岩地行が検出されたこともあり､「Ⅱ」面上層とした。

Ⅱ面下層面（図10）

Ⅱ面上層構成土である厚さ約15cm ～ 20cmほどの灰褐色粘質土層を排除すると、灰褐色粘質土の層が

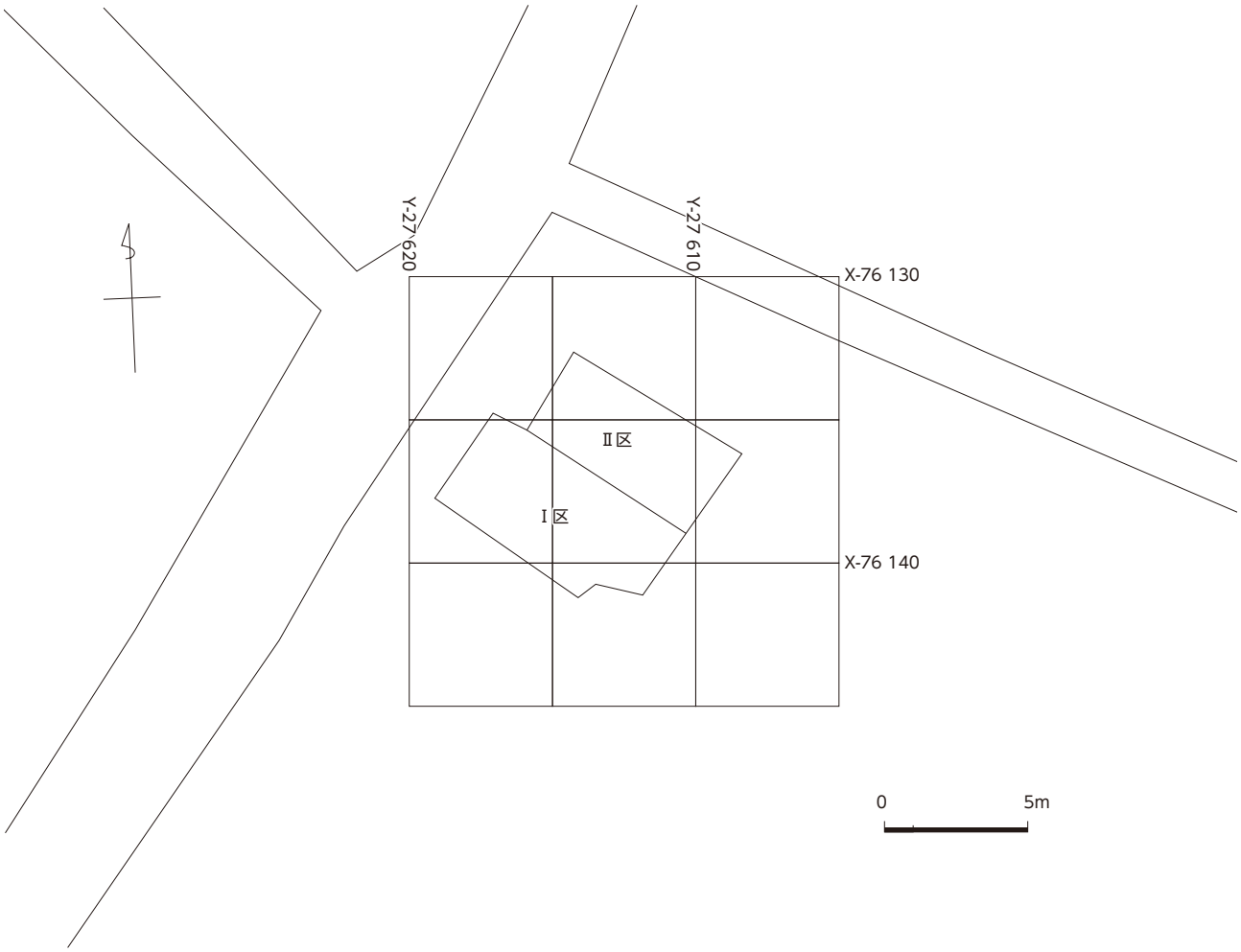


図４　調査区設定図

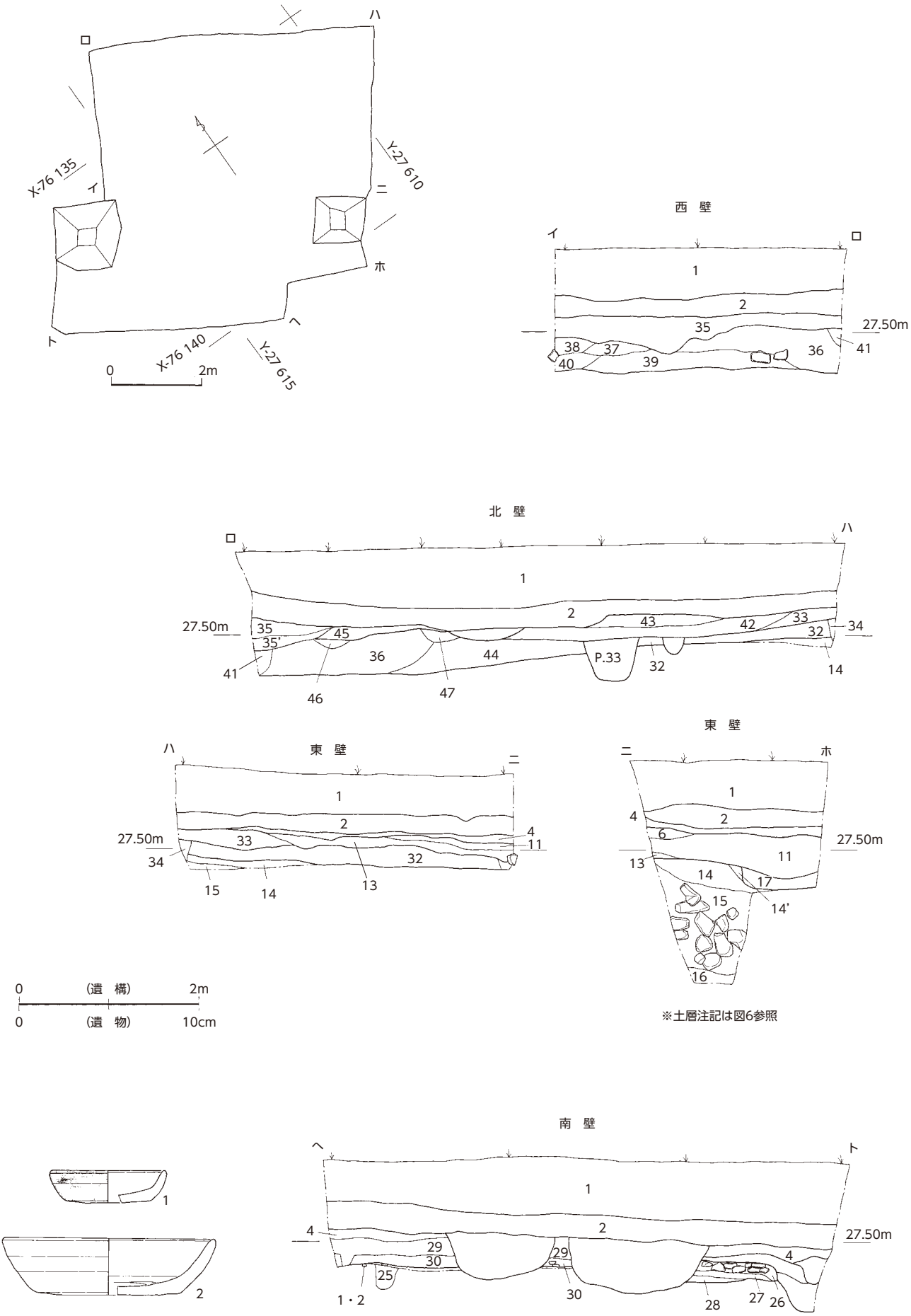
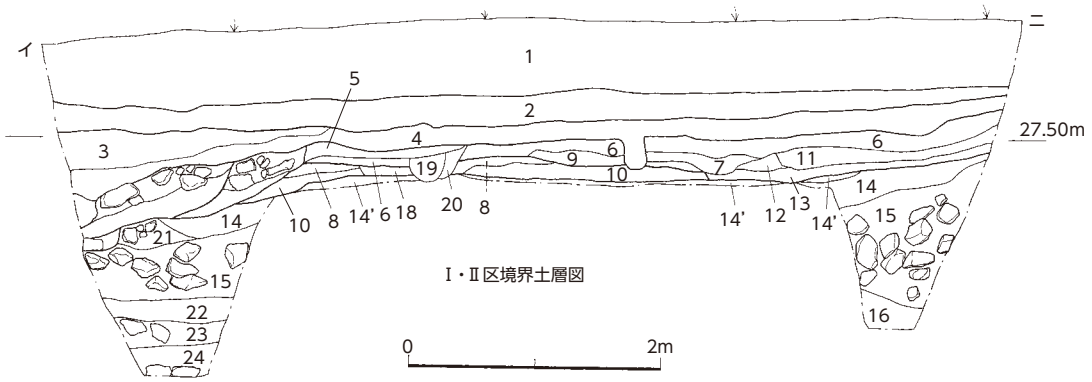


図５　調査区土層図（1）、調査区壁出土遺物



1. 近代泥岩地行
2. 灰褐色砂質土　耕作土、上面がⅠ面
3. 灰褐色弱粘質土　少量の泥岩粒子土器片含む
4. 灰褐色粘質土　泥岩粒子、遺物含む、上面にⅡ面上層
5. 灰褐色粘質土　泥岩小塊・遺物含む、上面にⅡ面下層
6. 灰褐色粘質土　泥岩小塊・遺物含む
7. 暗灰褐色砂質土　泥岩小塊・遺物含む
8. 明灰褐色泥岩層　上面にⅢ面上層
9. 暗灰褐色砂質土　泥岩小塊・遺物含む
10. 明灰褐色泥岩層
11. 暗灰褐色砂質土　半拳大泥岩多く含む
12. 暗灰褐色砂質土　泥岩は11より細かい
13. 暗灰褐色粘質土　泥岩小塊・遺物片含む
14. 黄褐色泥岩層　破砕泥岩版築層、上面がⅢ面
15. 人頭大泥岩地行層
16. 黄褐色泥岩層　破砕泥岩版築層
17. 灰褐色砂質土　方形土坑1充填土
18. 灰褐色弱粘質土　しまりやや弱い、たまご大泥岩つまる、炭化物含む
19. 灰褐色粘質土　半拳大泥岩・遺物片・炭化物含む
20. 灰褐色粘質土　1～2cmの泥岩粒多く含む、炭化物少量含む
21. 灰褐色弱粘質土　拳大～人頭大泥岩つまる、炭化物・土師器皿片含む
22. 黄褐色泥岩層　16に似る
23. 茶褐色粘質土　しまりやや弱い、人頭大泥岩含む
24. 茶褐色粘質土　23よりしまり良い、泥岩粒・炭化物・土師器皿片含む
25. 暗灰褐色弱粘質土　3cm大の泥岩を多く含む
26. 灰褐色粘質土　半人頭大泥岩つまる
27. 灰褐色粘質土　1～2cmの泥岩粒含む、炭化物少量含む、14´に似る
28. 灰褐色粘質土　27に似る、炭化物やや多く含む
29. 灰褐色粘質土　1cm～こぶし大の泥岩、炭化物多く含む
30. 灰褐色粘質土　29に似る、29より大きめの泥岩つまる
31. 暗灰褐色粘質土　2～3cm大の泥含む
32. 人頭大泥岩版築層　32と14の間に灰褐色粘質土が薄く挟まる　上面にⅢ面上層
33. 拳大～人頭大泥岩版築層　間に灰褐色粘質土がつまる、炭化物・土師器皿小片少々含む
34. 灰褐色弱粘質土　泥岩細片多量に含む
35. 灰茶褐色粘質土　0.5～1cmの泥岩粒全体に多く含む、炭化物・土師器皿小片含む
36. 暗灰褐色粘質土　1cm位の泥岩粒多量に含む、炭化物・土師器皿小片やや多く含む、しまり良い
37. 灰褐色粘質土　しまり強、破砕泥岩粒～3cm大泥岩多く含む、炭化物・土師器皿小片含む
38. 半人頭大泥岩層　間に炭化物・泥岩粒まじりの暗灰褐色粘質土がつまる
39. 人頭大泥岩版築層　32と同じか
40. 灰褐色弱粘質土　破砕泥岩粒多量に含む、たまご大泥岩・炭化物・土師器皿小片含む
41. 明灰褐色弱粘質土　しまりやや弱い、泥岩粒～2～3cm大の泥岩多く含む、炭化物・土師器皿小片含む
42. 暗灰褐色粘質土　2～3cmの泥岩粒多く含む、炭化物・土師器皿片含む
43. 暗灰褐色粘質土　42に似る、土師器皿片やや多い
44. 半人頭大泥岩層　すきま多い
45. 明茶褐色粘質土　1～3cm泥岩非常に多く含む、炭化物・土師器皿片少量含む
46. 明灰褐色弱粘質土　45よりさらに泥岩粒多い、炭化物・土師器皿片少量含む
47. 暗茶褐色粘質土　土坑7覆土に似るが、泥岩粒より多い

図6　調査区土層図（2）

現れる。これを「Ⅱ」面下層とした。面の標高は27.40ｍ～27.80ｍとなっている。北壁際では、Ⅱ面上層と面を共有している。ここでも北東から南西方向へ傾斜している。

検出された遺構は、溝2条と土坑5基、小穴12穴。

Ⅲ面上層面（図13）

Ⅱ面下層構成土である灰褐色粘質土を排除すると約５～10cmほどで泥岩地行の広がる面が現れる。これを「Ⅲ」面上層とした。標高は27.10ｍ～27.70ｍでやはり北東から南西に傾斜している。

検出された遺構は、溝１条、掘立柱建物２棟を含む小穴39穴。

Ⅲ面（図18）

厚さ約５～10cmほどのⅢ面上層の泥岩地行の直下に暗茶褐色粘質土や炭化層を挟んで泥岩地行が広がる。これを「Ⅲ」面とした。標高は27.25ｍ～27.50ｍ。調査区内の一部でⅢ面上層と面を共有する。また北壁際では下層の15層と思われる大型泥岩地行層が露頭している。検出遺構は小穴10穴と少ない。

（馬淵）

第２節　各説

１．Ⅰ面

溝状遺構

位置：Ｘ－76 137.83～－76 139.72　Ｙ－27 614.58～－27 616.92　**規模**：東西293cm×南北47cm以上×深さ7cm（底面高27.47ｍ）　**平面形**：直線　**断面形**：浅いⅢ形　**主軸方位**：N-51°-W　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：東側でなだらかに始まり、西側は面自体が東側に比べて30㎝ほど落ちているので、その傾斜に吸収されて消滅する。長さは上述の通りだが、本址東側の延長線上に浅いすり鉢状の小穴が２個つながったものがあり、これを同一遺構とすれば355㎝になる。南側の小穴列が礎石抜き穴であれば、建物周囲の雨落ち溝のような機能が想定できよう。

小穴列

位置：Ｘ－76 137.82～－76 139.44　Ｙ－27 615.79～－27 617.84　**規模**：東西250cm×南北不明×深さ平均2.5cm（底面高27.47ｍ）　**平面形**：直線　**断面形**：浅いⅢ形　**主軸方位**：N-51°-W　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：上記溝にほぼ平行して、南側に３個の浅い穴が直線状に並ぶ。礎石の抜き痕の可能性があろう。

２．Ⅱ面上層面

土坑２（図8）

位置：Ｘ－76 137.98～(－76 139.15)　Ｙ－27 616.15～(－27 617.66)　**規模**：東西164cm×南北58cm以上（南側は調査区外）×深さ60cm（底面高26.81ｍ）　**平面形**：楕円形　**断面形**：深皿形　**主軸方位**：N-55°-W　**重複関係**：炭下層を切る　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：大きめの穴だが、性格不明。東側の土坑５も似た形をしており、充填土も共通する。同類か。

土坑５（図8）

位置：Ｘ－76 139.12～(－76 139.87)　Ｙ－27 615.11～（－27 616.15）　**規模**：東西112cm×南北33cm以上（南側は調査区外）×深さ54cm（底面高26.95ｍ）　**平面形**：不定楕円形　**断面形**：深皿形　**主軸方位**：N-55°-W　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：土坑２と形態・充填土共に共通しており、併存していた可能性がある。

土坑７（図8）

位置：Ｘ(－76 133.90)～－76 135.44　Ｙ(－27 611.49)～－27 612.97　**規模**：東西95cm×南北151cm以上（北側は調査区外）×深さ13cm（底面高27.44ｍ）　**平面形**：隅丸長方形もしくは長楕円形　**断面形**：皿形　**主軸方位**：N-35°-E　**重複関係**：泥岩地形(じぎょう)を切る　**出土遺物**：瀬戸縁釉小皿（1）・

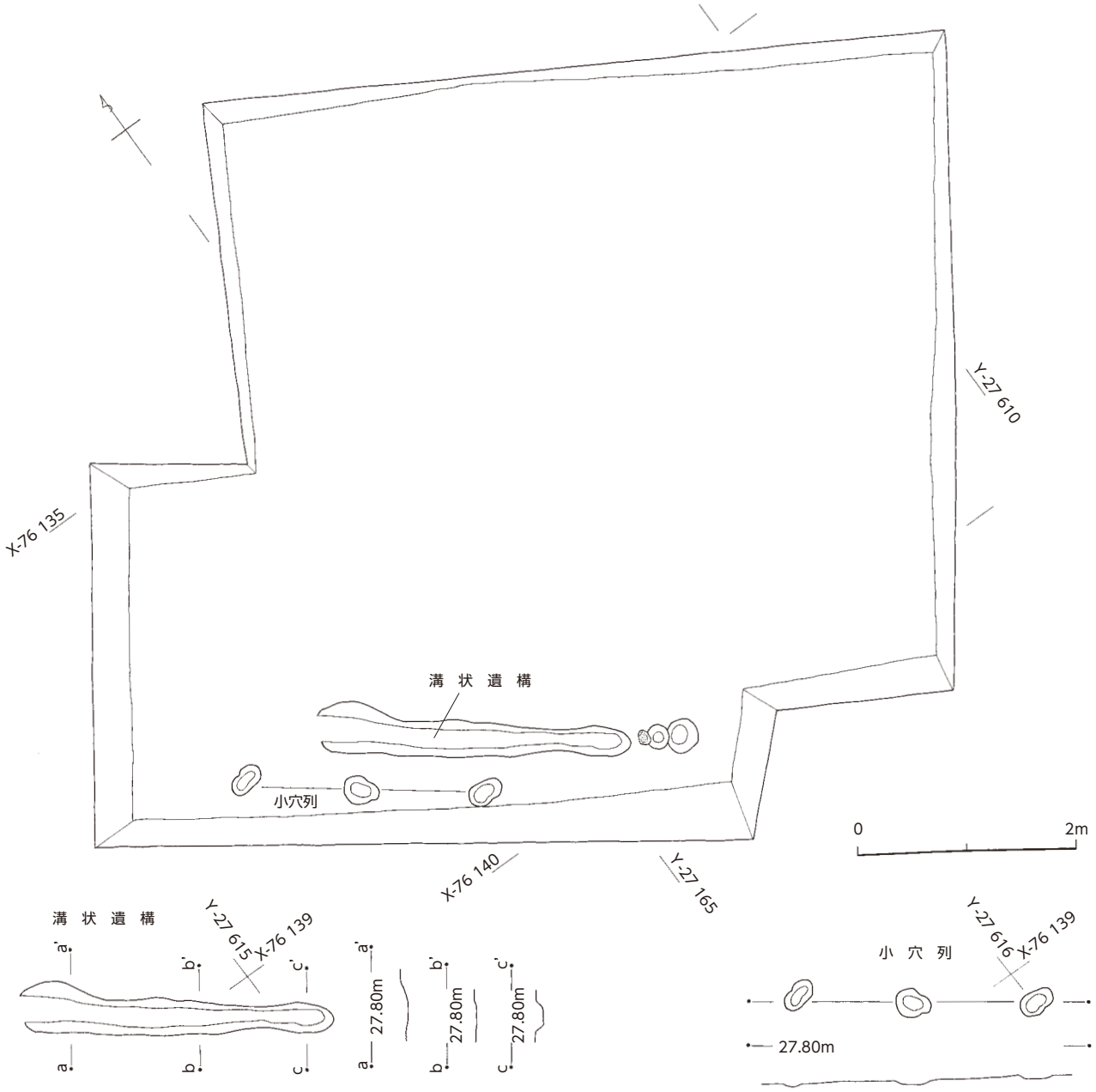


図７　Ⅰ面遺構全図・溝状遺構・小穴列

丸瓦（2）・磨耗陶片（3・4）　**特記事項**：浅い皿形の断面で、充填土中に１辺30 ～ 40㎝の泥岩を含む。性格不明。年代の主体は層全体では次述の通り鎌倉時代後期～末期であろうが、古瀬戸後期ⅠまたはⅡ期の１を指標にすれば、14世紀末～ 15世紀前半の、中世期極楽寺の終末近くまで含まれる。3・4は磨耗陶片とはしたが、擦過ではなく細かい敲打によって縁が減ったもの。

P.22出土遺物（図8）

瀬戸折縁深皿（5）・常滑片口鉢Ⅰ類（6）・敲打痕ある石（7）　**特記事項**：遺物年代は13世紀中葉～後半の6から、14世紀第４四半期～ 15世紀前半の5におよぶ。鎌倉時代後期以降面の更新がなかった可能性も視野に入れておくべきだろう。7は手に持って使用したものか。

Ⅱ面上層面出土遺物（図9）

土師器皿Ｒ種小型（8 ～ 14）・同大型（15 ～ 21）・瓦器火鉢（22）・常滑片口鉢Ⅰ類（23）・瀬戸輪花入子（24）・摩耗陶片（25 ～ 30）・擦石（31）・滑石印判（32）・鳴滝仕上砥（33）　**特記事項**：年代は土師器皿の全体

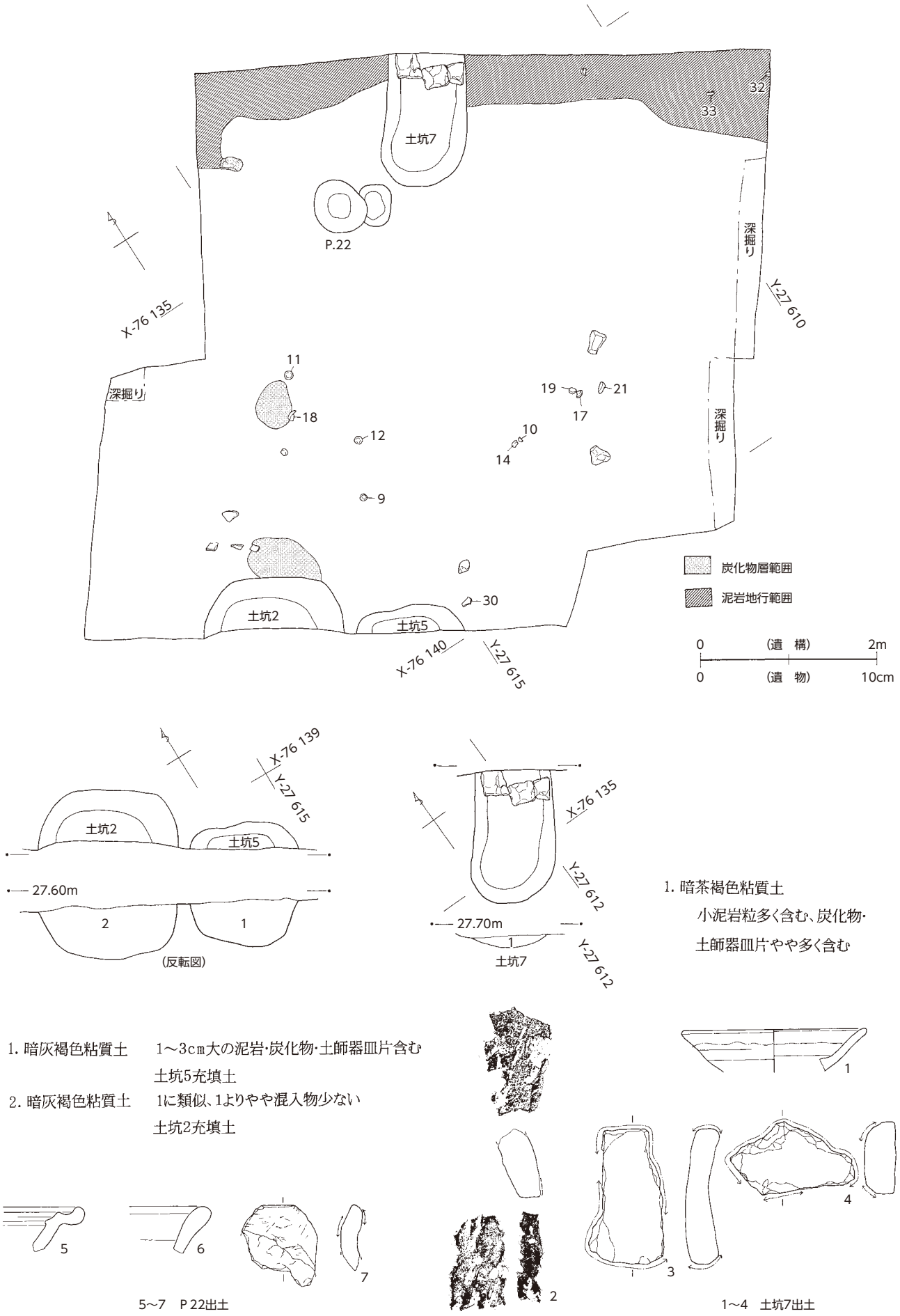


図8 Ⅱ面上層面遺構全図・土坑7・P22出土遺物

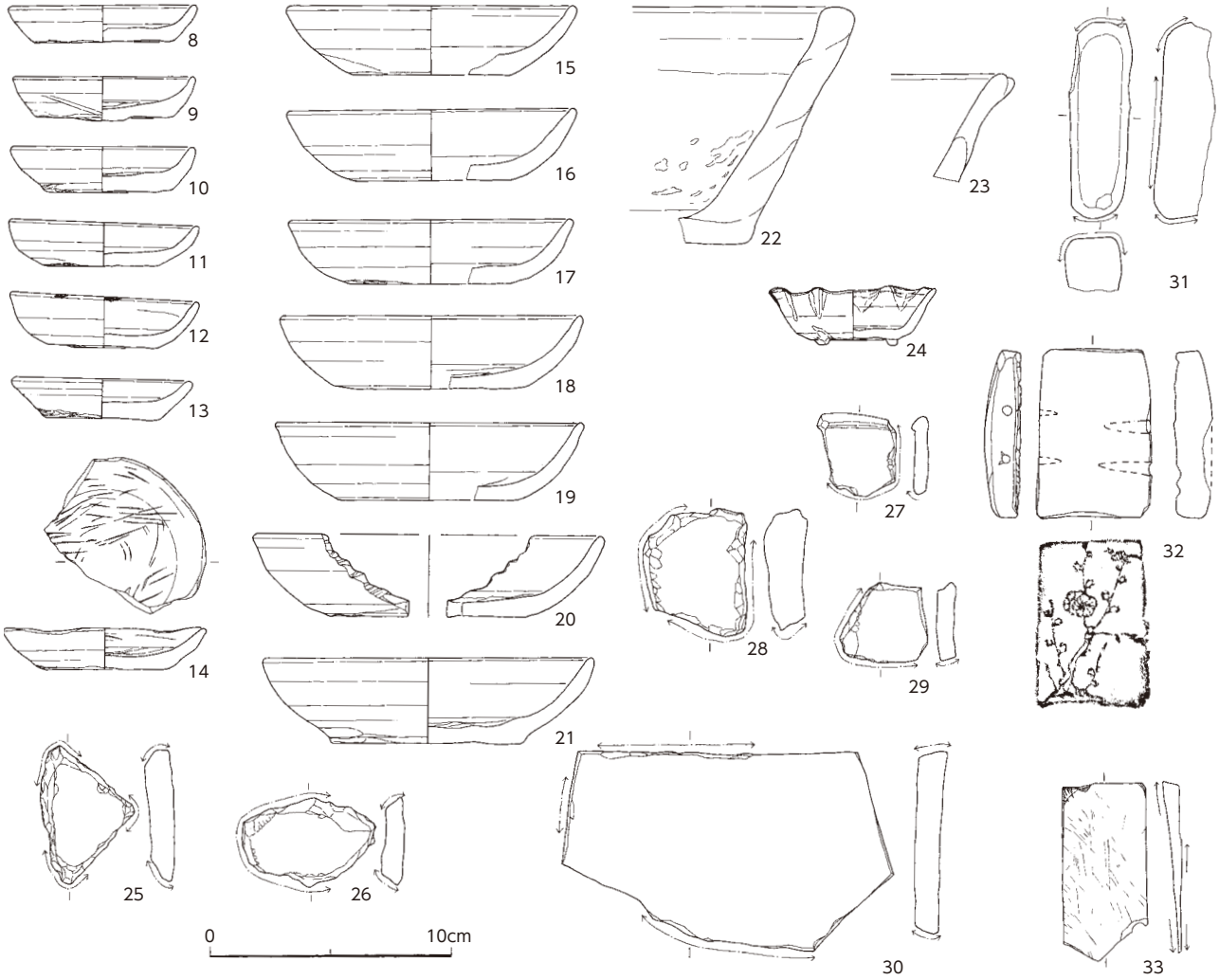


図９　Ⅱ面上層面出土遺物

的傾向や瀬戸24・常滑片口鉢Ⅰ類23などから大きくみて13世紀後半としたい。土師器皿Ｒ種大型20の破断面には、何か細いものを研いだ痕跡のようなギザギザがある。ここで磨耗陶片とした25～30は、図８の３・４と同じく、擦過よりも細かい打突によって縁の角が取れたもの。31は粗粒凝灰岩円礫を使ったもの。持ち砥石か。

３．Ⅱ面下層面

溝１（図11）

位置：X（－76 135.16）～（－76 137.90）Y (－27 616.72) ～（－27 618.82）**規模**：幅（東西）80cm×深さ30cm（底面高27.03ｍ～ 26.79ｍ）　**断面形**：逆台形　流下方向：北→南　**主軸方位**：(N-35°-E)　**重複関係**：溝２を切る　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1・2）　**特記事項**：調査区西壁際に前面の道路に平行して通じる。側溝の可能性があろう。出土遺物の年代は13世紀中葉～同第３四半期だが、遺構年代については前後の関係を考慮して、大きく13世紀後半～ 14世紀前半、すなわちほぼ鎌倉時代後期といっておきたい。

溝２（図11）

位置：X（(－76 133.85）～（－76 137.84）Y (－27 613.35) ～（－27 618.80）　**規模**：幅（東西）200cm以上×深さ50cm（底面高27.29ｍ～ 26.77ｍ）　**断面形**：皿形　流下方向：北→南　**主軸方位**：(N-

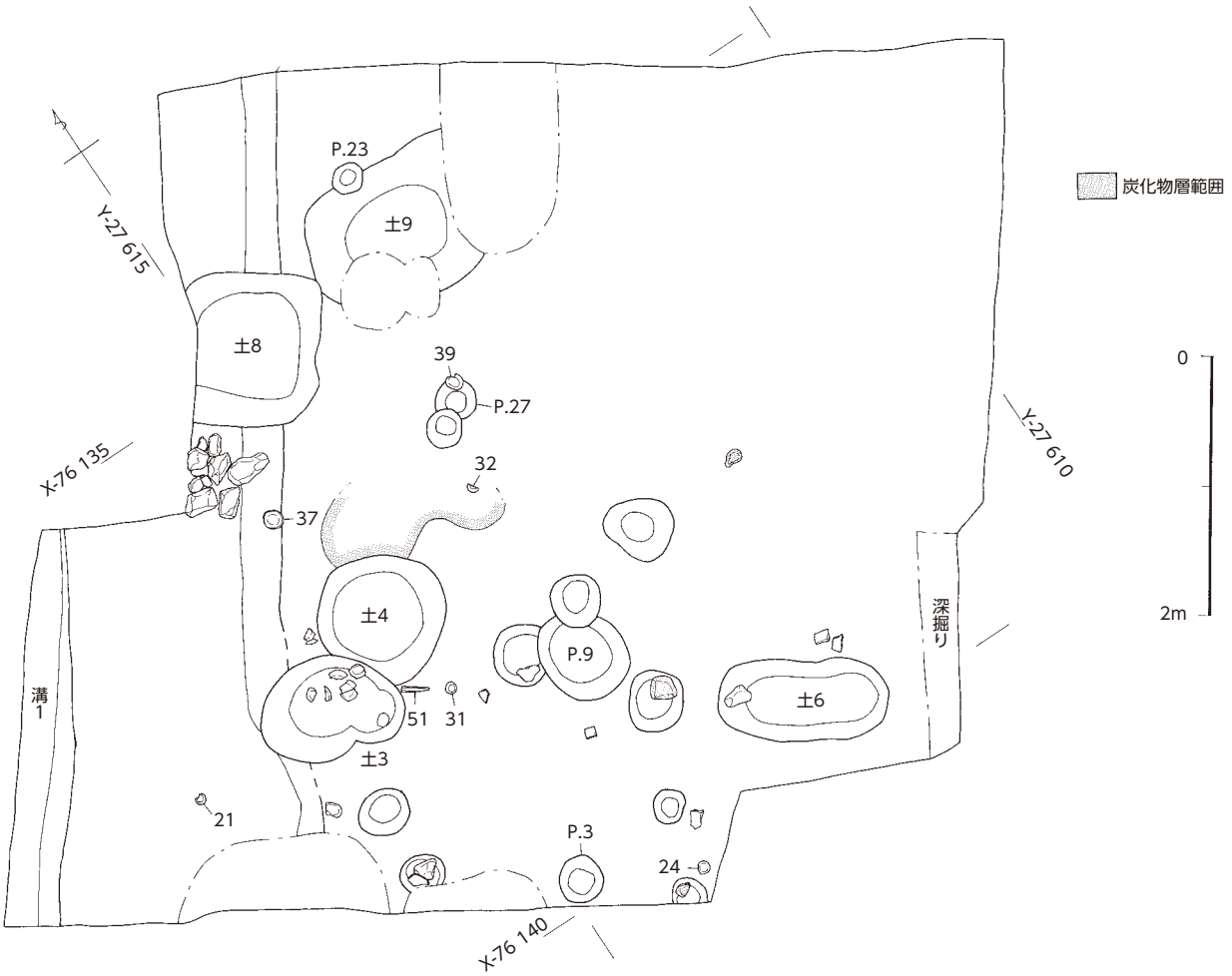


図10　Ⅱ面下層面遺構全図

35°-E）　**重複関係**：溝１、土坑３・８に切られる　**出土遺物**：熙寧元寶（3）　**特記事項**：年代は、遺物を欠くため決めづらいが、溝1および下層の溝3との相対関係から、これも13世紀後半～14世紀前半代を充てたい。

溝１・２深掘り出土遺物（図11）

土師器皿Ｒ種小型（4）　**特記事項**：高台は厚く、器壁は楔形に近い。溝２の下にある一段階古い遺構からの遺物。13世紀第２四半期～同中葉前後か。

土坑３（図11）

位置：Ｘ－76 137.13～－76 138.03　Ｙ－27 615.25～-27 616.33　**規模**：東西105cm×南北79cm×深さ20cm（底面高27.15ｍ）　**平面形**：楕円形　**断面形**：深皿形　**主軸方位**：N-79°-W　**重複関係**：溝２・土坑４を切る　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種中型（5）・同大型（6～8）　**特記事項**：溝２の肩部にかかる円形土坑。土師器が数点投げ込まれている。遺物年代は13世紀後半～14世紀初頭。

土坑４（図11）

位置：Ｘ－76 136.18～-76 137.22　Ｙ－27 614.47～-27 615.50　**規模**：東西103cm×南北104cm×深さ25cm（底面高27.10ｍ）　**平面形**：円形　**断面形**：深皿形　**主軸方位**：N-85°-W　**重複関係**：土坑３に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（9・10）・青白磁梅瓶（11）　**特記事項**：土師器皿２点・青白磁梅瓶（11）とも13世紀中葉～後半を示す。直径約１ｍの浅い円形土坑だが、性格はわからない。土坑３と同類か。

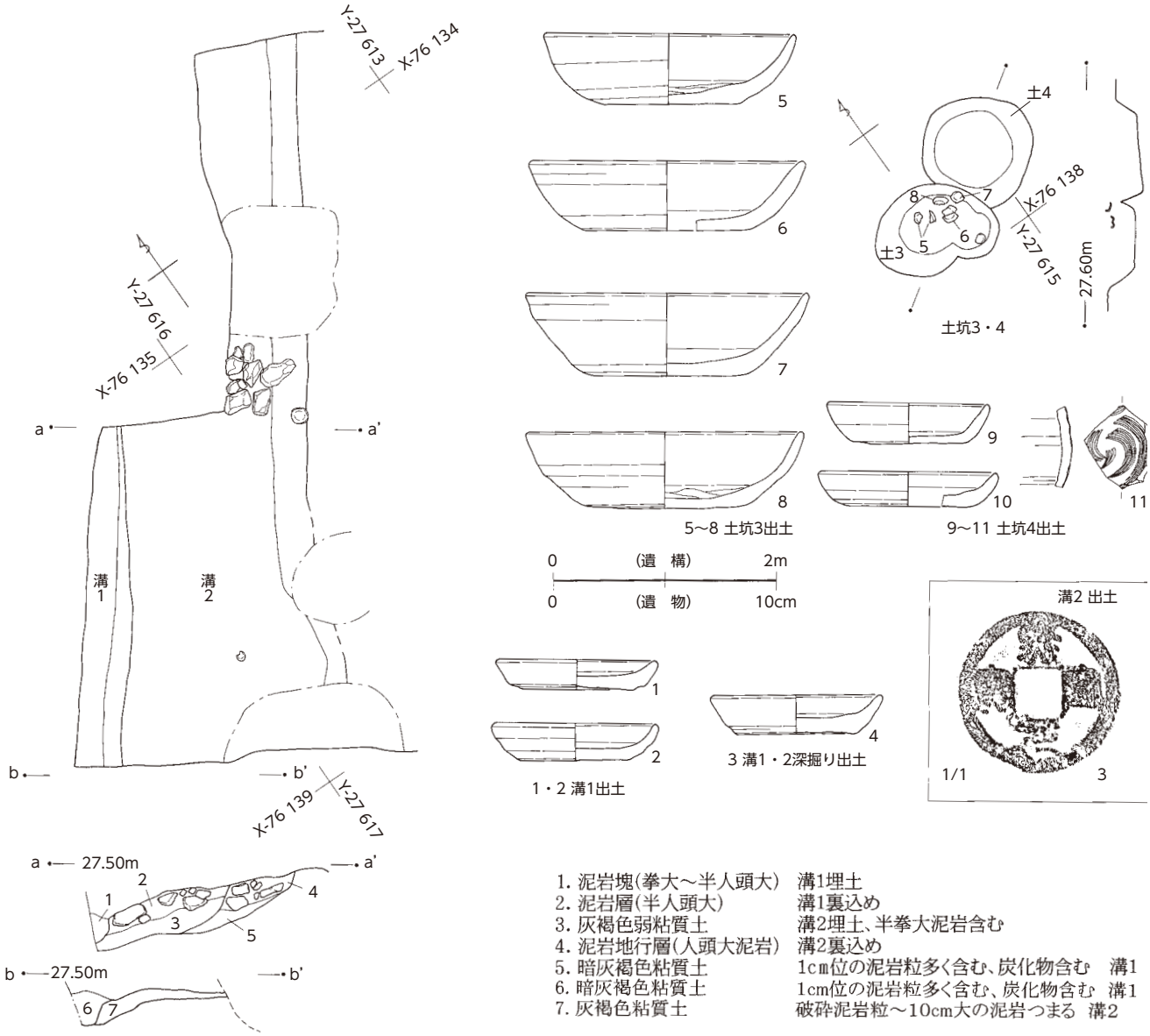


図11　溝１・２・土坑３・４、同出土遺物

土坑６（図12）

位置：Ｘ－76 139.03 ～－76 140.08　Ｙ－27 612.00 ～－27 613.20　**規模**：東西133cm×南北66cm×深さ20cm（底面高27.32ｍ）　**平面形**：楕円形　**断面形**：浅皿形または浅い逆台形　**主軸方位**：N-55°-W　**重複関係**：なし　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（12）　**特記事項**：この面の他の土坑に比べ細長い。単独で存在する。遺物年代は13世紀後半～14世紀前半。

土坑８（図12）

位置：Ｘ－76 134.20 ～－76 135.56　Ｙ－27 613.96 ～（－27 615.43）　**規模**：東西106cm以上×南北120cm×深さ17cm（底面高27.40ｍ）　**平面形**：隅丸方形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N-35°-E　**重複関係**：溝２を切る　**出土遺物**：瀬戸灰釉卸目付き鉢（13）　**特記事項**：土坑９と接する。両者の位置関係は南側の土坑３・４の関係にも似る。側溝に架かる橋脚の可能性を視野に入れておきたい。瀬戸灰釉卸目付き鉢13の年代は藤澤良祐の編年に従えば14世紀後半～15世紀前半（「卸目付大皿」藤澤2008）だが、面全体の様相は鎌倉時代後期～末期を示している。

土坑９（図12）

位置：Ｘ－76 134.22 ～（－76 135.35）　Ｙ－27 613.50 ～（－27 614.01）　**規模**：東西120cm以上

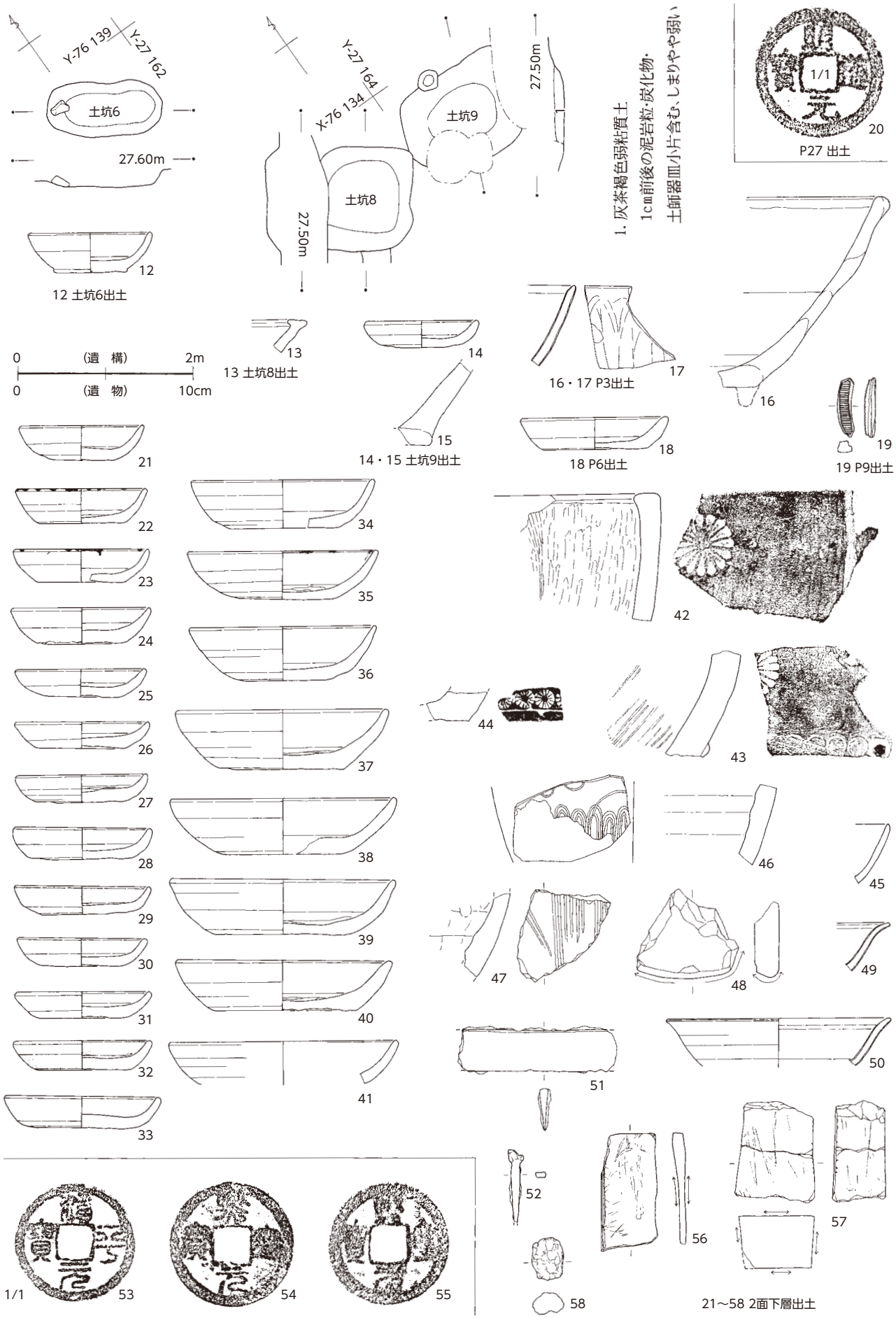


図12　土坑6・8・9、同出土遺物、小穴・Ⅱ面下層面出土遺物

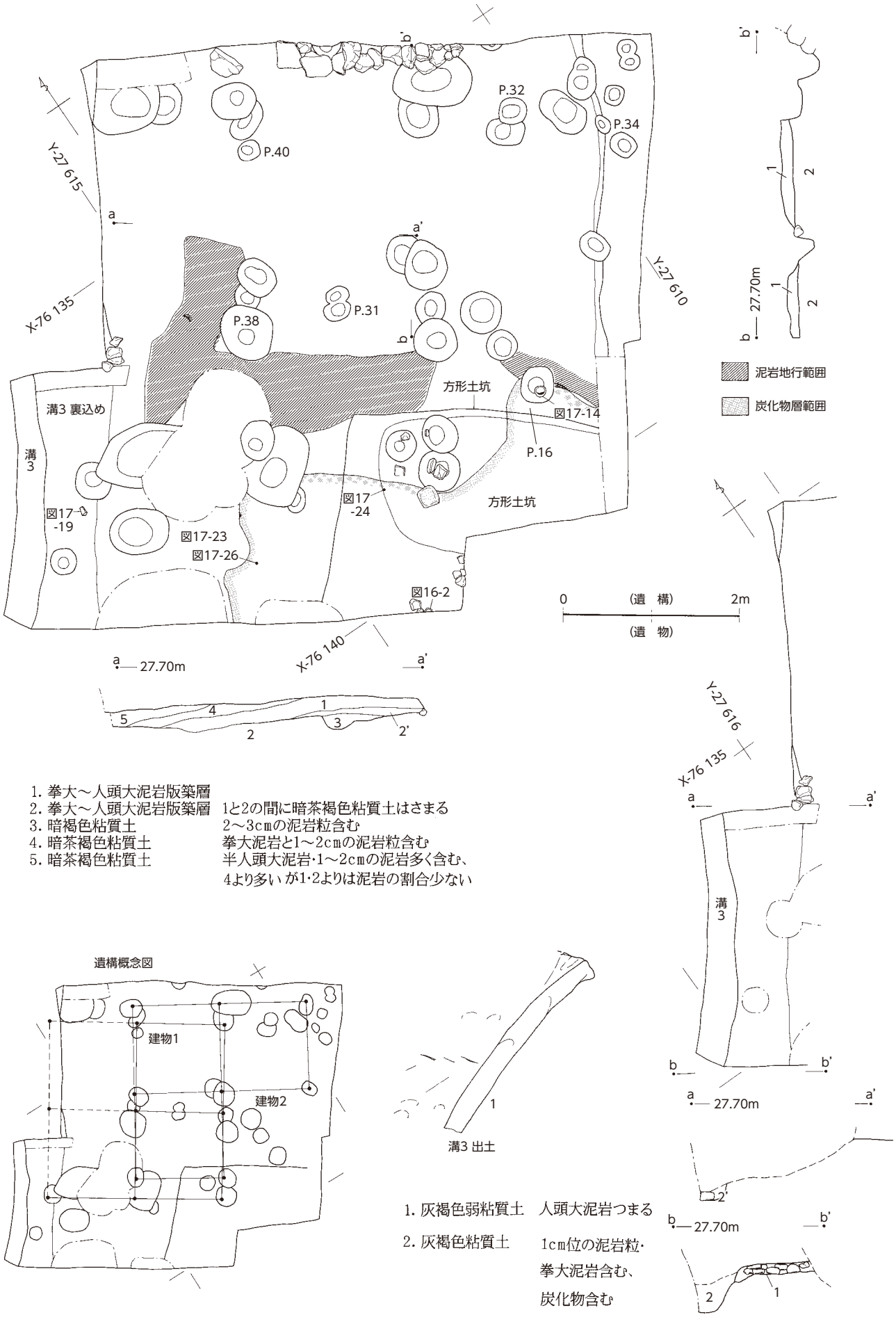


図13　Ⅲ面上層面遺構全図、溝３、同出土遺物

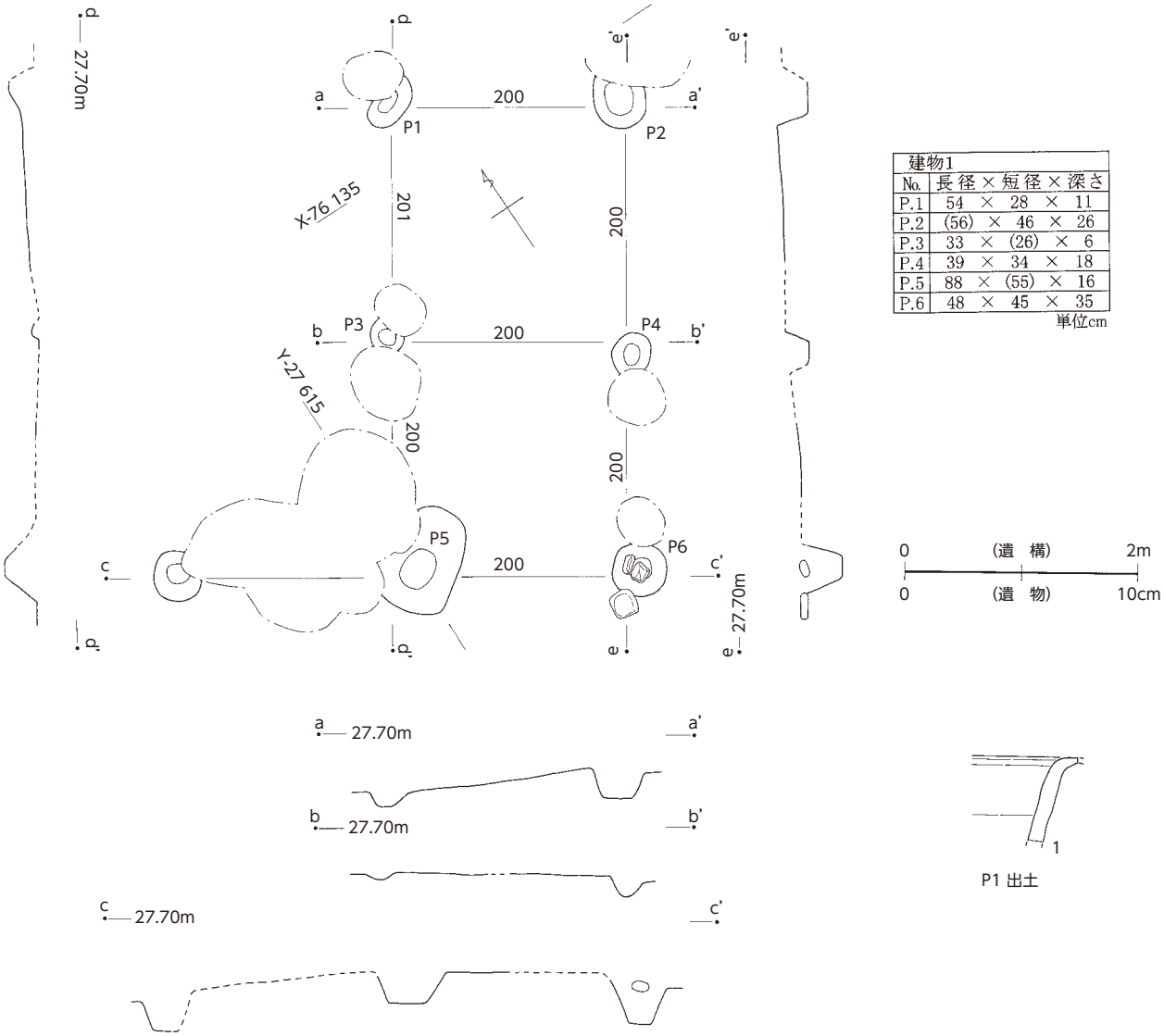


図14　建物１、同出土遺物

×南北112cm×深さ11cm（底面高27.28ｍ）　**平面形**：不明　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N-87.5°-E　**重複関係**：P.23と切り合うが、新旧不明　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（14）・常滑片口鉢Ⅱ類（15）　**特記事項**：14の年代は13世紀後半だろう。

P.３出土遺物（図12）

常滑片口鉢Ⅰ類（16）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（17）　**特記事項**：17は13世紀後半としていいが、16は第３四半期までに属する。遺構の年代は13世紀後半か。

P.６出土遺物（図12）

土師器皿Ｒ種小型（18）　**特記事項**：年代は13世紀中葉～同第３四半期

P.９出土遺物（図12）

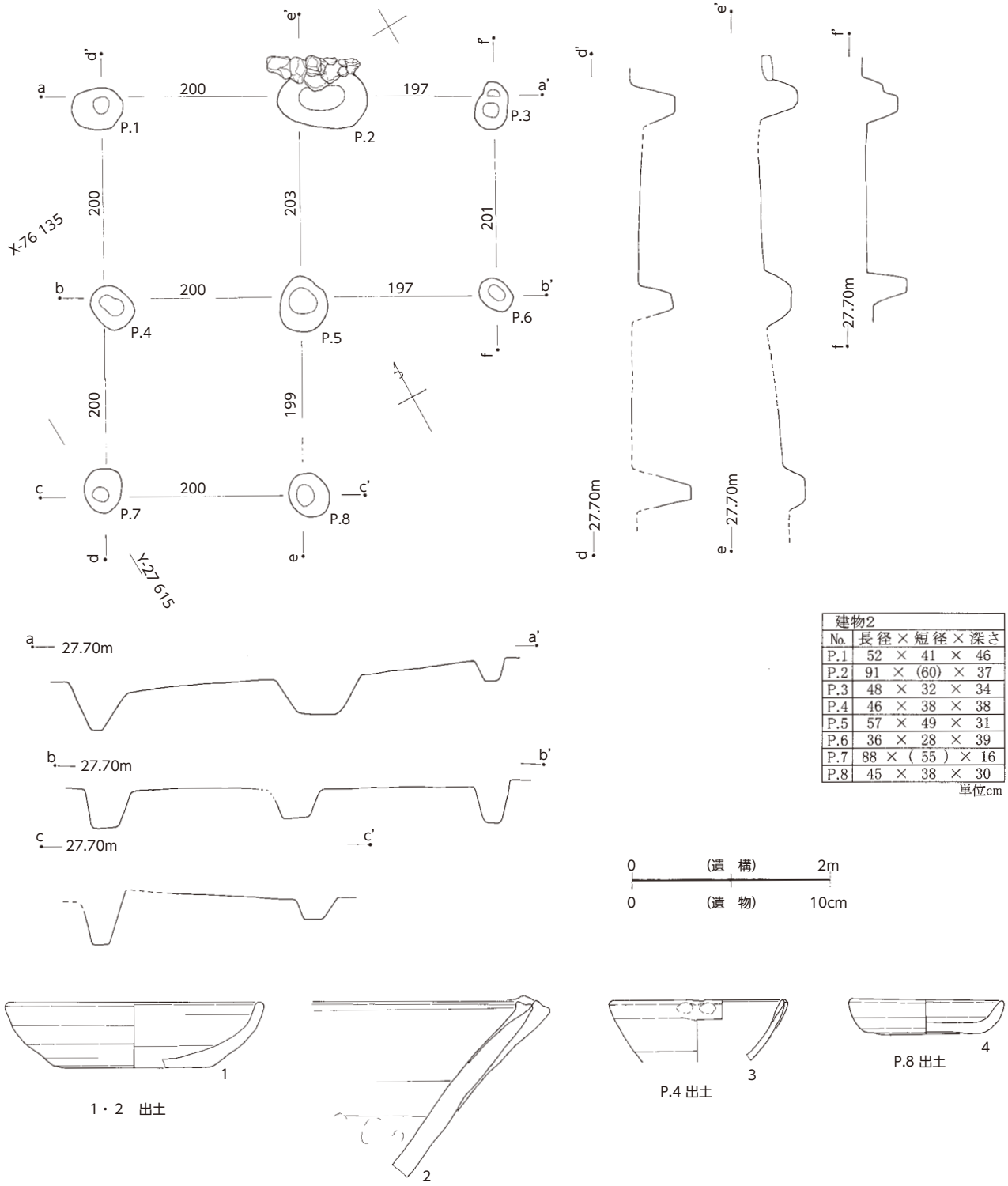
骨製品（19）　**特記事項**：年代・用途とも不明

P.27出土遺物（図12）

明道元寶（20）

Ⅱ面下層面出土遺物（図12）

土師器皿Ｒ種小型（21～33）・同中型（34～36）・同大型（37～41）・瓦器火鉢（42～44）・瀬戸入子（45）・



建物2						
No.	長径	×	短径	×	深さ
P.1	52	×	41	×	46
P.2	91	×	(60)	×	37
P.3	48	×	32	×	34
P.4	46	×	38	×	38
P.5	57	×	49	×	31
P.6	36	×	28	×	39
P.7	88	×	(55)	×	16
P.8	45	×	38	×	30

単位cm

図15　建物２、同出土遺物

瀬戸瓶子（46・47）・摩耗陶片（48）・白磁口はげ皿（49・50）・刀子（51）・鉄釘（52）・治平元寶（53）・熙寧元寶（54・55）・砥石仕上砥（56）・砥石中砥（57）・石英（58）・ガラス（図版14下段右隅）　**特記事項：**46・47の瀬戸瓶子は14世紀初頭に下る可能性があるが、全体的には13世紀後半を示している。

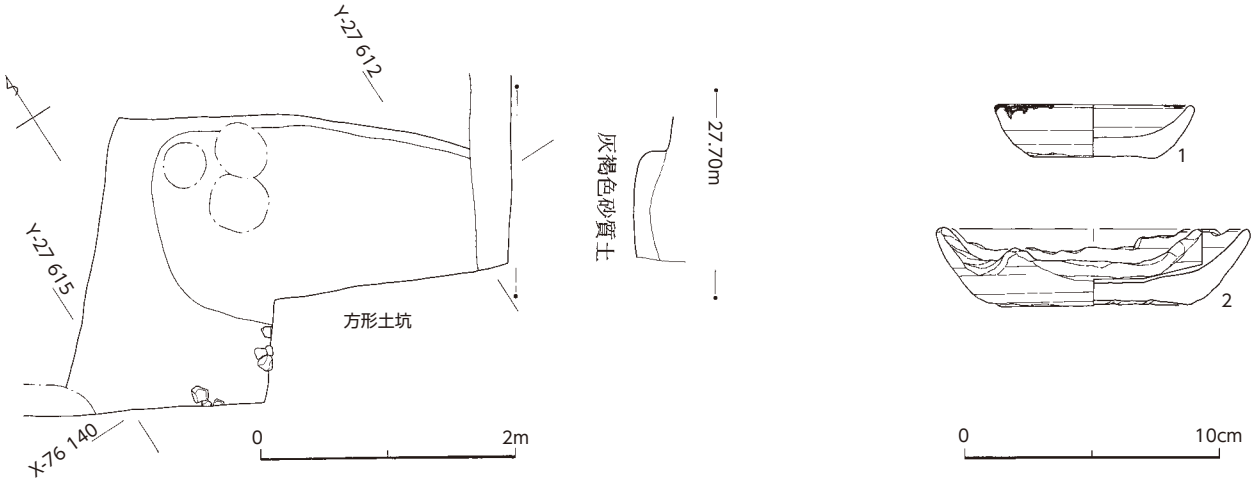


図16　方形土坑、同出土遺物

4．Ⅲ面上層面

溝3（図13）

位置：X（－76 135.40～－76 137.88）Y（－27 616.65～－27 618.46）　**規模**：幅（東西）40㎝以上×深さ53cm（底面高26.60～27.72ｍ）　**断面形**：深皿ないしU字形　**流下方向**：南→北　**南北軸方位**：　**主軸方位**：(N-35°-E)　**重複関係**：上部を溝１・２に切られる　**出土遺物**：常滑片口鉢Ⅱ類（１）　**特記事項**：これも道路側溝であろう。流下方向が谷の傾斜とは逆に北に向かっているが、これは検出距離の短さに起因しているのであろう。年代は13世紀後半か。

建物１（図14）

位置：X（－76 134.38）～（－76 139.26）　Y（－27 610.48）～（－27 615.37）　**規模**：東西１間（柱間距離2.00ｍ）×南北２間（柱間距離2.00ｍ）　**南北軸方位**：N-33°-E　**重複関係**：建物２に切られる　**出土遺物**：P.1瀬戸柄付片口鍋（1）　**特記事項**：建物２と重なる位置にある掘立柱建物。出土遺物の１はいわゆる「行（雪）平鍋」で、藤澤良祐の編年に従えば「古瀬戸中期Ⅰ」もしくは「同Ⅱ」であり、13世紀第４四半期以降に出現するとされる（藤澤2008）。

建物２（図15）

位置：X（－76 133.99～－76 138.91）Y（－27 609.25）～（－27 615.37）　**規模**：東西２間（柱間距離2.00ｍ）×南北２間（柱間距離2.00ｍ）　**南北軸方位**：N-30.5°-E　**重複関係**：建物１を切る　**出土遺物**：P.1土師器皿Ｒ種大型（1）・P.1常滑片口鉢Ⅱ類（2）・P.4瀬戸入子（3）・P.8土師器皿Ｒ種小型（4）　**特記事項**：北壁際のP.2北側には泥岩の敷かれているのがうかがえるので、ここが限界の可能性がある。一方東と南は調査区外に延びるかもしれない。遺物の年代はおおむね13世紀第３四半期前後に収まる

方形土坑（図16）

位置：X（－76 138.18～－76 140.47）Y（－27 611.41～－27 615.35）　**規模**：東西（305㎝）×（南北236㎝）、深さ4㎝　**平面形**：方形　**断面形**：浅皿または浅い箱形　**南北軸方位**：N－36°－E　**重複関係**：南東部炭下層の下で検出、建物１・２に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1）・同大型（2）　**特記事項**：最深4㎝ときわめて浅いが、落ちであるのは間違いない。調査区内の限りで方形に見えるものの、全容は不明。底面の降下角も一様ではない。遺構範囲に重なって炭化物の層があるので、何らかの覆屋の存在は予想されるが、周辺にある柱穴との位置関係からは屋内施設との確証も得られない。

P.16出土遺物（図17）

土師器皿Ｒ種小型（1・2）　**特記事項**：年代は13世紀第３四半期ごろか

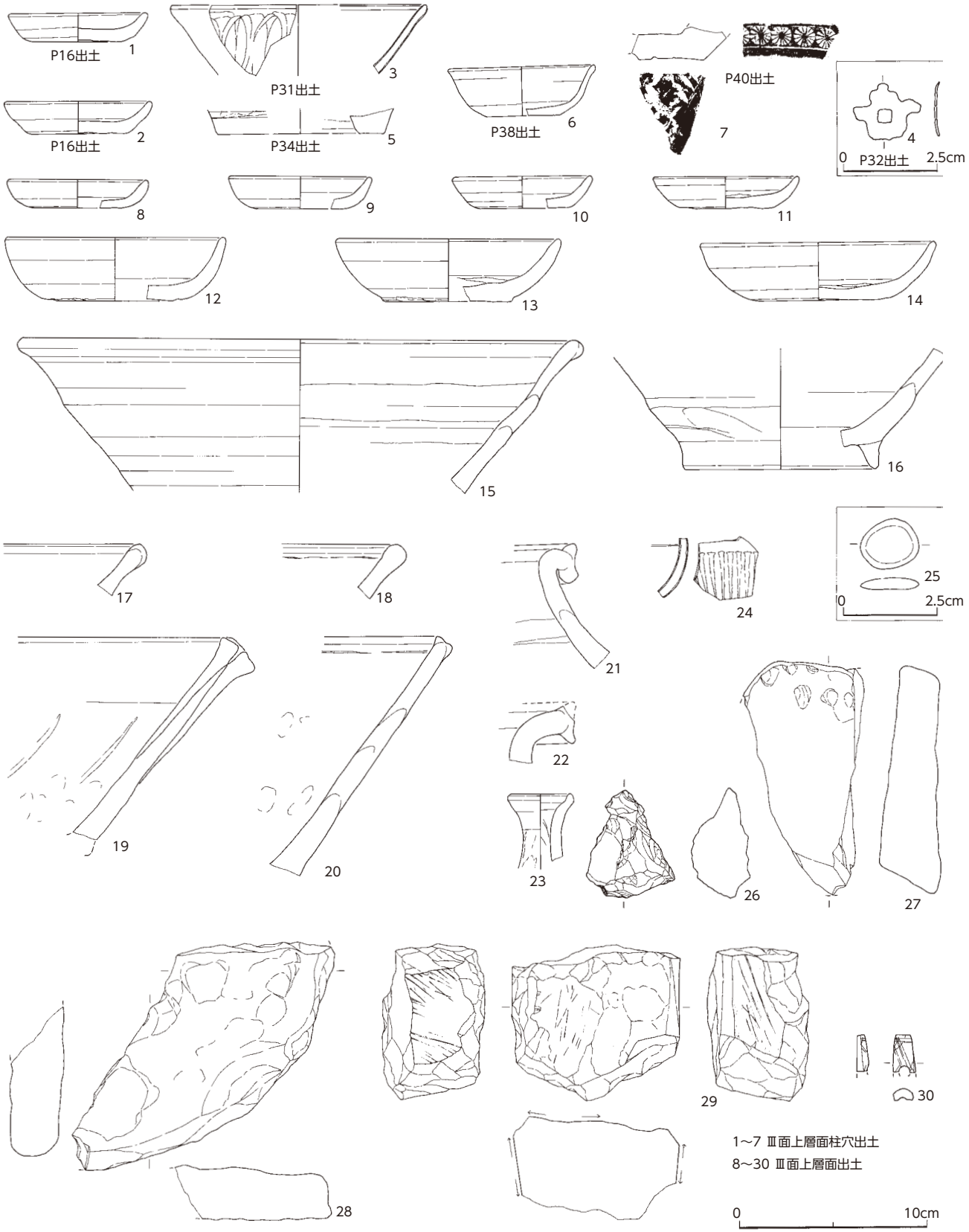


図17　Ⅲ面上層面小穴、Ⅲ面上層面出土遺物

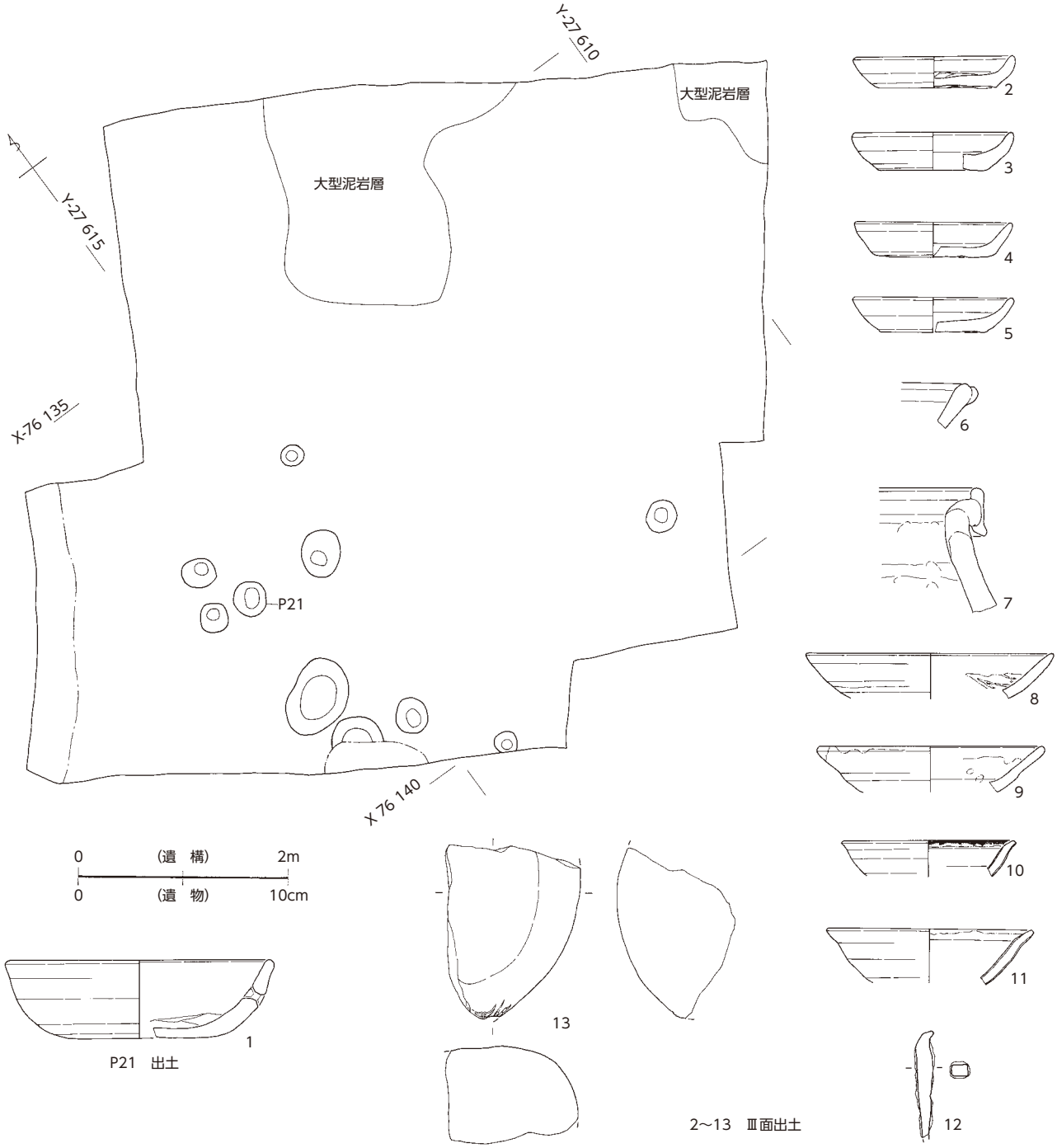


図18 Ⅲ面遺構全図、小穴・Ⅲ面出土遺物

P.31出土遺物（図17）

竜泉窯青磁鎬連弁文碗（3） **特記事項**：年代は13世紀後半

P.32出土遺物（図17）

銅製品（4） **特記事項**：緑青の剥落した部分にわずかに銀鍍金らしき光沢がある。形からいって釘隠しのようなものではなく、例えば荘厳（しょうごん）具の部材などの可能性があろう。

P.34出土遺物（図17）

舶載陶器（5） **特記事項**：左回転ロクロ成形なので舶載品としたが、年代・産地とも不明。上層からの混入の可能性もある

P.38出土遺物（図17）

瀬戸入子（6）　**特記事項**：図15－3よりもひと回り小さい

P.40出土遺物（図17）

瓦器火鉢（7）　**特記事項**：13世紀末以降か

Ⅲ面上層面出土遺物（図17）

土師器皿R種小型（8～11）・同大型（12～14）・常滑片口鉢Ⅰ類（15～18）・同Ⅱ類（19・20）・常滑甕（21・22）・瀬戸仏花瓶（23）・竜泉窯青磁広口小壺（24）・碁石（25）・石英（26）・敲打痕ある石（27）・台石（28）・砥石中砥（29）・骨製品（30）　**特記事項**：全体的な年代は13世紀後半

5．Ⅲ面

南半部に小穴10口が検出されたが、規模は様々で、配置上も建物らしき関連性は見られない。面に覗く「大型泥岩層」は谷堆積土の窪みを充填し、平坦面を造成するためのもの。

P.21出土遺物（図18）

土師器皿R種大型（1）

Ⅲ面出土遺物（図18）

土師器皿R種小型（2～5）・常滑片口鉢Ⅰ類（6）・常滑甕（7）・瀬戸縁釉小皿（8・9）・白磁口はげ皿（10・11）・鉄釘（12）・敲打痕ある泥岩（13）　**特記事項**：全体に13世紀後半を示している中で、8・9は14世紀末～15世紀前半の室町時代前期に属する。苦慮せざるを得ないが、上層との相対関係からこの層が室町時代に下るとは考えられないので、8・9については何らかの理由で上層のものがここで採集されたと理解したい。

（馬淵）

表１　出土遺物観察表（１）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図５－１	調査区 南壁	土師器皿 Ｒ種小型	口径（6.3）cm　底径（4.8）cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　外底面糸切り、 内底面ナデ　胎土は砂粒・白色粒子・砂礫を含みきめがやや粗い　内外表面から胎芯まで灰黒色に炭化
2	調査区 南壁	土師器皿 Ｒ種大型	口径（11.65）cm　底径（8.0）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　外底面糸切り、内底にナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・砂礫を含み、ややきめ粗い　焼成良好
図８－１	土坑７	瀬戸 緑釉小皿	口径（10.4）cm　ロクロ成形　胎土は淡灰褐色、岩石質に焼き上がる　口縁部に濃緑色の灰釉やや厚く漬け掛け、気泡含む　焼成良好
2	土坑７	丸瓦	遺存長6.8）cm　遺存幅（4.2）cm　最大厚（1.8）cm　胎土は灰色、白色粒・砂粒・礫を多く含む粗土　周囲に打ち欠いたような細かい欠損あり
3	土坑７	磨耗陶片	縦7.6cm　横4.2cm　厚さ1.7㎝　常滑甕肩部片　胎土は灰色で岩石質に焼けている　大小長石粒・砂粒含む　破断面のほぼ全体が細かい打突と擦る運動により磨耗　焼成良好
4	土坑７	磨耗陶片	縦7.1cm　横4.1cm　厚さ1.7㎝　常滑甕肩部片を打突の道具に転用　胎土は長石粒・砂粒含み、灰色で岩石質に焼き上がる　破断面のほぼ全体に打突による細かい欠損あり
5	Ｐ．22	瀬戸折縁深皿	口縁部片　ロクロ成形　胎土は黄灰色　釉薬は灰緑色の灰釉　口縁部外側は釉薬が剥落
6	Ｐ．22	常滑 片口鉢Ｉ類	口縁部片　胎土は灰色、砂粒含みややきめ粗く、気孔散見する　表面に砂礫・長石等が噴出している　内側に降灰　焼成良好
7	Ｐ．22	敲打痕ある石	遺存長（4.7）cm　幅4.3cm　厚1.3cm　淡灰色の産地不明頁岩　数か所に打痕あり　自然面に擦過傷多くとどめる
図９－８	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.65）cm　底径（5.8）cm　器高1.55cm　右右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡黄橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　焼成良
9	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種小型	口径7.4cm　底径5.7cm　器高1.85cm　右右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　焼成良
10	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種小型	口径7.5cm　底径4.9cm　器高1.95cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む　焼成良
11	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種小型	口径7.7cm　底径4.9cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む　焼成良
12	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種小型	口径7.7cm　底径4.6cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　焼成良　口縁部に少量の油煤付着
13	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.3）cm　底径（4.8）cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含みやや粉質　焼成良
14	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.3）cm　底径（4.8）cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　焼成良　口縁部は平らに削られ内底面に線状の傷多数あり
15	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種大型	口径（11.8）cm　底径（6.8）cm　器高2.9cm　右右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む　焼成良
16	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種大型	口径（11.95）cm　底径（7.4）cm　器高2.95cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　焼成良
17	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種大型	口径（11.7）cm　底径（8.7）cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・雲母・気孔を含む　焼成良
18	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種大型	口径12.4cm　底径（8.Ｉ）cm　器高3.05cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲を含む　焼成良
19	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種大型	口径（12.3）cm　底径（8.0）cm　器高3.25cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　表面が薄く煤ける
20	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種大型	口径（14.4）cm　底径（8.0）cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　焼成良
21	Ⅱ面上層面	土師器皿 Ｒ種大型	口径（13.7）cm　底径（7.9）cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕、内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨針・少量の雲母を含む　焼成良
22	Ⅱ面上層面	瓦器火鉢	口縁から底部片　器高9.9cm　胎土は灰褐色、砂粒多く含む　器表灰色
23	Ⅱ面上層面	常滑 片口鉢Ｉ類	口縁部片　胎土は明灰色、長石粒を含む
24	Ⅱ面上層面	瀬戸 輪花入子	口径（6.85）cm　底径（3.6）cm　器高2.4cm　ロクロ成形、外底面糸きり　胎土は黄白色外側からヘラで押し込み八弁の輪花粘土貼り付けによる脚（３足）　口唇部内側に自然釉付着　内底部使用により磨滅
25	Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦5.9cm　横3.9cm　厚さ1.1㎝　常滑甕胴部片使用　胎土は灰色、長石粒・石英・砂粒含む　断面の３か所の角が使用により磨耗
26	Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦5.1cm　横3.7cm　厚さ0.9㎝　瓦器火鉢胴部片使用　胎土は淡灰橙色、器表灰黒色　断面のほぼ全体が使用により磨耗
27	Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦3.3cm　横3.3cm　厚さ0.7㎝　瀬戸卸皿口縁～胴部片使用　胎土は黄白色　断面の３辺が使用により磨耗
28	Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦5.1cm　横4.3cm　厚さ1.7㎝　常滑甕胴部片使用　胎土は灰色、長石粒・石英・砂粒多く含む　断面のほぼ全体が使用により磨耗
29	Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦3.4cm　横3.7cm　厚さ0.7㎝　常滑甕胴部片使用　胎土は淡灰褐色　断面の３辺が使用により磨耗
30	Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦14.0cm　横8.4cm　厚さ1.2㎝　常滑甕胴部片使用　胎土は灰色、長石・石英・砂粒含む　断面の２辺の一部が使用により磨耗
31	Ⅱ面上層面	擦石	縦8.2cm　横2.5cm　遺存厚（3.5）㎝　黒っぽい灰青色の粗粒凝灰岩円礫　丸味を帯びた成形で表面は全体に滑らか、両端が特に摩耗が激しい　手に持って使用したか（持ち砥石？）
32	Ⅱ面上層面	滑石印判	縦7.0cm　横4.7cm　厚さ1.5㎝　大型滑石鍋体部上片の内面側を平らに削って判面を作りだす　石材は銀色を帯びた灰色、表面は白っぽい　左右側面に径0.4 ～ 0.6cmの穿孔が２箇所ずつ　梅に鶯紋様　裏・側面面取りを施した丁寧な削り
33	Ⅱ面上層面	砥石　仕上砥	遺存長（7.4）cm　幅3.5cm　厚0.7cm　淡灰緑色　砥面２面　鳴滝産
図11－1	溝1	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.05）cm　底径（5.0）cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む
2	溝1	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.25）cm　底径（5.1）cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、多量の砂粒・赤色粒子・雲母・泥岩粒を含む、砂質土
3	溝2	熙寧元寶	初鋳1068年　北宋　篆書
4	溝１・２ 深掘り内	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.5）cm　底径（5.65）cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含み、やや砂質
5	土坑３	土師器皿 Ｒ種中型	口径11.2cm　底径6.1cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む　焼成良
6	土坑３	土師器皿 Ｒ種大型	口径（12.2）cm　底径（7.8）cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・白色粒子・赤色粒子・雲母・泥岩粒を含む
7	土坑３	土師器皿 Ｒ種大型	口径（12.65）cm　底径7.8cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・白色粒子・赤色粒子・雲母を含み、やや砂質に近い
8	土坑３	土師器皿 Ｒ種大型	口径（12.3）cm　底径7.4cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む

表２　出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
9	土坑4	土師器皿 R種小型	口径7.1cm　底径5.2cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む　砂質土
10	土坑4	土師器皿 R種小型	口径（7.95）cm　底径（6.0）cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨針・雲母を含む
11	土坑4	青白磁 梅瓶	胴部片　素地は灰白色、黒色微粒子含む　釉は水青色、半透明　外面に櫛描き渦状文
図12－12	土坑6	土師器皿 R種小型	口径（6.9）cm　底径4.0cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・雲母を含む　弱砂質土
13	土坑8	瀬戸灰釉 卸目付き鉢	口縁部片　ロクロ成形　　胎土は灰色　灰釉
14	土坑9	土師器皿 R種小型	口径（6.3）cm　底径（4.6）cm　器高1.55cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針を含む
15	土坑9	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片　胎土は赤橙色、石英・長石を含む　内面は使用により摩耗　焼成やや不良
16	P.3	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁～底部片　胎土は灰色、大小の長石粒・石英粒・砂粒を含む　内面中位より下は使用により磨耗　高台は剥離　口縁から底面までの高さは10.9cm　Ⅲ面P20出土の破片が接合している
17	P.3	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部～胴部片　素地は淡灰色　釉は灰緑色、半透明、細かい気泡含む　内外面とも細かい擦過痕無数
18	P.6	土師器皿 R種小型	口径（8.2）cm　底径（6.1）cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む粗土　厚さ不均一で雑な作り
19	P.9	骨製品	長3.4cm　幅0.8cm　厚0.7cm　黄褐色の大型哺乳類の椎骨外縁を円弧状に切り取って作られた骨製品　　裏面の円弧内側に沿って幅3mm、段差3mmほどの段差を作り出し、高位面に幅１mmに満たない溝を横断方向に1mm間隔で端から端まで隙間なく刻む。　両端は三角に尖る　　用途不明
20	P.27	明道元寶	初鋳1032年　北宋　真書
21	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径6.95cm　底径3.7cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む　焼成良
22	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.3cm　底径4.8cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　口唇部に油煤付着　内・外面とも火を受けてざらつく
23	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径（7.5）cm　底径（5.0）cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む弱砂質土　焼成良　口唇部に油煤少量付着
24	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.8cm　底径5.2cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含み、やや粗土　焼成良
25	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.3cm　底径4.4cm　器高1.6cm　右転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む　焼成良
26	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.55cm　底径5.2cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・海綿骨針・礫・泥岩粒を含む粗土　焼成良
27	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.3cm　底径5.5cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は黄橙色、大き目の赤色粒・海綿骨針・砂粒・雲母・泥岩粒を含む
28	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.7cm　底径5.9cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒・海綿骨針・砂粒・雲母を含む　弱砂質土
29	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.65cm　底径5.1cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・雲母・泥岩粒を含む　弱砂質土　内・外面とも炭化
30	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.2cm　底径4.6cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・雲母・赤色粒子を含む　弱砂質土　内・外面とも炭化　焼成良
31	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.6cm　底径5.6cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む　焼成良
32	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径（7.7）cm　底径（5.6）cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は黄灰色、砂粒・雲母・礫を含む　やや粗土　内外面とも黒く炭化
33	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径（8.6）cm　底径6.4cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・雲母・泥岩粒を含む　弱砂質土
34	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種中型	口径（10.25）cm　底径（6.4）cm　器高2.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針を含む
35	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種中型	口径10.8cm　底径5.7cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む　焼成良　口唇部に少量の油煤付着
36	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種中型	口径10.6cm　底径5.4cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む粉質土　焼成良
37	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径11.9cm　底径7.3cm　器高3.45cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む　焼成良
38	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径（12.7）cm　底径（6.7）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む弱砂質の粗土　焼成良
39	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径12.8cm　底径7.6cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む弱砂質の粗土　焼成良
40	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径12.1cm　底径8.2cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む　焼成良
41	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径（13.05）cm　右回転ロクロ　胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む
42	Ⅱ面下層面	瓦器　火鉢	口縁～胴部片　輪花型　輪積み成形　胎土は淡灰色、多量の砂粒・白色粒・礫を含む粗い土　器表は暗灰色を呈す　内外面とも縦方向の磨き　外側に菊花文スタンプ
43	Ⅱ面下層面	瓦器　火鉢	胴部片　輪積み成形　胎土は灰桃色、砂粒・白色粒・赤色粒を含む　内面はヘラまたは木口工具による斜め方向の掻き撫で　外側は黒色処理・研磨が施され、菊花文スタンプとその下に貼り付け連珠文が巡る
44	Ⅱ面下層面	瓦器　火鉢	底部片　　胎土は淡灰桃色、砂粒・白色粒・赤色粒を含む　外側は表面研磨、胴部下位に沈線と小型の菊花押印文を巡らす　外底面に粗い刻み目、脚の接着部分か　図17-11と同一個体か
45	Ⅱ面下層面	瀬戸　入子	口縁部片　ロクロ成形　胎土は明灰色　、肌理細かい
46	Ⅱ面下層面	瀬戸　瓶子	梅瓶型　肩部片　胎土は明灰色　釉は灰緑色～黒色を呈する黒褐色の鉄釉、もしくは濃い灰釉で、松灰を含むため乳灰色～乳青緑色に白濁する。厚く掛るが被熱により剥落している部分あり　　文様は当片上部の竹管断面の押圧による丸文、およびその下の半裁竹管による二重線の上向き蓮弁文でおもに構成される。両者の間には線刻の唐草の一部とみられる曲線がある。
47	Ⅱ面下層面	瀬戸　瓶子	梅瓶型　胴部片　胎土は淡灰褐色　　外面施釉、内面は厚く垂れる　釉薬は黒褐色～緑褐色の鉄釉または濃い灰釉で、釉溜まりで失透　　外面に６条の単位の縦方向の線刻連弁文

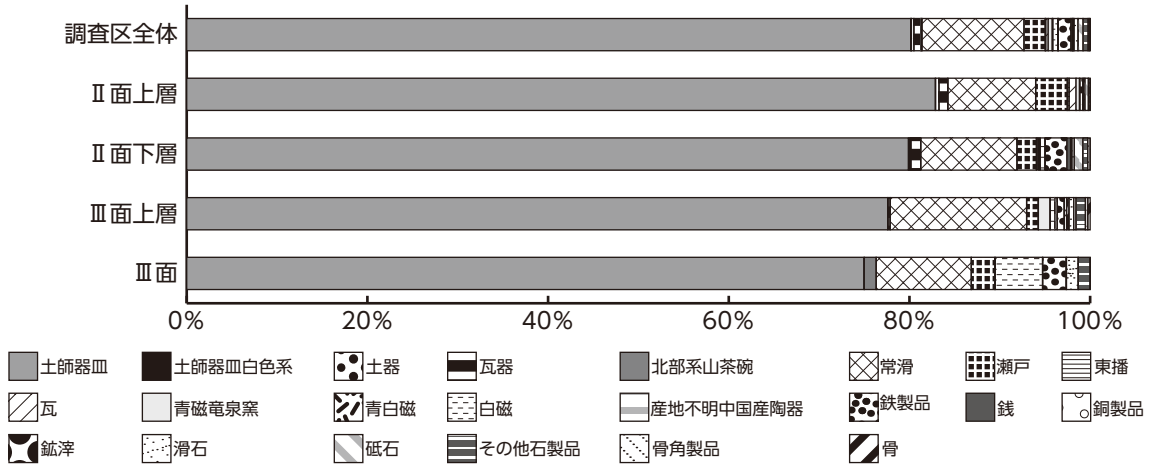
表３　出土遺物観察表（３）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
48	Ⅱ面下層面	磨耗陶片	常滑甕胴部使用　縦5.1cm　横5.8cm　厚み1.4cm　胎土は灰色、長石・石英を含む　断面の一辺が丸みを帯びて滑らかに磨耗
49	Ⅱ面下層面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片　ロクロ成形　　素地は灰白色　釉は淡青灰色
50	Ⅱ面下層面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片　口径（12.7）cm　ロクロ成形　素地は灰白色、黒色微粒子含む　釉は淡灰緑色透明
51	Ⅱ面下層面	刀子	遺存長（9.0）cm　最大幅（2.3）cm　最大厚（0.4）
52	Ⅱ面下層面	鉄釘	長（4.2）cm　幅0.6cm　厚0.8cm　重量2.4ｇ
53	Ⅱ面下層面	治平元寶	初鋳1064年　北宋　篆書
54	Ⅱ面下層面	熙寧元寶	初鋳1068年　北宋　篆書
55	Ⅱ面下層面	熙寧元寶	初鋳1068年　北宋　篆書
56	Ⅱ面下層面	砥石　仕上砥	遺存長（6.7）cm　幅3.2cm　厚0.7cm　乳白色　砥面２面　鳴滝産
57	Ⅱ面下層面	砥石　中砥	遺存長（5.5）cm　幅4.6cm　厚3.1cm　淡灰褐色に淡紅色が混じる　砥面４面　天草産
58	Ⅱ面下層面	石英	縦2.4cm　横1.8cm　厚1.3cm　白色半透明　　片方の小口部分に何度も打ちつけたような微細な敲打痕がある　火打石か
図版14 下段右隅	Ⅱ面下層面	ガラス	長さ3.1㎝　幅2.5㎝　厚8㎜　明水青色で全体に激しく被熱し、大小無数の気泡が噴出している　破断面は層状に剥離　全体形は不明
図13－1	溝3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部片　胎土は暗灰色、長石粒・石英粒を含む　器表は橙灰色に酸化　内面には全体的に降灰　焼成良好
図14－1	建物1-P.1	瀬戸柄付片口鍋 （行平鍋）	口縁部片　ロクロ成形　　胎土は黄灰色　釉は灰緑色透明の灰釉、細かい貫入が入る　断面は火を受け、煤が黒く付着している
図15－1	建物2-P.2	土師器皿 R種大型	口径（12.75）cm　底径（8.0）cm　器高3.35cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む粗土
2	建物2-P.2	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部片　胎土は灰色、長石粒・砂粒を含む　器表は灰褐色　内側に降灰
3	建物2-P.4	瀬戸　入子	口縁～体部片　口径（8.7）cm　ロクロ成形後、ヘラで１カ所片口状に成形　胎土は灰色　、堅緻　肌理細かい　内側に少し降灰
4	建物2-P.8	土師器皿 R種小型	口径7.65cm　底径6.1cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む
図16－1	方形土坑	土師器皿 R種小型	口径（7.35）cm　底径（5.0）cm　器高2.05cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針含み、やや砂質　口縁部に油煤付着
2	方形土坑	土師器皿 R種大型	口径12.5cm　底径7.8cm　器高3.05cm　　口縁部二ヶ所を大きく割り取り、反対側を細かく打ち欠く　　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む弱砂質土
図17－1	P.16	土師器皿 R種小型	口径7.3cm　底径4.8cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む砂質土
2	P.16	土師器皿 R種小型	口径（7.65）cm　底径（5.25）cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む砂質土
3	P.31	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部～胴部片　口径（13.7）cm　素地は淡灰色　釉は灰緑色、半透明、気泡含む
4	P.32	銅製品	飾り金具または仏壇荘厳具の一部か？　緑青の剥落した部分に銀鍍金らしき銀色の光沢が見える　　縦1.5cm　横1.8cm　厚0.9mm
5	P.34	舶載陶器	壺か？　高台部片　底径（8.9）cm　左回転ロクロ成形　高台削り出し　胎土は灰色、堅緻で岩石質に焼ける　　高台内上半部に鉄漿（汁）のようなものを刷毛塗り、同外面上部にもきわめて薄い鉄漿塗布の痕跡、また高台畳付は淡赤褐色に酸化　　灰釉らしき釉薬の一部が見える　　産地不明
6	P.38	瀬戸　入子	口径（7.8）cm　底径（4.0）cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部摩耗　胎土は灰色、堅緻
7	P.40	瓦器　火鉢	底部片　　胎土は淡灰桃色、砂粒・白色粒・赤色粒を含む　外側は表面研磨、胴部下位に沈潜と小型の菊花押印文を巡らす　外底面に粗い刻み目、脚の接着部分か　図12-44と同一個体か
8	Ⅲ面上層面	土師器皿 R種小型	口径（7.35）cm　底径（5.3）cm　器高1.55cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む
9	Ⅲ面上層面	土師器皿 R種小型	口径（7.3）cm　底径（4.8）cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む
10	Ⅲ面上層面	土師器皿 R種小型	口径（7.5）cm　底径（5.3）cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む　やや粗土　焼成良
11	Ⅲ面上層面	土師器皿 R種小型	口径7.65cm　底径5.25cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒含む　やや粗土
12	Ⅲ面上層面	土師器皿 R種大型	口径（11.6）cm　底径（7.4）cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡黄橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む
13	Ⅲ面上層面	土師器皿 R種大型	口径（11.8）cm　底径（6.8）cm　器高3.35cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む　焼成良
14	Ⅲ面上層面	土師器皿 R種大型	口径12.45cm　底径7，6cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む　焼成良
15	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁～胴部片　口径（30.0）cm　輪積み成形　胎土は灰色、砂粒・長石・石英・礫を含む　内面の下位は使用により摩耗
16	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部～胴部下位片　底径（10.2）cm　輪積み成形、高台貼り付け　胎土は灰色、砂粒・長石・石英を含む　内面の下位は使用により摩耗
17	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、長石・石英を含む
18	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、砂粒・白色粒を含む
19	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部下位片　輪積み成形　胎土は橙褐色、長石・石英・礫・砂粒を含む　内面下位は使用により磨滅
20	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部下位片　輪積み成形　胎土は橙褐色、長石・石英・砂粒を多く含む　器表は赤橙色　内面下位は使用により磨滅
21	Ⅲ面上層面	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰橙色、　器表は灰色
22	Ⅲ面上層面	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、砂粒・礫を含む　器表は茶色
23	Ⅲ面上層面	瀬戸　仏花瓶	胴部片　口径3.1cm　　胎土は灰色で堅緻　　淡緑灰色の灰釉
24	Ⅲ面上層面	竜泉窯青磁 広口小壺	胴部片　素地は灰白色　釉は灰青色半透明の太宰府分類の「Ⅲ類」　外側に細描きの蓮弁文　破片の上端部に上下の継ぎ目が見える
25	Ⅲ面上層面	碁石	黒　　縦1.6cm　横1.4cm　厚0.3cm　黒色の硬質細粒凝灰岩か

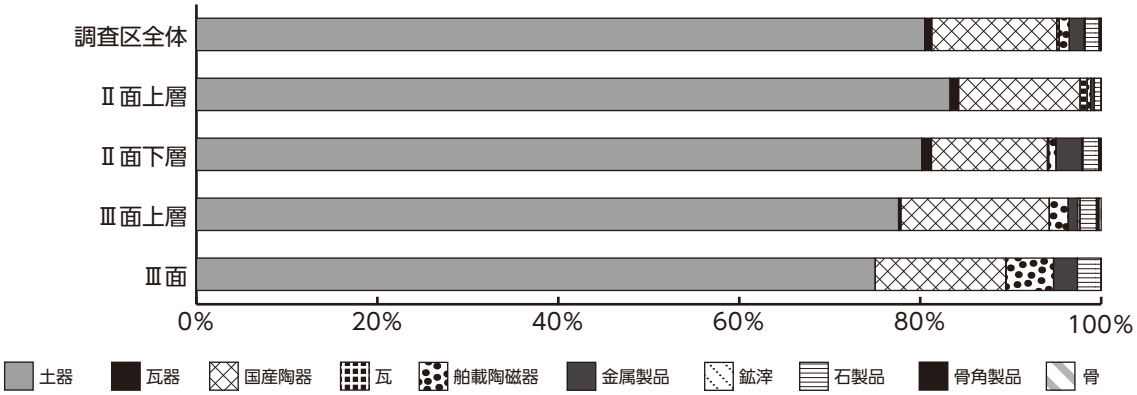
表４　出土遺物観察表（４）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
26	Ⅲ面上層面	石英	縦5.8cm　横4.7cm　厚3.1cm　白色半透明に紅褐色の斑が入る　　火打石か
27	Ⅲ面上層面	敲打痕ある石	ホルンフェルス　長さ12.6cm　遺存幅（6.5）cm　最大厚3.3cm　暗茶褐色～黒褐色　　側面の一部に細かい敲打痕、表裏にも被熱と敲打による剥離数カ所あり
28	Ⅲ面上層面	台石	祖粒凝灰岩　　長（18.0）cm　幅（8.7）cm　最大厚3.2cm　灰色～灰褐色　表面に被熱と敲打による剥離数カ所あり　礎石を転用したか
29	Ⅲ面上層面	砥石　中砥	遺存長（8.2）cm　幅9.0cm　遺存厚（5.5）cm　黄灰褐色と淡紅色が層をなす　砥面４面　天草産
30	Ⅲ面上層面	骨製品	牛骨か　遺存長（2.0）cm　幅1.25cm　厚0.6cm　両端の窄まった円筒を半裁し、中央に径6mmの円孔をあける　　円孔部分で折損　外面には小口部直下に平行した２本線を横断方向に刻み、全体に斜格子の線刻　　被熱により白く変色　　用途不明だが化粧具・装身具・文具などの紐留めや装飾部材の一種か
図18－1	P.21	土師器皿 R種大型	口径（12.5）cm　底径（8.3）cm　器高3.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・海綿骨針・赤色粒子を含む　胴部中位に径0.8 ～ 0.4cmの小孔一か所貫通
2	Ⅲ面	土師器皿 R種小型	口径7.5cm　底径5.7cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
3	Ⅲ面	土師器皿 R種小型	口径（7.5）cm　底径（5.5）cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子を含む
4	Ⅲ面	土師器皿 R種小型	口径（7.3）cm　底径（5.45）cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・泥岩粒を含む　焼成良好
5	Ⅲ面	土師器皿 R種小型	口径（7.5）cm　底径（5.1）cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨針・赤色粒子・雲母を含む　焼成良好
6	Ⅲ面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、白色粒子・黒色粒子含む
7	Ⅲ面	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、6mm前後の丸い黄白色ブロックを含む　器表は灰褐色
8	Ⅲ面	瀬戸 緑釉小皿	口径（11.8）cm　ロクロ成形　胎土は黄灰色、 口縁部内外に灰緑色の灰釉をかける
9	Ⅲ面	瀬戸 緑釉小皿	口径（10.7）cm　ロクロ成形　胎土は淡灰褐色、 口縁部内外に暗緑灰色の灰釉をかける
10	Ⅲ面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片　口径（8.2）cm　ロクロ成形　素地は灰白色、黒色微粒子含む　釉は淡灰緑色半透明　緑縁部内側に油煤付着
11	Ⅲ面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片　口径（9.75）cm　ロクロ成形　素地は灰白色、黒色微粒子含む　釉は淡灰緑色半透明
12	Ⅲ面	鉄釘	長（5.0）cm　幅0.9cm　厚0.6cm　重量6.2 g
13	Ⅲ面	敲打痕ある 泥岩	残存長（8.3）cm　遺存幅（6.5）cm　遺存厚（5.7）cm　泥岩円礫が割れた後尖端を打突ないし加圧（何かを押し潰すため）に使用　使用痕は刻み目状になる　　全体に被熱

表5　出土遺物計量表



	Ⅱ面上層		Ⅱ面下層		Ⅲ面上層		Ⅲ面		調査区全体	
土師器皿Ｒ種	426	82.88%	592	79.89%	298	77.60%	57	75.00%	1434	80.16%
土師器皿白色系	0	0.00%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
土器	2	0.39%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.28%
瓦器	5	0.97%	8	1.08%	1	0.26%	0	0.00%	14	0.78%
北部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.32%	2	0.11%
常滑	50	9.73%	79	10.66%	58	15.10%	8	10.53%	202	11.29%
瀬戸	18	3.50%	16	2.16%	5	1.30%	2	2.63%	42	2.35%
東播	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
瓦	4	0.78%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.28%
青磁竜泉窯	2	0.39%	1	0.13%	5	1.30%	0	0.00%	8	0.45%
青白磁	0	0.00%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
白磁	0	0.00%	4	0.54%	2	0.52%	4	5.26%	10	0.56%
産地不明中国産陶器	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
鉄製品	2	0.39%	18	2.43%	3	0.78%	2	2.63%	25	1.40%
銭	0	0.00%	3	0.40%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.17%
銅製品	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
鉱滓	0	0.00%	1	0.13%	1	0.26%	0	0.00%	2	0.11%
滑石	1	0.19%	2	0.27%	2	0.52%	1	1.32%	8	0.45%
砥石	2	0.39%	7	0.94%	1	0.26%	0	0.00%	10	0.56%
その他石製品	1	0.19%	4	0.54%	4	1.04%	1	1.32%	10	0.56%
骨角製品	0	0.00%	2	0.27%	1	0.26%	0	0.00%	3	0.17%
骨	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
総計	514	100%	741	100%	384	100%	76	100%	1789	100%



	Ⅱ面上層		Ⅱ面下層		Ⅲ面上層		Ⅲ面		調査区全体	
土器	428	83.27%	594	80.16%	298	77.60%	57	75.00%	1440	80.49%
瓦器	5	0.97%	8	1.08%	1	0.26%	0	0.00%	14	0.78%
国産陶器	69	13.42%	95	12.82%	63	16.41%	11	14.47%	247	13.81%
瓦	4	0.78%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.28%
舶載陶磁器	2	0.39%	6	0.81%	8	2.08%	4	5.26%	20	1.12%
金属製品	2	0.39%	21	2.83%	4	1.04%	2	2.63%	29	1.62%
鉱滓	0	0.00%	1	0.13%	1	0.26%	0	0.00%	2	0.11%
石製品	4	0.78%	13	1.75%	7	1.82%	2	2.63%	28	1.57%
骨角製品	0	0.00%	2	0.27%	1	0.26%	0	0.00%	3	0.17%
骨	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
総計	514	100%	741	100%	384	100%	76	100%	1789	100%

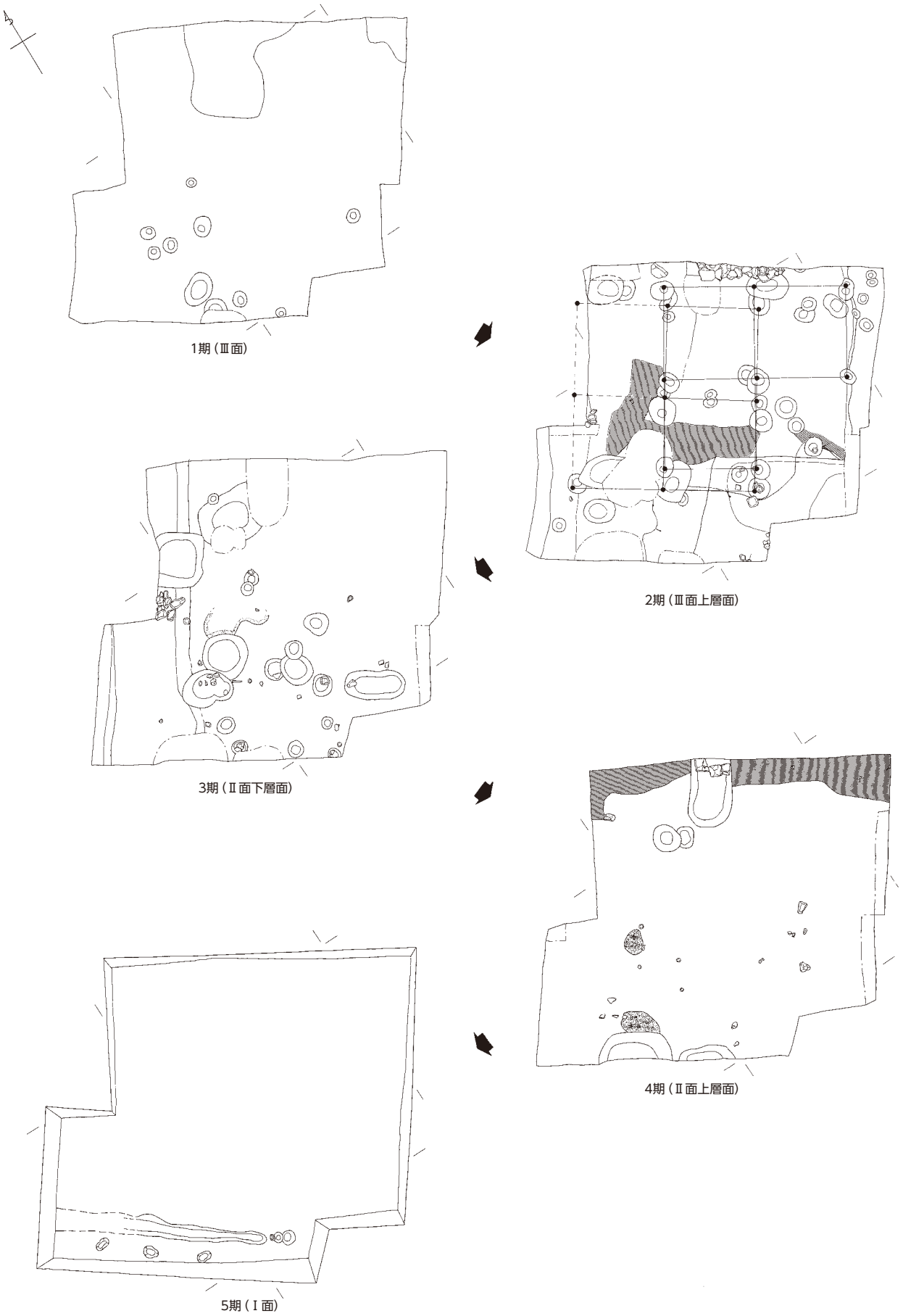


図19　遺構変遷図

第四章　まとめと考察

１．遺構の変遷と年代

1期

最終面であるⅢ面が相当する。面の年代は13世紀後半。検出遺構は小穴10穴のみで、関連性もみられない。Ⅲ面を構成する地行は15層の直上にあたり、調査区北側では15層と思われる大型泥岩層が露頭している。また、上層のⅢ面上層との年代差もみられない。これらのことから、まず15層でおおまかに谷を地行し、Ⅲ面は、その上をならすための最初の地行という可能性も考えられる。いずれにしろ、本調査区内においては1期に盛んに土地利用された形跡はみられない。

2期

Ⅲ面上層が相当する。年代は13世紀後半～ 14世紀初頭。現在の道路とほぼ平行する角度で、調査区の西端から溝３が検出されている。この溝３がN-35°-E、建物１がN-33°-E、建物２がN-30.5°-Eと建物２棟も現在の道路と溝３にほぼ平行する配置となっている。調査区が狭いため建物の正確な規模は把握できないが、13世紀後半以降、地割の方向軸は踏襲されている可能性がある。また、本期に急速に遺構が広がるが、これは13世紀後半以降の極楽寺の伽藍整備の影響が考えられる。

3期

Ⅱ面下層面が相当する。出土遺物の年代は13世紀後半～ 14世紀前半を中心とする。2期と同様に現在の道路と接する調査区西端から、道路にほぼ平行する角度で、溝１と溝２が検出されている。建物は検出されないかわりに土坑の数が2期と比べ増えている。2期とは本調査区内の土地利用に変化が生じたといえよう。

4期

Ⅱ面上層面が相当する。出土遺物には14世紀末～ 15世紀前半のものが含まれる。下層との関わりで考えるなら14世紀前半以降、面の更新がなされなかった可能性が考えられる。出土遺物は相対的に多いが、3期までとは大きく異なり、溝は検出されず、遺構も非常に少ない。本調査区周辺での土地利用が大きく変わった可能性が考えられる。

5期

Ⅰ面が相当する。出土遺物はほとんどなく面の正確な年代は不明。しかし層位的に見て、近世もしくはそれ以降の可能性も考えたい。

２．まとめ

本調査区内に関しては、ほぼ2期と3期、すなわち13世紀後半～ 14世紀前半に土地利用が集約されると言ってよかろう。忍性の入寺以降、伽藍が整備され鎌倉幕府滅亡以後衰微していく極楽寺の動向と軌を一にする可能性も考えられよう。また、検出された溝は道路とほぼ主軸方位を同じにしており、本調査区周辺では13世紀後半以降それが踏襲されている可能性がある。もっともこれは地形的な制約によるとも考えられる。

火災層が検出されたわけでもなく、第一章で触れた法花寺が本調査地点周辺にあったと確定したわけでもないが、2期と3期の土地利用の変化に関しては、1303年～ 1308年の間に起こったとされる、法花寺まで類焼した火災（細川1989）が契機である可能性も考えられよう。

（沖元）

引用・参考文献（本報全体に共通）

赤星直忠　1941「考古学上から見た鎌倉」『鎌倉』(単刊) 鎌倉市壮年団
赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館
上横手雅敬　1992「鎌倉大仏の造立」『龍谷史壇』九九・一〇〇
小野塚充巨　1984「中世鎌倉極楽寺をめぐって」『荘園制と中世社会』東京堂出版
木村美代治・佐藤仁彦　1995『甘縄神社遺跡群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
大河内勉ほか　1997『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書』
大河内勉　1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』
鎌倉市教育センター　2009『かまくら子ども風土記』鎌倉市教育委員会
川副武胤・貫達人　1959『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
木下良ほか　1997『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会
齋木秀雄　1998『極楽寺旧境内遺跡－江ノ島電鉄株式会社極楽寺地区改良計画に伴う発掘調査報告－』
齋木秀雄ほか　1992『長谷小路南遺跡』
2007『大倉幕府周辺遺跡群発掘調査報告書－雪ノ下４丁目581番５地点－』
鈴木庸一郎ほか　2001『「古都鎌倉」を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・(財)かながわ考古学財団
須藤求馬　1896「鎌倉発見埴輪図説」『東京人類學會雑誌』第一二巻第一二七号
瀬田哲夫　1994「長谷観音堂周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告10』鎌倉市教育委員会
田代郁夫ほか　1995「平成５年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』
田代郁夫ほか　1996「平成６年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」『中世石窟遺構の調査』
継実ほか　2002「二ノ谷横穴群」『鎌倉の横穴墓』
坪井小五郎　1909「鎌倉にて発見されたる埴輪について」『鎌倉文明史論』三省堂書店
原輝彦　1951「一ノ谷横穴古墳発掘報告」『考古学雑誌』第37巻第４号
原廣志　2006　「極楽寺地区出土の瓦とその変遷」『中世都市鎌倉と極楽寺　予稿集』
藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
細川涼一　1989『女の中世』日本エディタースクール出版部
馬淵和雄　1994「武士の都　鎌倉」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
1998「大倉幕府周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告14』鎌倉市教育委員会
1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
1999『大倉幕府周辺遺跡群－雪ノ下四丁目620番５地点－』
2004「中世都市鎌倉前史」『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院
三上次男　1948「鎌倉市稲村ガ崎横穴古墳群について」『科学世界第23巻第１号』
八木奨三郎　1897「鎌倉采女塚の遺物」『考古學會雑誌』第壱編第拾號
山崎信二　2000『中世瓦の研究』雄山閣

１－１．東南山麓から調査区をのぞむ

１－２．調査地点近景

図版２

２－１．Ⅰ区Ⅰ面全景

２－２．Ⅱ区Ⅱ面上層面全景（東から）

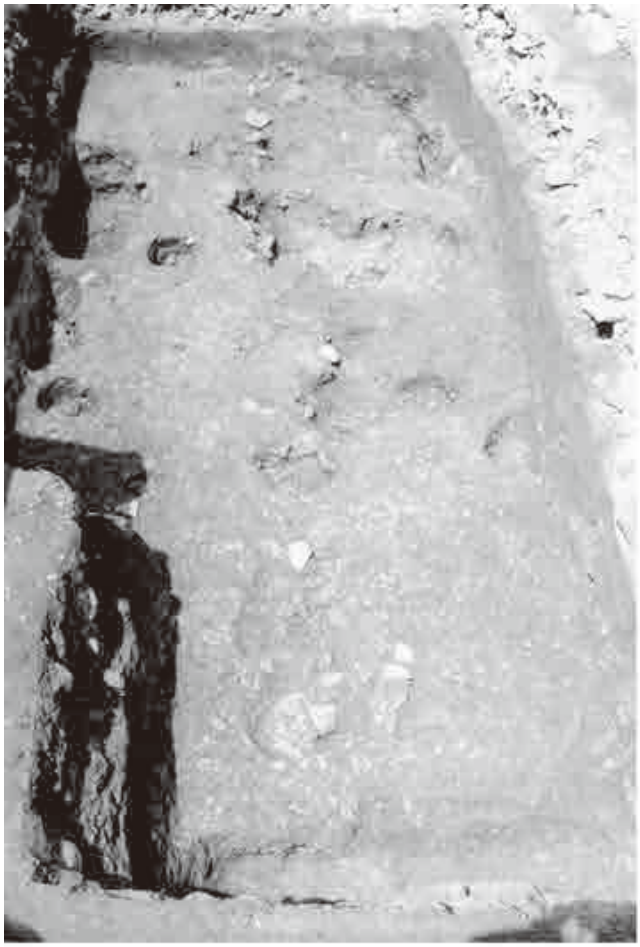
２－３．Ⅱ区Ⅱ面上層面全景（南から）

３－１．土坑２（北から）

３－２．砥石・滑石印判出土状況（西から）

３－３．Ⅱ区Ⅱ面下層面全景（北から）

図版４

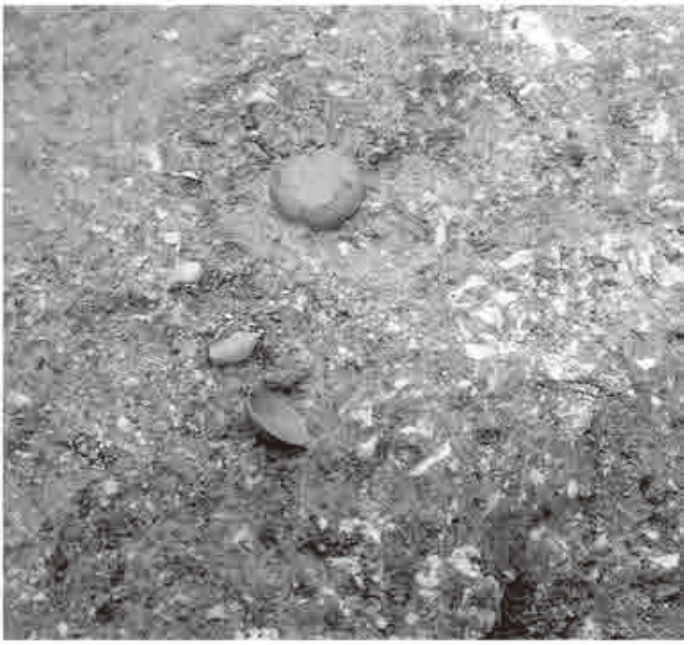


４－１．Ⅰ区Ⅱ面下層面全景（東から）

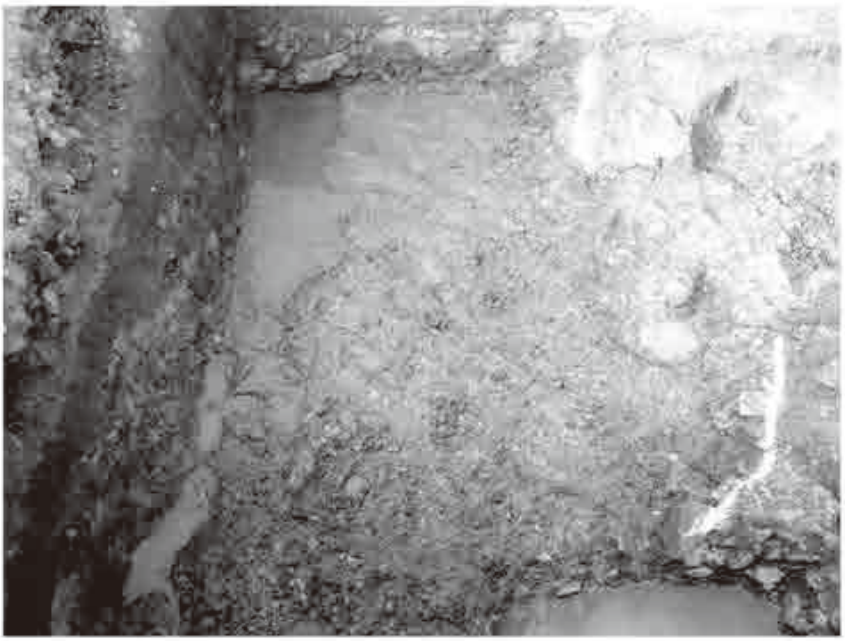
４－２．Ⅱ区Ⅱ面下層面全景（東から）

４－３．Ⅱ区Ⅱ面下層面全景（南から）

５－１．溝１（南から）

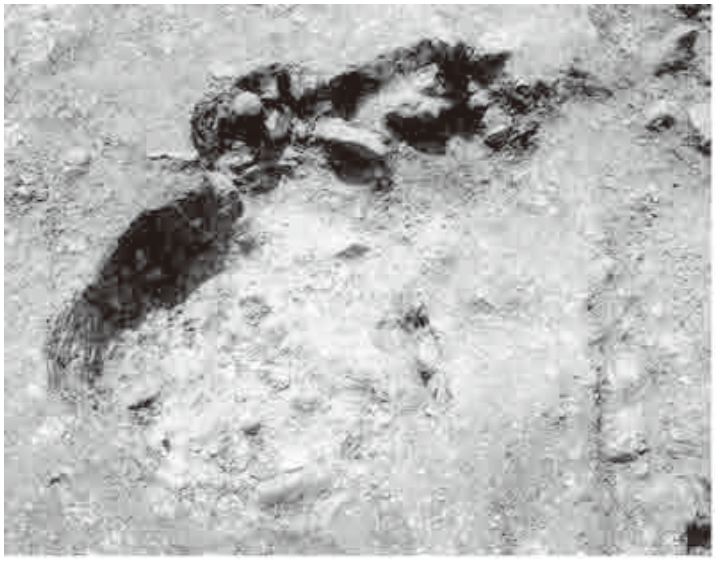


５－３．土師器皿出土状況（南から）



５－２．溝２（南から）

図版６



６－１．土坑３・４（北から）

６－２．Ⅰ区Ⅲ面上層面全景（東から）

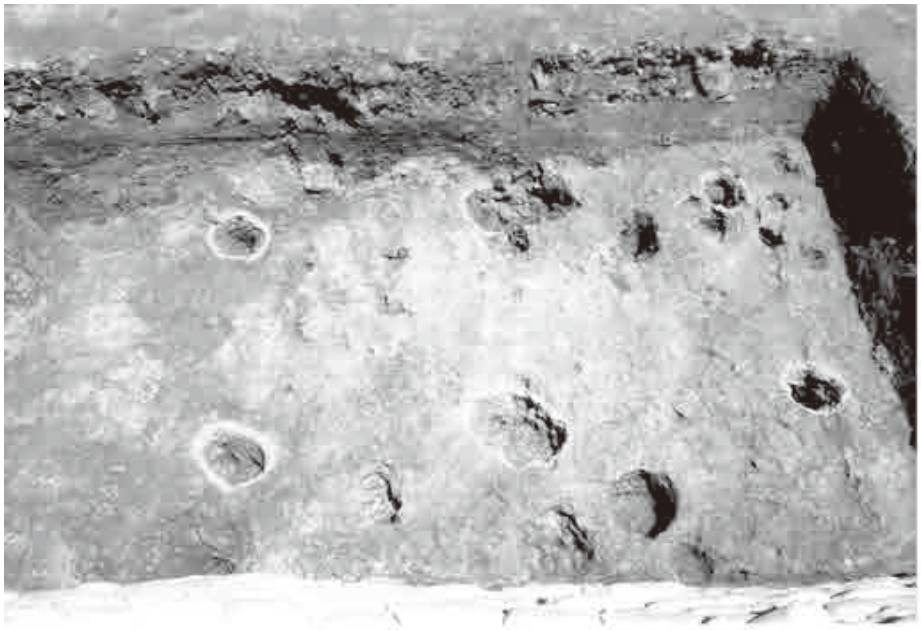
６－３．Ⅰ区Ⅲ面上層面全景（北から）

７－１．方形土坑（北から）

７－２．溝３（北から）

７－３．Ⅱ区Ⅲ面上層面全景（東から）

図版８



８－１．Ⅱ区Ⅲ面上層面（南から）

８－２．Ⅰ区南壁土層断面

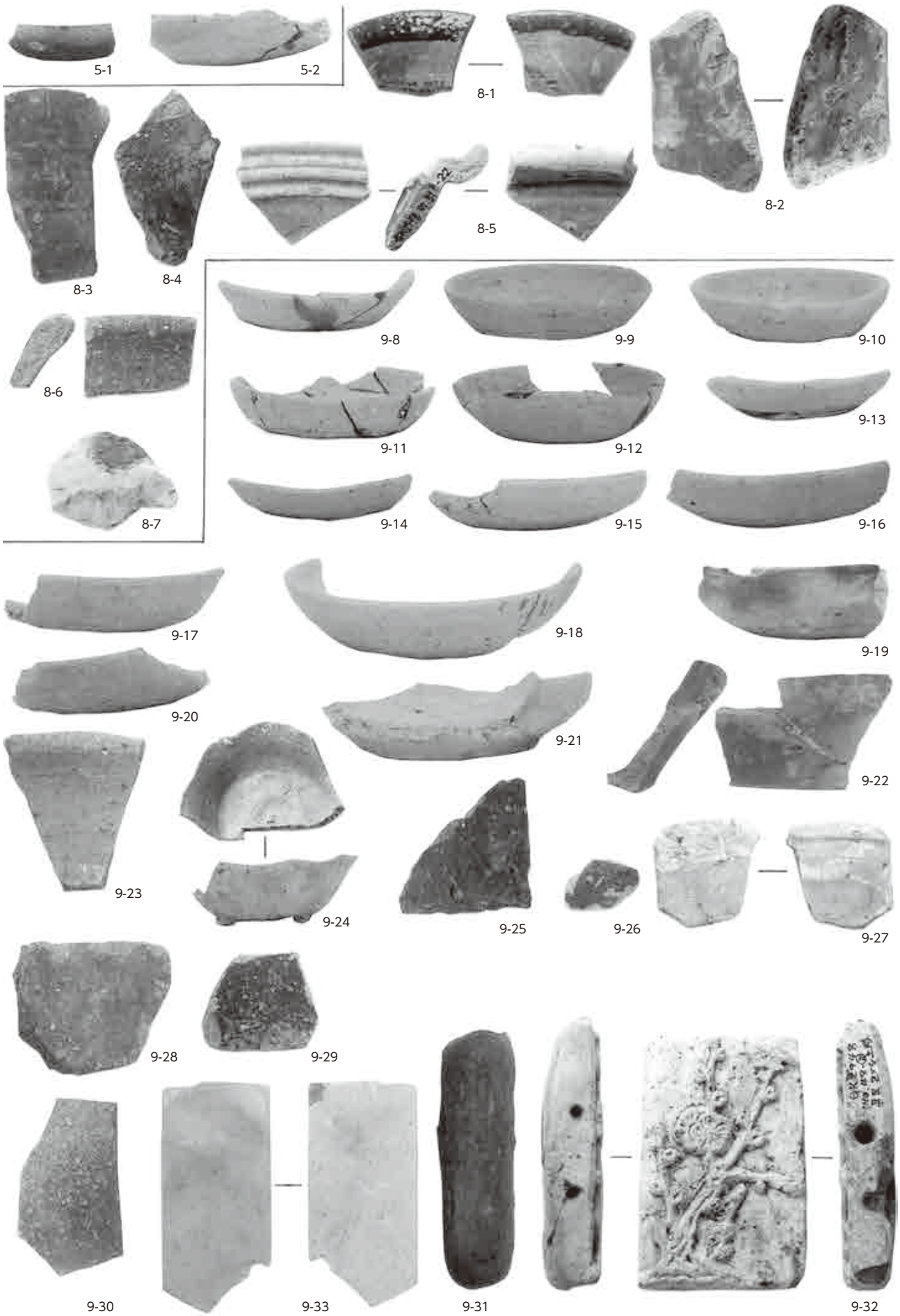
８－３．Ⅰ区東壁土層断面

９－１．Ⅰ区北壁土層断面

９－２．Ⅰ区深掘り（南から）

９－３．Ⅱ区東壁土層断面

図版10

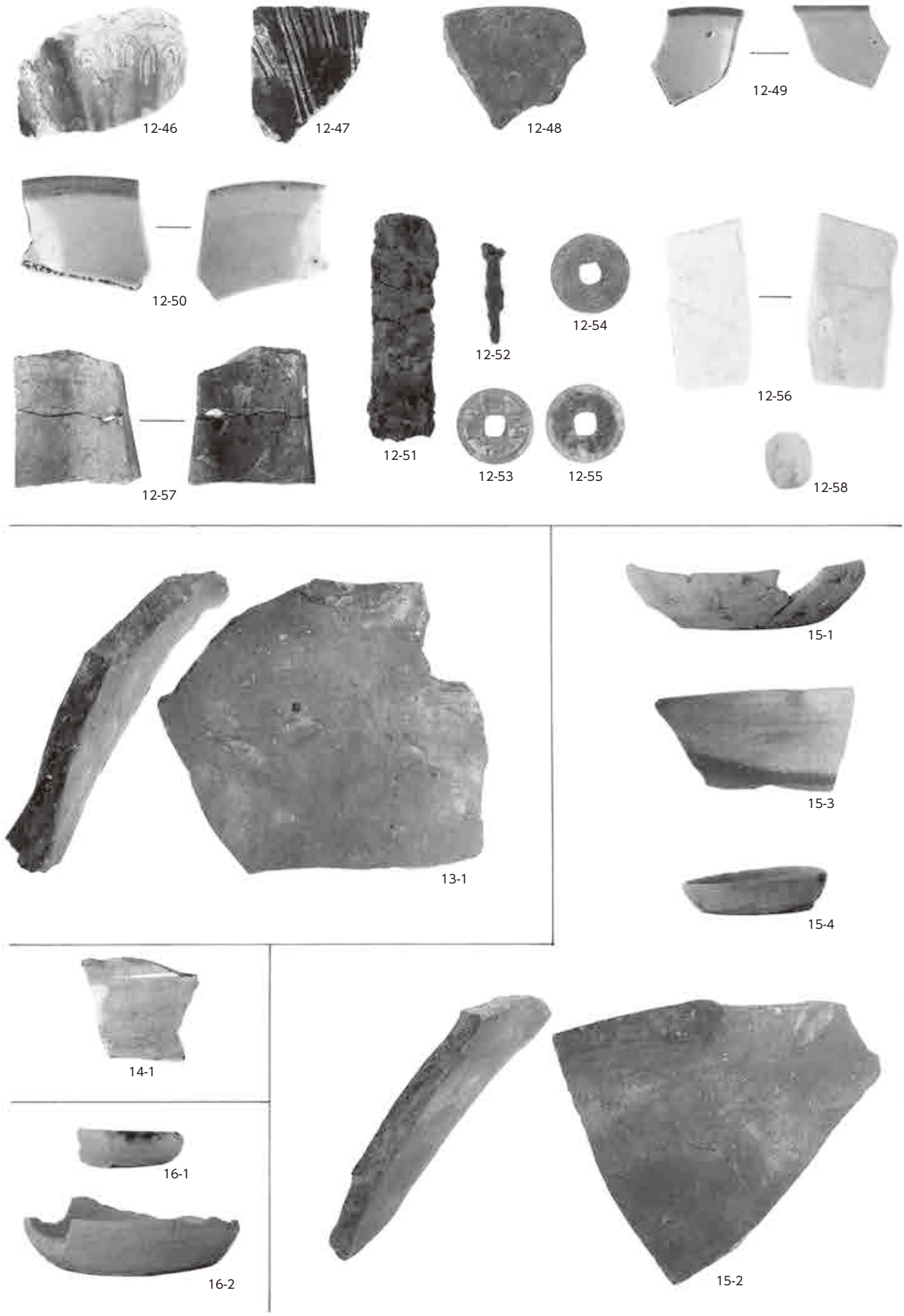

5-1
5-2
8-1
8-2
8-3
8-4
8-5
8-6
8-7
9-8
9-9
9-10
9-11
9-12
9-13
9-14
9-15
9-16
9-17
9-18
9-19
9-20
9-21
9-22
9-23
9-24
9-25
9-26
9-27
9-28
9-29
9-30
9-33
9-31
9-32

出土遺物１

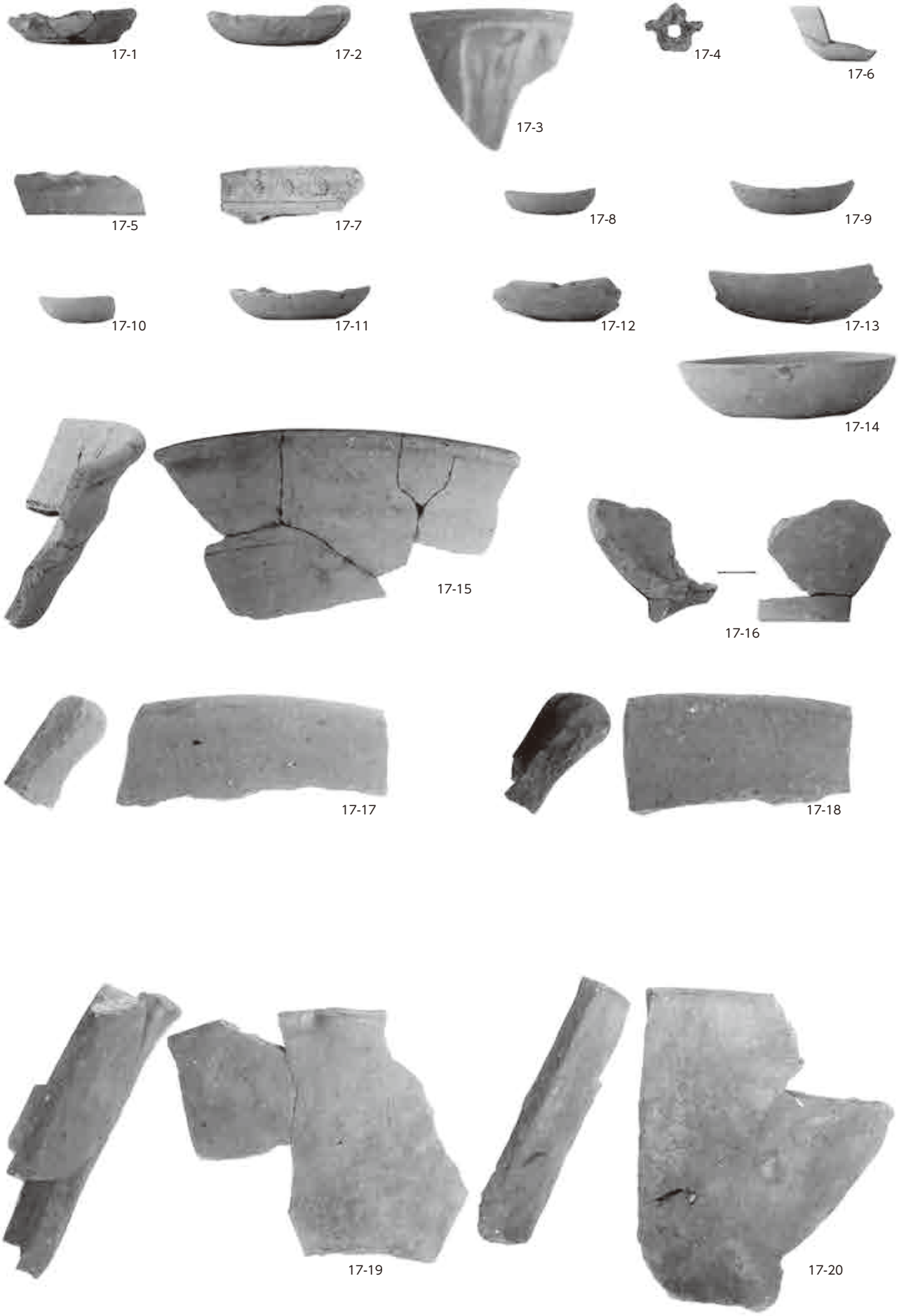
11-1
11-2
11-3
11-4
11-5
11-6
11-7
11-8
11-9
11-10
11-11
12-12
12-13
12-14
12-15
12-16
12-17
12-18
11-19
12-20
12-21
12-22
12-23
12-24
12-25
12-26
12-27
12-28
12-29
12-30
12-31
12-32
12-33
12-34
12-35
12-36
12-37
12-38
12-39
12-40
12-41
12-42
12-43
12-44
12-45

出土遺物２

図版12

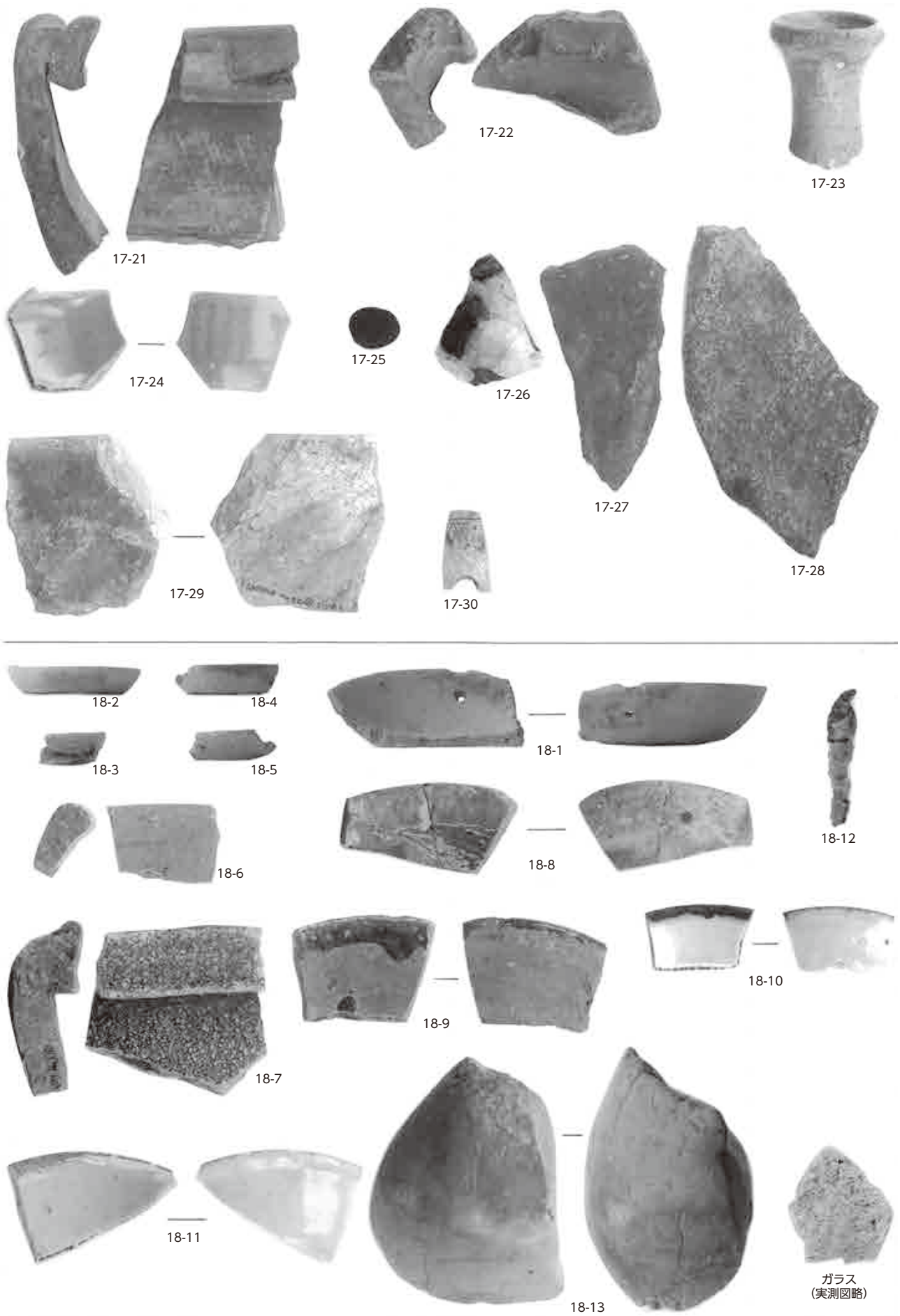

12-46
12-47
12-48
12-49
12-50
12-51
12-52
12-53
12-54
12-55
12-56
12-57
12-58
13-1
15-1
15-3
15-4
14-1
16-1
16-2
15-2

出土遺物３


17-1
17-2
17-3
17-4
17-6
17-5
17-7
17-8
17-9
17-10
17-11
17-12
17-13
17-14
17-15
17-16
17-17
17-18
17-19
17-20

出土遺物４

図版14


17-21
17-22
17-23
17-24
17-25
17-26
17-27
17-28
17-29
17-30
18-1
18-2
18-3
18-4
18-5
18-6
18-7
18-8
18-9
18-10
18-11
18-12
18-13
ガラス
(実測図略)

出土遺物５